らう。而して、孔子が周都（洛陽）を訪問したのは、『孔子家語』（觀周第十一）の冒頭に「孔子、謂二南宮敬叔一曰、吾聞、老聃（老子）博レ古知レ今、通二禮樂之原一、明二道德之歸一。則吾師也。」とあり、その結尾に「孔子見二老聃一、而問焉曰、甚矣、道之於レ今難レ行也。吾比執レ道。而今委レ質、以求二當世之君一、而弗レ受也。道於レ今難レ行也。老子曰、夫說者流二於辯一、聽者亂二於辭一。知二此二者一、則道不レ可二以忘一也。」とあるのによつて明白なる如く、老子に會見のためであり、その會見のための滯京中に看た金人（黃金製の形像）の背に、謂ゆる三緘銘（金人銘）があり、その銘文中に「强梁者不レ得二其死一」と云ふ文句が現はれて居たのであるが、私の考察によれば、この三緘銘の作者は、孔子の上京の年（周敬王三年・西洋紀元前五一七年）に、八十八歳で周の王室の內閣文庫に勤めて居た老子であつた樣に思はれる。三緘銘に含蓄されて居る思想、その思想の表現法が、全く老子の思想、及びその表現法に一致して居る事實と、當時、老子を外にして、三緘銘の作者に擬すべき思想家を發見し得ざる事實とに照せば、この私の推定は、必ずしも牽强附會の說とは云へないであらう。さすれば、この「强梁者不レ得二其死一」と云ふ文句は、僧德淸が「且人之所レ敎者、我亦未二嘗不一レ敎レ之也。惟人不二善敎一レ人。祇知レ增二益知見一、使二之矯矜恃レ氣、好爲二强梁一、殊不レ知下强梁者、不レ得二其死一。我唯敎レ人、以レ日損二其欲一、謙虛自守、以全二沖和之德一。是故吾將二以爲二敎父一。」と云つて居る通り、老子が、玆に

古語を引用したものと見ないで、老子が「强梁ならざるものが、その死を得る。」と云ふ自身の思想を表現した言葉と見るべきであらう。この見解によつて、この文句を英譯するならば、〔I〕"Since others are engaged in teaching, I am also engaged in it, (though what I teach differs from what is taught by them), He who lives by violence and physical strength can not die a natural death. Such is the principle of my teaching." とでもなすべきではあるまいか。○「人之所レ惡」が「人之所レ患」となり、「王公」が「王侯」となり、「以爲レ稱」が「以自稱也」となり、「人之所レ敎、我亦敎レ之」が「人之所二以敎一レ人、我亦我之所二以敎一レ人」となり、「爲二敎父一」が「爲二學父一」となつて居る異本もある。

評論　この第四十二章は、「道生レ一」の三言一句を以て、沖虛なる道の現象化を叙し、「一生レ二」の三言一句を以て、その一なる現象化の陰・陽二氣に分れることを云ひ、「二生レ三」の三言一句を以て、陰・陽二氣の交接に、その媒介作用をなす沖氣の發生を必要とすることを云つたものであるが、この沖氣は、梨俱吠陀の無有歌に於ける熱 Tapas（タパス）にも比すべきものである樣に思れる。要するに、この第四十二章の冒頭の思想は、

第四十二章

道(無)→有(現象)＜陰 陽＋沖氣→萬物

と云ふ様な形式になつて居るが、この形式の思想は、熱 Tapas が、有と無とを連接せしめ、それより愛 Kama が生じ、その愛 Kama が、識 Manas (宇宙人生の原子)の根本であると云ふ古代印度人の宇宙開發說に酷似して居る様に思はれる。而して、「人之所レ惡」以下の叙述は、前にも度度現はれて居た通り、老子の思想の要素をなして居る謙讓、雌伏の德を說示したものに外ならない。

第四十三章 (天下之至柔章第四十三)

本文 天下之至柔、馳二騁天下之至堅一、無有入二無間一。吾是以、知二無爲之有レ益也。不言之敎、無爲之益、天下希レ及レ之。

新讀方 天下の至柔は、天下の至堅を馳騁し、無有は無間に入る。吾は是を以て無爲の益あることを知るなり。不言の敎と無爲の益とには、天下これに及ぶこと希し。

新字解 ◎**至柔**——最も柔弱なるもの。◎**馳騁**——自分の任意に使役すること。◎**至堅**——最も堅固なるもの。◎**無有**——光線、電氣、空氣、瓦斯などの如き一定の形態を有せざるもの。◎**無間**——これは、蘇子由が「無間、無二中間罅隙可レ入之處一」と云つて居る通り、「普通の肉眼で、間隙なき様に見える所」の意。◎**不言之敎**——これは、言葉を以て人を敎訓するのではなく、無爲の德化を以て、人を薫陶することを云つたものである。

新譯 堅いものと堅いものとが相接すれば、必ず衝突して、雙方の調和を缺いでしまうにきまつて居るが、極めて柔弱なる水が、岩を堀り、石を穿ち、山を通じ、大地を濕ほすのを見ても、よく知れる通り、天下の至堅を自由に使役するものは、堅きものではなく、至柔そのものである。事物

の安定性、安全性は、その事物が、固體から液體に、液體から氣體にと、だんだん微妙なものに變化するにつれて、ますます、その度を增すのである。卽ち、光線、電氣、瓦斯の如きものは、よく、無間に透入して、人の把捉を免れることが出來るのである。この事實を見るにつけても、老子は、自我を主張せず、自己と環境との間に牆壁を設けず、自己を環境に沒入することを目的とせる無爲が、却て個性保存の妙諦であることを悟得するのである。世の中の人人のやつて居ることを見れば、自分にも實行の出來ない教訓や法規や、規則や、命令を、無暗に連發して、それで天下が泰平になるものと思つたり、色色な施設、計畫をして、それで國家が安康になるものと思つたりして、有言の限りをつくし、有爲の限りをつくして居るが、老子は、それが大嫌ひだ。老子の大好きなのは、不言の敎と無爲の益とであるが、この二つのものに優るものは、實際、天下には希いのである。

考證 ◻「**天下之至柔馳騁天下之至堅無有入無間吾是以知無爲之有益也**」と云ふ文句をヂヤイルスは〔G〕"The softest things in the world override the hardest. That which has no substance enters where there is no crevice. Hence I know the advantage of inaction."（世界に於て、最も柔かなるものは、最も堅きものを蹂躙し、形態なきものは、間隙なき所に入る。是を以て我は無爲の益を知るなり。）と英譯して居る。これは原文に忠實な譯ではあるが、私は、これを〔H〕"The gentlest thing in the world will control the strongest. What has no form will penetrate where there is no crevice. Through this I apprehend that inaction has advantages."とでもした方が、もつと原文に親しくなるではなからうかと思ふ。◻「**不言之敎無爲之益天下希及之**」と云ふ文句を、レッグは、〔I〕"There are few in the world who attain to the teaching without words, and the advantage arising from non-action."（不言の敎と無爲の益とを完成するものは、世界にすくなし。）と英譯し、ヂヤイルスは、〔G〕"Conveying lessons without words, reaping profit without action,—there are few in the world who can attain to this!"（言葉なくして敎訓を傳へることと、行爲なくして益を得ること——これを完成するものは、世界にすくなし。）と英譯して居る。これは「希レ及レ之」を「これを達成するものがない。」の意に解して譯したものと思はれるが、元來、及の字は、ある一定の地點に達し、更にそれを超過するの義を有する文字であり、玆にある及も、矢張「超越する」とか「優る」とかの意であるから「天下希レ及レ之」は、「天下に、これ（不言之敎、無爲之益）に優るものはない。」の意に解すべきである。今この見解によつて、この文句を英譯するならば、〔I〕"Teaching without words, (but with the exercise of virtue); the advantages arising from inaction,—there is nothing in the world superior to these."とでもなすべきであらう。

○「無有入二無間一」が「出二於無有一、入二於無間一」となり、「知二無爲之有一益也」が「知二無爲之有一益」となり、「天下希レ及レ之」が「天下稀レ及レ之矣」となつて居る異本もある。

評論 この第四十三章は、僧德清が「此承レ上、言二無爲之益一、以明二不言之教一也。」と云つて居る通り、無爲の現實的示現なる至柔は、よく天下の至堅、至剛を制し、無有は、よく天下に偏在し、その生存を最も安全になし得るものなることを云つたものである。而して、玆に「不言之教」とは、至柔（自我を沒却せし態度）と、無有（個性を氣化して環境に偏在せしめんとする努力）とを以て、現實生活に處することを云つたものに外ならない。

第四十四章（名與身章第四十四）

本文 名與レ身孰親。身與レ貨孰多。得與レ亡孰病。甚愛必大費、多藏必厚亡。知レ足不レ辱。知レ止不レ殆。可二以長久一。

新讀方 名と身とは孰れか親しきぞ。身と貨とは孰れか多なるぞ。得と亡とは孰れか病なるぞ。甚だ愛すれば必ず大いに費え、多く藏すれば必ず厚く亡ふ。足ることを知れば辱められず。止まることを知れば殆からず。以て長久なるべし。

新字解 ◎**名與身**——名聞と自己の身命と。◎**孰親**——これは、吳澄が「多、猶レ云レ所レ愛。」と云つて居る通り、「何れが、自分にとつて大切であるか。」の意。◎**身與貨**——自己の身命と財產と。◎**孰多**——これは、吳澄が「多、猶云レ所レ重。」と云つて居る通り、「何れが、自分にとつて、價値が多いか。」の意。この孰多は、數の多少に就て云つたものではなく、價値の優劣、大小に就て云つたものである。◎**得與亡**——これは、「名と貨とを得て、身を失ふのと、名と貨とを失つても、身を全ふするのと、何れが病であるか。」の意。病は、害とか、損とかの意。◎**甚愛必大費**——これは、名だけに係けて云つたものと解し得られないこともないが、沈一貫が「甚愛レ名者、失二其大名一。甚愛レ利

者、失二其大利一。甚愛レ生者、失二其大生一。」と云ひ、蘇子由が「愛甚則凡可二以求一レ之者、無レ所レ不レ爲。能無レ費乎。」と云つて居る通り、「名譽心に驅られ、貨殖に奔勞すること甚しければ、終には一番大切な生命を損失してしまふに至る。」の意に解する方が原意に親しい樣に思はれる。大費は身命の亡失を指したものである。◎**多藏必厚亡**――これは、蘇子由が「藏之多、則攻レ之者必衆。能無レ亡乎。」と云ひ、沈一貫が「財者民命之所レ關。多藏レ財則多妨レ命也。其亡能不レ厚乎。故多藏二於室一、必有二到請之憂一。多藏二於地一、必有二發掘之憂患一。」と云つて居る通り、「あまり澤山の財産を蓄藏すると、必ずその財産のために、一番大切の生命を損失するに至る。」の意。厚亡は、「身命の亡失」を指したものである。◎**知足不辱知止不殆可以長久**――これは、沈一貫が「知レ足者、樂二今有之已多一。知レ止者、懼二後增之爲一累。故可二以長久一。」と云つて居る通り、「現在、自己の所有せるもので滿足し、敢て貨殖のため、賣名のために、無理な努力をしないのが、自己の永存をはかる最善の策である。」の意。

新譯 世の中の人人が、名聞のため、貨財のために、危險至極な努力をして居るのには、老子は、もうあきれかへつて居る。諺に「命あつての物種」と云ふことがあるが、實際その通りに相違ない。元來、世の中の人人は、名聞と身命と、何れが大切なものであると思つて居るのであらうか。

名聞獲得のために、極度な努力をなし、名聞獲得と同時に死んでしまつて、それが何になることか。また、世の中の人人は、身命と財産と、何れが價値あるものと思つて居るのであらうか。財産のために、あたら身命を棒に振つてしまう謂ゆる資産家なるものが、世の中にはすくなからずあるが、彼等は價値判斷に盲目なる愚物である。名聞、財産を得て、身命を失ふのと、名聞、財産を失つても、身命を全ふするのと、何れが損になることであるか。申すまでもなく、後者の前者に勝ること千萬ではないか。名聞と貨財とを極度に愛する結果は、身命の喪失であり、貨財を過度に蓄積する結果も、同じく身命の喪失である。世の中で、個性の平安、幸福のために一番よいことは、足ることを知ることと、止まることを知ることである。足ることを知つて居さえすれば、他から辱かしめられる樣のことはなく、止まることを知つて居さえすれば、他から危害を加へられる樣のことはない。これが個性を長久に永存させる最善の方法である。

考證 ◎「**名與身孰親身與貨孰多得與亡孰病**」と云ふ五言三句を、レッグは、(L) "Or fame or life, which do you hold more dear? Or life or wealth, to which would you adhere? Keep life and lose those other things; keep them and lose your life:—which brings sorrow and pain more near." (名聞か生命か、汝は何れをより貴重とするや。生命か財寶か、汝は何れに依附するや。生命を保ち、

それらの他のものを失ふと、それらのものを保ち、汝の生命を失ふのと、何れが悲哀と苦痛とを、より近く將來するや。）と詩的に譯して居る。これは原意に觸れては居るが、私は〔I〕"Which is more important, fame or life? Which is more precious, life or wealth? Which is the greater evil, to gain fame and wealth and lose life, or to lose fame and wealth and keep life? とでも英譯すれば、原意に親しくなるではなからうかと思ふ。◎「**甚愛必大費多藏必厚亡**」と云ふ五言二句を、レッグは、〔L〕"Thus we may see, who cleaves to fame rejects what is more great; who loves large stores give up the richer state." （斯くの如く、名聞に執着するものは、より大なるものを棄て、大なる貯藏を好むものは、より富める狀態を失ふ。）と英譯して居るが、如何に考へて見ても、これは誤譯ではないかと思はれる。私の見解によれば、これは、〔I〕"Great ambition (to gain fame and wealth) results surely in loss of what is the greatest (in life); large store (of wealth) entails naturally the greatest destruction (on the owner)." とでも譯した方が、原意に親しくなる樣に思はれる。◎「**知足不辱知止不殆可以長久**」と云ふ四言三句を、ヂャイルスは、〔G〕"He who knows when he has enough will not be put to shame. He who knows when to stop will not come to harm. Such a man can look forward to long life." （自から充分に有する時を知る人は、辱しめられず。

自から止まる時を知る人は、害に到らず。かかる人は、長命を期待し得べし。）と英譯して居る。これは原意に觸れて居る適譯ではあるが、私の見解では、〔I〕"He who knows when he has enough and is satisfied and then stops trying to get more can enjoy long life." とでもすれば、一層原意に親しくなる樣に思はれる。○「得與レ亡」が「得與レ失」となり、「甚愛必大費」が「是故、甚愛必大費」となつて居る異本もある。

評論　この第四十四章は、僧德清が「此言ニ名利損レ生、誡下人當ニ知ニ止足一也。謂、世人祇知ニ名之可レ貪、故忘レ身以殉レ名。殊不レ知ニ名乃身外之虛聲一耳。與レ身較レ之、身親而名疏。故曰ニ孰親。一貨、利也。謂、世人祇知ニ利之可レ貪。故忘レ身以殉レ利。殊不レ知ニ利乃身之長物一耳。與レ身較レ之、身在則有レ餘。故曰ニ孰多。」と云つて居る通り、まづ第一に、名聞利養と身命とを比較して、前者の尊貴すべからざるものなるに反し、後者の尊貴すべきものなることを云ひ、次に「甚愛必大費、多藏必厚亡」の二句を以て、名聞利養に愛著し、惑溺すること甚大なれば、その必然の結果として、貴重なる身命を喪失するに至るべきことを警告し、最後に「知レ足不レ辱、知レ止不レ殆、可ニ以長久一」と云つて、知足と知止とが、身命保持の上に緊要なるものなることを力說したものであるが、この全章の思想は、大乘佛教の所說と全く一致して居る。手近な例をあげて見ると、『佛遺敎經』に「汝等比

丘、當レ知多欲之人、多レ求レ利故、苦惱亦多。少欲之人、無レ求無レ欲、則無二此患一。…行二少欲一者、心則坦然、無レ所二憂畏一、觸レ事有レ餘。常無レ不レ足。有二少欲一者、則有二涅槃一。汝等比丘、若欲レ脫二諸苦惱一、當レ觀二知足一。知足之法、卽是富樂安穩之處也。知足之人、雖レ臥二地上一、猶爲二安樂一。不知足者、雖レ處二天堂一、亦不レ稱レ意。不知足者、雖レ富而貧。知足之人、雖レ貧而富。不知足者、常爲二五欲一所レ牽、爲二知足者、所二憐憫一。」とあり、『梵網經菩薩戒序』には「一失二人身一、萬劫不レ復。」とある。今この老子の教訓と佛陀の教訓とを比較して見ると、老子の謂ゆる知足は、佛陀の謂ゆる知足と同じく、佛陀の謂ゆる少欲は、老子の謂ゆる知止と同じく、老子が身命を名と貨とよりも遙に勝れるものとして居るのは、佛陀が「一失二人身一、萬劫不レ復」と云つて居る思想と、その基調を一にして居る。而して、老子が、知足、知止を以て、個性の存續の長久なる所以であると云つて居るのは、佛陀が「有二少欲一者、則有二涅槃一」と云つて居るのと、これ亦その思想を同じくして居るものと見るべきであらう。

小乘佛教の思想の中には、この世を穢土と見る所からして、身命を輕視する傾向が存して居るが、大乘佛教に於ては、それと反對に、現實の個性——身命——を極度に尊重して居るのである。而して、この第四十四章に現はれて居る老子の思想の中にも、この大乘佛教の個性觀と等しく、現實の個性を、非常に尊重して居る風が、明白に見えて居る。

第四十五章 （大成若缺章第四十五）

本文 大成若レ缺、其用不レ弊。大盈若レ冲、其用不レ窮。大直若レ屈、大巧若レ拙、大辯若レ訥。躁勝レ寒、靜勝レ熱、清淨爲二天下正一。

新讀方 大成は缺けたるがごときも、その用は弊ならず。大盈は冲しきがごときも、その用は窮まらず。大直は屈せるがごとく、大巧は拙なるがごとく、大辯は訥なるがごとし。躁は寒に勝ち、靜は熱に勝つも、清淨は天下の正たり。

新字解 ◎**大成若缺**——これは、「道に卽したる完全なるものは、俗眼には缺損せるが如く見える。」の意。大成は、人格的に解すれば、道に卽せる聖人の德性のこと。非人格的に解すれば、『老子元翼』に「天地大成也。」とある通り、この宇宙の形態に就て云つたもので、若レ缺は、東・西・南・北・四維・上・下などのあるが如く見える樣なことを云つたものである。◎**其用不弊**——これは、人格的に云へば、道に卽せる聖人の德化の無盡なることを云つたものであり、非人格的に云へば、寒暑の交代、四時（春・夏・秋・冬）の變化の無限なるが如きことを云つたものである。弊は、盡、又は限の意。

◎**大盈若冲**——大盈は、人格的に云へば、「道に卽せる聖人の德性の絕大なる質量」、非人格的に云へ

ば、「絶大なる宇宙の内容」の意。若レ冲は、俗眼には冲虚（空無）に見えることを云つたものである。◎**其用不窮**――これは、蘇子由が「巧而不レ拙、其巧必勞。付二物自然一、雖レ拙而巧。」と云つて居る通り、「道に卽せる巧妙は、凡眼には拙劣の如く見える。」の意。◎**大辯若訥**――これは、蘇子由が「辯而不レ訥、其辯必窮。因レ理而言、雖レ訥而辯。」と云つて居る通り、「道に卽して說話する巧辯は、俗耳には訥辯の如く聞える。」の意。◎**躁勝寒靜勝熱**――これは、僧德淸が「且躁能勝レ寒、而不レ能勝レ熱。靜能勝レ熱、而不レ能勝レ寒。斯皆有レ所レ勝、則有レ所レ不レ勝。」と云ひ、吳澄が「陽之躁勝二陰之寒一。陰之靜勝二陽之熱一。亦相反而相爲レ用也。」と云つて居る通り、「寒中にでも、身心を躁擾させて居ると、寒氣に打勝つことが出來、酷暑の時にでも、身心を安靜させて居ると、炎熱に打勝つことが出來る。」の意であるが、これは、次の「淸淨爲二天下正一」と云ふ句を引出すために前置した言葉であつて、この言葉の裏面には、「躁勝レ寒」も「靜勝レ熱」も、何れも一方に偏したことであるから、道の根本義に卽しては居ないと云ふ意味が含まれて居る。◎**淸淨爲天下正**――これは、蘇子由が「唯泊然淸淨、不レ染二于一一、非レ成、非レ缺、非レ盈、非レ冲、

非レ直、非レ屈、非レ巧、非レ拙、非レ辯、非レ訥、而後無レ所レ不レ勝、可二以爲二天下正一矣。」と云つて居る通り、「中道にして一方に偏せざる淸淨性を保持するものが、天下萬民の正となり得る。」の意。「正」は、吳澄が「正、猶二正長之正一、猶レ言レ爲二天下君一也。」と云つて居る通り、君主の意と解しても、又は第二十二章、及び第二十八章に「天下式」とある式の意に解しても差支ない。

新譯 何物でも、冲虛無爲なる道に卽して居るものは、凡俗の眼から見れば、何處か缺けてゐるかの樣に見えるものである。仰いで天を眺めても、俯して地を看ても、矢張その樣に見えるが、道に卽せる聖人にしても、亦その通りである。併し、その缺けたるが如く見ゆる大成の、現實的作用は、實に無盡藏。春夏秋冬、四季折折のながめは、來る年も來る年も、絶えず續いて居るではないか。大盈と云へば、まづこの絶大なる宇宙であるが、この宇宙にはあらゆる事象が、豐富に包容されて居る。併し、これも凡俗の眼には、空無のからッぽにしか見えない。道に卽せる聖人の德性も亦その通り、俗眼には、少しも映じないのである。併し、その現實的作用は、實に無窮で、無限の內容を有して居るのである。道に卽せる正直は、俗眼には、屈曲せるが如く見え、道に卽せる巧妙は、俗眼には、拙劣極まるが如く見え、道に卽せる聖人の德性は、俗耳には、訥辯の如く聞える。世の中の凡俗は、法律上の判定が正直であり、日光の建築が巧妙美麗であり、代議士の演說が雄辯

であると思つて居るのであらうが、そんなものは、道の上から見れば、不直の極、不巧の極、訥辯の極である。兎角、世の中の人人は、直とか屈とか、巧とか拙とか、雄辯とか訥辯とか云つて、一方に偏するから、道を逸するのである。大道の中には、直と屈との相對が絶對化され、大巧の中には、巧と拙との相對が絶對化され、大辯の中には雄辯と訥辯との相對が絶對化されて居るのであるが、凡人の悲しさには、屈と拙と訥とし(ぼん)か認め得られないのである。陽に屬する躁擾は、陰に屬する寒に打勝つことが出來、陰に屬する靜寂は、陽に屬する炎熱を驅除することが出來るが、この躁(陽)にしても、靜(陰)にして、その作用は、一方に偏して居て、非常に局限されて居る。躁(陽)を以て熱(陽)を制することも、靜(陰)を以て寒(陰)を制することも出來ないではないか。道の窮極的理想は、あらゆる相對的觀念を離脱したる清淨無爲の絶對境に安住することである。この絶對境に安住して、はじめて天下の君主たり、天下の典型たる有資格者となり得るのである。

考證 ◎「**大成若缺其用不弊大盈若冲其用不窮**」と云ふ四言四句を、チャイルスは、〔G〕"He who is most perfect seems to be lacking; yet his resources are never outworn. He who is most full seems vacant; yet his uses are inexhaustible."（最も完全なる人は缺如せる如く見ゆ。されど、その機智はつきず。最も充實せる人は空しきが如く見ゆ。されど、その効用は、無盡藏なり。）と英譯して居る。これは原意を十分に得へて居るが、〔H〕"The greatest accomplishment seems to be lacking; yet its uses are inexhaustible. The greatest fulness seems empty; yet its uses are limitless."とでも譯すれば、一層原文に親しくなるではないかと思ふ。◎「**大若直屈大巧若拙大辯若訥**」と云ふ四言三句を、チャイルスは、〔G〕"Extreme straightness is as bad as crookedness. Extreme cleverness is as bad as folly. Extreme fluency is as bad as stammering."（極端なる正直は、屈曲せるものと等しく惡しし。極端なる巧智は、愚劣と等しく惡しし。極端なる雄辯は、訥舌と等しく惡し

し。）と英譯して居るが、如何に考へても、これは誤譯としか思はれない。卽ち、この場合の大の字は、大成・大盈の場合の大と同じく、道に卽せる絶大（絶對的大）の義であるから、これを"Extreme"（極端）と譯しては、誤解を招きやすい。また若の字を"is as bad as"（等しく惡しし）と譯してあるのも、原意を失つて居る。私の見解によれば、この四言三句は、〔I〕"The greatest straightness looks crooked; the greatest skill appears inept; and the greatest fluency looks stammering."とでもなすべきであらう。◎「**躁勝寒靜勝熱清淨爲天下正**」と云ふ文句を、レッグは、〔I〕"Constant action overcomes cold; being still overcomes heat. Purity and stillness give the correct law to all under heaven."（絶間なき動作は、寒に勝ち、靜なれば熱に勝つ。清淨と靜寂とは天下のす

べてに正しき典型を與ふ。)と英譯して居る。これは「清淨爲二天下正一」が「清靜爲二天下正一」となつて居る刊本に從つたもので、原文に親しき譯文と云へないこともないが、私の見解とは、多少の相違がある。今これを私の所見によつて英譯するならば、〔I〕"Constant action can overcome cold; stillness can overcome heat; (yet neither of them is akin to Tao.) One who holds to the primordial purity (of Tao) will become the master of the world." とでもなすべきであらう。○「其用不レ弊」が「其用不レ敝」となり、「大盈若レ沖」が「大滿若レ盅」となり、「大直若レ屈」が「大道若レ詘」となり、「靜勝レ熱」が「靖勝レ熱」となり、「清淨爲二天下正一」が「清靜爲二天下正一」又は「知二清靖一爲二天下正一」となつて居る異本もある。

評論 この第四十五章は、僧德清が「此言二聖人法レ天制レ用、與レ道爲レ一、故能勝レ物、而物不レ能レ勝、以申二明前章不言之敎、無爲之益一也。」と云つて居る通り、まづ、若レ缺・若レ沖・若レ屈・若レ拙・若レ訥の五句を以て、大成・大盈・大直・大巧・大辯の現實相、卽ち、その凡俗の眼耳に認めらるる形相を表示し、「躁勝レ寒、靜勝レ熱」の三言二句を以て、凡俗間に行はれて居る事書を、概括的に叙し、更に「清淨爲二天下正一」と云ふ六言一句を以て、その凡俗間に行はれて居る事實の一方に偏して居て、道的價値の乏しきこと暗示すると同時に、道に卽せる清淨(道的中道)の絕大なる價値と力說したものである。「躁勝レ寒、靜勝レ熱」と云ふ三言二句は、第二章に「有無相生、難易相成、長短相形、高下相傾、音聲相和、前後相隨。」とある思想と、その基調を一にして居るものと見るべきであらう。

第四十六章　（天下有道章第四十六）

本文　天下有レ道、却二走馬一以糞、天下無レ道、戎馬生二於郊一。罪莫レ大二於可レ欲、禍莫レ大二於不レ知レ足、咎莫レ大二於欲レ得。故知レ足之足、常足。

新讀方　天下に道あれば、走馬を却けて以て糞するも、天下に道なければ、戎馬は郊に生ぜん。罪は欲すべきよりも大なるはなく、禍は足ることを知らざるよりも大なるはなく、咎は得んと欲するよりも大なるはなし。故に、足ることを知るの足るは、常に足るなり。

新字解　□**天下有道**――これは、「天下が、老子の理想とせる冲虛無爲の道によつて治められて居る時には」の意。□**却走馬以糞**――これは、「戰爭に使用し得らるる樣な善馬も、戰爭の目的に使用する必要がないから、それを田畑の肥料（馬糞）を作る目的に使用する。」の意。併し、吳澄が「却、退也。走馬、善走之馬。糞車、糞載之車。古者每甸六十四、并皆出二戎馬一充レ賦。有道之世、各守二分地一、不二相侵戰一。故民間善馬、不二以服二戎車一、而退却賤二用之一、以服二糞車一而糞レ田也。」と云つて居るのは、「以糞」が「以二糞車一」となつて居る刊本に從つたものであらうが、若し、この吳澄の說に從ふならば、「以糞」は、「糞を積載せる車を牽かせる。」の意に解すべきであらう。（考證參照）

□**戎馬生於郊**――これは、戰爭の長時間に亙つて持續した場合のことを云つたもので、「軍馬が、本國で子を產まないで、交戰地で子を產む。」の意。郊は、敵と干戈を交へて居る交戰地のこと。□**可欲**――これは、第三章に「不レ見レ可レ欲」とある可レ欲と同じく、一般民衆の常に獲得せんと熱望して居る金殿玉樓、金銀珠玉の如きもののこと。□**罪・禍・咎**――罪は、社會的惡德、禍は、個人的禍害、咎は、禍を生成する惡しき動機のことであるが、何れも、等しく罪惡の意に解しても差支ない。□**知足之足常足**――これは、「安分、知足、知止に立脚せる滿足は、永久不變の滿足である。」の意。

新譯　天下に、冲虛無爲の道が行はれ、上も下も、その道に卽したる現實生活をなして居る時代には、軍馬に使用してもよい樣な善良な馬が生れても、それを戰爭の用には供せず、田畑の施肥用に使用するのである。實際、この樣な時代が太昔にはあつた。併し、今時の樣に、年から年中、戰爭ばかりして居ると云ふと、軍馬は自分の國內では子を產むことも出來ず、廣漠、荒涼たる戰場で出產せねばならぬと云ふ珍現象を生ずるに至るのである。世の中には、戰爭、殺人、强盜などの罪惡が、常に續發してゐるが、その罪惡の目的は、何であるかと云ふに、それは何れも金殿玉樓とか、高位顯官とか、金銀珠玉とか云ふもので、それを獲得したいばかりに、民衆は、そんな罪惡を敢行するのである。天下民衆にそんなものを見せびらかす――こんな罪なことがまたとあるものか。併し

民衆の方に、冲虛の道に卽せるものがあれば、そんなものを見せびらかされても、何ともないのであるが、不幸にして彼等の大多數は、足ることを知らない。それで、直にそれを欲しがる。欲すべきものが外にあり、不知足の心が內にあるものだから、彼等はその欲すべきものを得て、不知足心を滿足させんがために、それを我物にしようとする。そこで、戰爭、殺人、强盜と云ふ樣なものが行はれるに至るのである。欲すべきものの外的誇示、不知足心の內的存在、そのものを我物にしようとする執意、天下の罪惡、禍害は、この三つのものから釀成されるのである。困つたものだ。何と云つても、足ることを知つて滿足して居るのが第一だ。この滿足が、永久不變の滿足であつて、その滿足からは、罪も禍も咎も、決して生じないのである。

考證 ◘「**天下有道却走馬以糞**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"When the Tao prevails in the world, they send back their swift horses to(draw)the dung-carts."(道が世界に行はる時には、人人はその駿馬を送り返して屎尿車を牽かしむ。)と英譯し、ヂャイルスは、〔G〕"If Tao prevails on earth, horses will be used for purposes of agriculture."(若し道が地上に行はるならば、馬は農業の目的に使用せらるるならん。)と英譯して居るが、前者は「以糞」が「以糞車」となつて居る刊本に從ひ、後者は「以糞車」が「以糞」となつて居る刊本に從つたものと思はれる。レッグが、"send back"(送り返す)と云ふ動詞を使用して居るのは、却の字を「戰場から退却させる」の意に解したからのことと思はれる。沈一貫も「天下有レ道、則馬不レ用二於追奔逐北一、而還二却於田疇糞灌之事一。」と云ひ、吳澄も同意義のことを云つて居るから、この却の字に對するレッグの見解は誤謬とは云へないが、私の見解では、「却二走馬一以糞」は、「走馬を走馬として使用せず、それを農業用に使用する。」の意に解する方が原意に親しいではないかと思ふ。この見解によつて、この文句を英譯するならば、〔I〕"When the world is governed in accordance with Tao, horses are employed not for the purposes of war, but for the peaceful pursuit of agriculture."とでもなすべきであらう。◘「**天下無道戎馬生於郊**」と云ふ文句を、レッグが、〔L〕"When the Tao is disregarded in the world, the war-horses bred on the border lands."(道が世界に於て無視せられて居る時には、軍馬は邊境に子を產む。)と英譯して居るのは適譯である。◘「**罪莫大於可欲禍莫大於不知足咎莫大於欲得故知足之足常足**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"There is no guilt greater than to sanction ambition; no calamity greater to be discontented with one's lot; no fault greater than the wish to be getting. Therefore the sufficiency of contentment is an enduring and unchanging sufficiency."(慾望を是認するより大なる罪はなく、自己の天分に不滿足なるより大なる禍はなく、得んことを欲するよ

り大なる咎はなし。故に、足ることを知るの充足は、永久不變の充足なり。)と英譯して居る。可欲を "to sanction ambition" (慾望を是認する) と譯して居る所を見れば、彼はこれを「欲を可とする(欲望を是認する)」の意に解したものと思はれるが、この可欲は、第三章に「不レ見レ可レ欲」とある場合と同じく、「欲望の對象となる有形無形の事物」を指した言葉であつて、「慾望を是認する」の意ではない。今私の見解によつて、これを英譯するならば、(I) "There is nothing greater to become a cause of guilt than what tempts one's ambition; nothing greater to lead one to calamity than discontentment; nothing greater to harm one than the desire to try to acquire things. Therefore one who is contented with what he has can enjoy everlasting satisfaction." 又は (I) "No guilt is greater than ambition; no calamity is greater than discontentment, and no harm is greater than greed. Therefore one who is satisfied with his present lot can enjoy perpetural contentment." とでも譯すべきであらう。○「却二走馬一以糞」が「却二走馬一以播」となり、「戎馬生二於郊一」が「戎馬生二于郊一」となり、「咎莫レ大二於欲一得」が「咎莫レ懺二於欲一得」となり、「常足」が「常足矣」となつて居る異本もある。

平易譯 この第四十六章は、まづ冒頭に於て「天下有レ道、却二走馬一以糞、天下無レ道、戎馬生二於郊一」と云つて、道によつて、動いて居る社會相と、道によらずして、動いて居る社會相とを對比し、暗に老子時代に於ける天下の混亂爭鬪して、醜惡なる現象を呈して居ることを諷刺し、次に、その天下を混亂と爭鬪とに誘ふものは、外的には、金殿玉樓、高位顯官、金銀珠の存在であり、內的には、人間の不知足心と私有權に對する慾望とであることを道破し、最後に「故、知レ足之足、常足。」と云つて、道に卽せる知足の安全なることを力說したものである。而して、「却二走馬一」の却の字の中には、時世に對する老子の憤慨が、多少含まれて居る樣にも思はれる。

第四十七章　（不出戸章第四十七）

本文　不レ出レ戸知二天下一、不レ窺レ牖見二天道一。其出彌遠、其知彌少。是以、聖人不レ行而知、不レ見而名、不レ爲而成。

新讀方　戸より出でざるも天下を知り、牖より窺はざるも天道を見る。その出づること彌遠ければ、その知ることは彌少し。是を以て、聖人は行かずして知り、見ずして名に、爲さずして成すなり。

新字解　◎**不出戸知天下不窺牖見天道**――これは吳澄が「天下萬事萬物之理、皆備二於我一。故雖レ不レ出レ戸、而徧知二天道一者、萬理之一原、內觀而得。非レ如下在レ外之有レ形者、必窺レ牖而後見上也。」と云ひ、李息齋が「出而求二天地一者、求二其形一也。天地不レ可二以レ形盡一、而可二理盡一。」と云ひ、僧德清が、「聖人、性眞自足、則智周二萬物一、無二幽不レ鑒。故天下雖レ大、可二不レ出レ戸而知一。天道雖レ微、可二不レ窺レ牖而見一。以二其私欲淨盡、而無二一毫隔蔽一故也。」と云つて居る通り、道と契合して居る聖人は、科學的實驗によらず、ただ禪的內觀によつて、天下の事象を知り、天下の理法を悟つて居ることを云つたものである。◎**其出彌遠其知彌少**――これは、僧德清が「若夫人者、沈二瞑利欲一、向レ外馳求。以

レ利令二智昏一。故去レ性日遠、情塵日厚、塵厚而心益暗。故其出彌遠、其知彌少。」と云つて居る通り、心を外境に驅馳すると、その省察力は、ますます弱くなり、天下の事象を知り、天下の理法を悟ることは、ますます少なくなることを云つたものである。◎**不行見**――これは、「不レ窺レ牖」の意。◎**名**――これは明の字と同意義で、理法を明白にすること、又は理法に悟達すること。◎**不爲而成**――これは、僧德清が「道備二於己一、德被二群生一、可二不レ言而化一。」と云つて居る通り、無爲の化を以て、德化を成就することを云つたものである。

新譯　萬法唯識。宇宙人生のあらゆる事象、あらゆる理法は、個性の核子なる意志 Manas の開發であるから、あらゆる事象、あらゆる理法は、その根蔕は、人人各自の個性に攝受されて居るのである。この眞理を悟つて居る聖人は、世の中の科學者のする樣なことをして、天下、天道を觀測しようとはしない。戸外に出でず、自分の居室に默坐して居ても、チャント天下の事象の推移を知り、起つて窓口から顏を出さなくても、チャント天下の理法の運行を悟つて居るのである。兎角世の中の人は、自分達の心の中に、神も佛も、何もかも、あらゆるものが內在して居り、心外無別法であることに氣がつかず、徒に心外に向つて物を探して居るのであるが、實は、心が外部に出ればいつ出るほど、その智の內容は、ますます減少して來るのである。であるから、聖人は、戸口から出て

歩き廻りはしないが、それでチャント天下を知り、窓口から首を出して四方を見廻しはしないが、それでチャント天道を明かに悟得して居る。また、世の中の爲政家の好きな干渉主義の政治は毛頭もしないで、無爲を以て天下に臨んで居るのであるが、その治下にあるものは、それでチャント無事、平和に治まつて居るのである。

考證 「**不出戸知天下不窺牖見天道其出彌遠其知彌少**」と云ふ文句を、レッグは、〔E〕"Without going outside his door, one understands (all that takes place) under the sky; without looking out from his window, one sees the Tao of heaven. The farther that one goes out (from himself), the less he knows." (自己の戸の外に行かずして、天下に行はるるすべてのものを知り、自己の窓より外を眺めずして、天の道を見る。自己を離るること遠ければ、知ることはますます少なし。)と英譯し、ヂャイルスも、これと殆ど同意義に英譯して居るが、私の見解とは、多少相異して居る。オールドは、〔O〕"A man may know the world without leaving his own home. Through his windows he can see the supreme Tao. The further afield he goes the less likely is he to find it." (人は自己の家を離れずして、世界を知ることを得、自己の窓よりして、いと高き道を見ることを得べし。家を離るること、ますます遠ければ、それを見出すこと、ますます少なからん。)と英譯して居るが、

これは、如何に考へても、誤譯としか思はれない。私の見解によれば、これは、〔H〕"One, who is with Tao, can see what happens in the universe, though he is indoors, and comprehend the universal principles without peeping through the window. The farther one's reasoning goes astray outside, the less one's intelligence is accumulated." とでもなすべきであらう。□「**是以聖人不行而知不見而名不爲而成**」と云ふ文句を、レッグは〔L〕"Therefore the sages got their knowledge without travelling; gave their (right) names to things without seeing them; and accomplished their ends without any purpose of doing so." (是を以て、聖人は旅することなくして、彼等の智識を得、ものを見ることなくして、そのものに正しき名稱を與へ、目的を達する意志なくして、彼等の目的を達成したり。)と英譯し、ヂャイルスも、オールドも、これと大同小異の意義に英譯して居るが、何れも私の見解とは相異して居る。「不レ行而知」は、前の「不レ出レ戸知二天下一」を受け、「不レ見而名」は前の「不レ窺レ牖見二天道一」を受けたものであり、名の字は、『老子覈話』に考證してある通り、明の義を有する名の字であつて、事物に名稱を與へることではない。今この文句を、私の見解によつて英譯するならば、〔I〕"Therefore the sage comprehends things without going outdoors; he perceives them clearly though not looking at them; and accomplishes what he desires without effort." とで

もなすべきではあるまいか。○「知二天下一」が「可レ知二天下一」、又は「而知二天下一」となり、「見二天道一」が「可レ知二天道一」、「可二以知二天道一」、又は「而見二天道一」となり、「不レ行而知」が「不レ行而至」となり、「不レ爲而成」が「無レ爲而成」となつて居る異本もある。

評論 この第四十七章に含蓄されて居る老子の思想は、印度哲學に於ける瑜伽 Yoga 又は禪那 Dhyana の教理と類似點を有し、且つ「三界唯一心、心外無別法」、又は「大寂定門、融二今古去來之相一」と云ふ樣な華嚴の教理と密接なる關係を有して居る樣に思はれる。要するにこの章に於て、老子の力說して居る所のものは、肉眼を閉ぢ、佛教に謂ゆる佛眼（心眼）を開き、以て宇宙人生の絕對相を凝視すべきことに外ならないのである。

第四十八章（爲學日益章第四十八）

本文 爲レ學日益、爲レ道日損。損レ之又損、以至二於無一レ爲。無レ爲而無レ不レ爲。故、取二天下一、常以レ無レ事。及レ有レ事、不レ足二以取二天下一。

新讀方 學を爲むれば日に益し、道を爲むれば日に損す。これを損してまた損し、以て爲すなきに至る。爲すなくして而も爲さざることなきなり。故に、天下を取るには、常に事なきを以てす。事あるに及べば、以て天下を取るに足らざるなり。

新字解 ◎爲學日益――これは、蘇子由が「不レ知レ道而務レ學、聞見日多。而無二以一レ之、未レ免レ爲レ累也。」と云ひ、吳澄が「爲レ學者、患レ寡而務レ博。故日日有レ所二增益一。……惟無爲者、一事不レ爲。故能事事無レ不レ爲也。」と云つて居る通り、孔子の奬勵して居る樣な學問をすると、普通の考で云へば、その人の見聞はますます廣く、智識はますます增加して來ると云ふことを云つたものであるが、實は、それは、第四十七章にある「其出彌遠、其知彌少。」と云ふことに當るのである。◎爲道日損――これは、蘇子由が「苟一日知レ道、顧二視萬物一、無二一非一レ妄。去レ妄以求レ復レ性、是謂二之損一。」と云ひ、吳澄が「爲レ道者、自レ有而反レ無。故日日有レ所二減損一。」と云つて居る通り、道の修行者は、個性を

環境に沒入し銷融することに努力して居るのであるから、局外者から見れば、その人の行動は、すべて消極的に見え、個性そのものを日日に消損して居る樣に見えることを云つたものであるが、實は、それは個性の絕對化に努力して居るのである。◎**損之又損以至於無爲無爲而無不爲**——これは、吳澄が「爲レ道者、減二損其有爲之事一、損レ之、又損レ之、及二損レ之既盡、而無二復有一可レ損、則至二於無一爲也。」と云ひ、羅什が「是非俱忘、情欲一致、德與レ道合、至二於無爲一。已雖二無爲一、復二萬物之自然一。故無レ不レ爲也。」と云つて居る通り、老子の理想とせる道の修行者は、あらゆる有を、無へ無へと復歸させ、遂に道の窮極の無爲に達するのであるが、その無爲は、怠慢を意味する無動作のことではなく、絕對的自然の法のまゝに働くことを意味するのであるから、消極的に見える無爲は、實は絕對的有爲であることを云つたものであつて、絕對的否定の絕對的肯定に等しきことを道破した言葉である。◎**取天下**——これは、天下民衆を自己の統治下に置くこと。◎**爲事**——無爲より出でたる無爲的行動のこと。

解說 世の中には、一も學問、二も學問、何もかも學問で解決のつくものと思つて、日夜孜孜として、智識の蓄積に努力して居るものがある。なるほど、あの樣にして學問すれば、智識は、善いのも惡いのも、增益するに相違ないが、老子の理想として居る道の上から見れば、そんな智識には、

何等の價値もない。老子の道を修める者は、自己の客觀的擴大を企圖するのではなく、自己の個性を日日に銷融して、それを環境の絕對に沒入することに努力し、道の窮極の無爲に達することを以て、修行の目的として居るのである。が、無爲とは、寢て居て、人の衣食を持つて來てくれるのを待つて居ることではなく、あらゆる言行を、道の自然性に卽せしめて、自然のまゝに行住坐臥することであるから、要するに、絕對的無爲は絕對的有爲に外ならない。故に、天下の民衆を統一して、自己の德化の下に置かんとする者は、無爲に卽せる無事を以て、彼等に臨まなくてはならぬ。道の歩き方は勿論のこと、小便の仕方まで法律できめ、巡査に立番させると云ふ樣な、こせこせしたことで、何で天下が甘く治まるものか。そんなことでは、迚も天下民衆の心を得ることは不可能である。

考證 **「爲學日益爲道日損損之又損以至於無爲無爲而無不爲」**と云ふ文句を、ヂャイルスは、〔G〕The pursuit of book-learning brings about daily increase. The practice of Tao brings about daily loss. Repeat this loss again and again, and you arrive at inaction. Practice inaction, and there is nothing which cannot be done."（机上の學問の研究は、日日に增加を來す。道の實踐は、日日に損失を來す。この損失を反復せよ。さすれば無爲に達せん。無爲を實踐せよ。されば爲し能はざるもの

なきに至らん。)と英譯し、レッグも、これと大同小異の意義に英譯して居るが、何れも原意を傳へて居る樣に思はれる。併しオールドが、これを、〔O〕"Bodily and mental distress is increased every day in the effort to get knowledge. But this distress is daily diminished by the getting of Tao."(肉體的及び精神的苦痛は、日日に智識を得んとする努力によつて增加せらる。されど、この苦痛は、道を得ることによつて、日日に減ぜらる。)と英譯して居るのは、確に誤譯である。□「**故取天下常以無事及有事不足以取天下**」と云ふ文句を、ヂャイルスは、〔G〕"The empire has ever been won by letting things take their course. He who must always be doing is unfit to obtain the empire."(帝國は事物を自然の成行に放任することによつて取られたることとなし。常に有爲ならざるべからざる者は、帝國を取るに適せず。)と英譯し、レッグとオールドは、多少これとは異つた譯文を施して居るが、その中には、多少の誤解が含まれて居る樣に思はれる。私の見解によれば、この文句は、〔I〕"Therefore one who desires to govern the people must do so by means of inaction. One who indulges in the exercise of action is unfit to become their ruler."とでも譯すべきであらう。○「爲レ學」が「爲レ學者」となり、「爲レ道」が「爲レ道者」となり、「又損」が「又損レ之」となり、「無レ爲而無レ不レ爲」が「無レ爲則無レ不レ爲」となり、「故取二天下一」が「取二天下一」、又は「將二欲取二天下一者」となり、「不レ足二以取二天下一」が「又不レ足二以取二天下一矣」となつて居る異本もある。

評論 この第四十八章は、「學而時習レ之、不二亦說一乎。(學んで時にこれを習ふ。また說しからずや。)」(『論語』學而第一參照)と云つて、智識の蓄積を第一の緊要事として居る孔子の徒に對する諷刺の囁きであると同時に、また、老子の時代に於て、有爲の暴力を以て、天下の利權を掌握せんと狂奔して居た群雄に對する警告の叫びであるとも見るべきであらう。

第四十九章（聖人無常心章第四十九）

本文 聖人無二常心一、以二百姓之心一爲レ心。善者吾善レ之、不善者吾亦善レ之。德善矣。信者吾信レ之、不信者吾亦信レ之。德信矣。聖人之在二天下一、怯怯爲二天下一、渾二其心一。百姓皆注二其耳目一。聖人皆孩レ之。

新讀方 聖人には常の心なく、百姓の心を以て心となす。善なる者は吾これを善とし、不善なる者も吾またこれを善とす。德善なればなり。信なる者は吾これを信とし、不信なる者も吾またこれを信とす。德信なればなり。聖人の天下にあるや、怯怯として天下のために、その心を渾にす。百姓は皆その耳目を注ぐ。聖人は皆これを孩にす。

新字解 ◎**聖人無常心以百姓之心爲心**——これは、僧德清が「聖人之心、至虛無我。以二至誠一待レ物。曾無二一定之心一。但以二百姓之心一爲レ心耳。」と云ひ、李宏甫が「百姓有レ善有二不善一、而聖人皆善レ之。百姓有レ信有二不信一、而聖人皆信レ之。」と云つて居る通り、聖人の環境に對する融和性に就て云つたもので、常心は、「一定の形に固定した頑固なる氣分」の意。以二百姓之心一爲レ心は、百姓の心に容易に融和することを云つたものである。◎**德善矣**——これは「聖人の德性は、絶對的善の充實したものであるから（百姓の善も不善も、等しくその絶對的善の中に抱擁してしまうことが出來るのである。）」の意。◎**德信矣**——これも「德善矣」と同じ思想の言葉で、「（百姓の信も不信も、等しく抱擁してしまうことの出來るのは）、聖人の德性が絶對的信の充實したものであるからである。」の意。◎**怯怯**——怯の字には、靜寂の意もあるが、玆では、僧德清が「怯怯、猶二汲汲一也」と註して居るのに從ひ、孜孜と同じく「勉めて」、「勤勉して」、「一生懸命に」などの意に解すべきであらう。◎**渾其心**——これは、「以二百姓心一爲レ心」ことを云つたもので、渾は、聖人が、自己の心を百姓の心と渾一體にすること。◎**皆注其耳目**——これは、僧德清が「注レ目而視、傾レ耳而聽」と云つて居る通り、百姓が聖人の德化に薰陶せられて、何れも聖人に歸服することを云つたものである。（考證）參照）◎**孩之**——これは、僧德清が「無レ是無レ非、渾然不レ見レ有二善惡之跡一。皆以二淳厚之德一而遇レ之。若二嬰孩一而已。故曰皆孩レ之。若以二嬰孩一待二天下之人一、則無下一人可レ責二其過一者上」と云つて居る通り、聖人が百姓を遇する時には、その百姓を自分の子供同樣に取扱ふことを云つたものである。

新譯 世の中の人は、自分の考が一番善いときめ込んで、その考を以て他の人人を批判するから、自分の氣に入つた人は、天下に一人もないことになるのであるが、道に卽せる聖人の心は、そんな頑固なものではない。絶對的善、絶對的信に卽して居て、その寬容性も、その融和性も、實に

無限であるから、千差萬別、十人十色の百姓と、常に渾一體になつて居るのである。卽ち、善い百姓があれば、勿論、善い百姓としてそれと同和するが、よし善からぬ百姓であつても、矢張それを善い百姓としてそれと同和する。それは何故であるかと云ふに、聖人の德性は、絕對的善であるから、現象的に善と不善とに現はれて居ても、その相對性を沒却してしまつて、何れもその絕對の中に銷融してしまうからである。これと同じく、聖人は、信(まこと)ある百姓を信(まこと)あるものとして、これと同和することは勿論であるが、よし信(まこと)なき百姓であつても、矢張信(まこと)ある百姓として、それと同和する。それは何故であるかと云ふに、聖人の德性は、絕對的信の充實せるものであるから、相對的に信となり不信となつて現はれて居るものを、何れもその絕對の中に圓融させてしまうからである。斯の如く、聖人が天下を治むる時には、如何にしたならば、自己の心を天下の人心と渾一體(ワンネス)になし得るかと、一生懸命に、その實現のために努力して居るのであるから、その德化に浴せる萬民は、示されたる聖人の典型に注目し、敎へられたる聖人の言葉に傾聽するのであるが、聖人は萬民を我が子の如く取扱ひ、如何なることをしても、杓子定規な考を以て、彼等を叱責する樣のことはしないのである。

注釋 ◎「聖人無常心以百姓之心爲心」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"The sage has no invariable

mind of his own; he makes the mind of the people his mind." (聖人には不變の心なし。民衆の心を以て彼自からの心となす。)と英譯し、ヂャイルスは、〔G〕"The sage has no hard and fast ideas, but he shares the ideas of the people and makes them his own." (聖人には不情にして固定せる觀念なし。彼は民衆の觀念を共有し、それを彼自身の觀念となす。)と英譯して居るが、これは何れも原意を傳へて居る樣に思はれる。◎「**善者吾善之不善者吾亦善之德善矣**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"To those who are good (to me), I am good; and to those who are not good (to me), I am also good;—and thus (all) get to be good." (我に對して善なるものには、我は善なり。我に對して不善なるものにも、我は亦善なり。斯くして、すべては善となるなり。)と英譯して居る。これは多分「德善矣」が「得善矣」となつて居る刊本に從つたものと思はれるが、私の見解とは相異して居る。この吾の字は、文字上では第一人稱代名詞であるが、實は、聖人に係(かか)る彼。(第三人稱代名詞)の意であるから、この文句は、私の見解では、〔I〕"Those who are good, he receives as good; those who are not good, he also receives as good. This is because his goodness is unlimited." とでも譯したならば、原意に親しくなるかと思ふ。◎「**信者吾信之不信者吾亦信之德信矣**」と云ふ文句を、レッグは、前の文句に於けると同一筆法で、〔L〕"To those who are sincere (with me), I am sincere;

and to those who are not sincere (with me), I am also sincere;—and thus (all) get to be sincere.'

(我に對して誠實なるものには、我は誠實なり。我に對して不誠實なるものにも、我は誠實なり。斯くして、すべては誠實になるなり。)と英譯して居る。これも「德信矣」が「得信矣」となつて居る刊本に從つたものと思はれるが、この吾も、前文句の場合の吾と同じく、聖人に係り、彼の意であるから、私の見解では、この文句も、〔I〕"Those who are faithful, he receives as faithful; those who are not faithful, he also receives as faithful. This is because his faithfulness is unlimited."とでも譯したならば、多少は原意に親しくなるではあるまいかと思ふ。◎**「聖人之在太下慄慄爲天下渾其心」**といふ文句を、レッグは、〔L〕"The sage has in the world an appearance of indecision, and keeps his mind in a state of indifference to all."(聖人は優柔不斷の樣子をして世に處し、自からの心意をすべてに對して、無貪著の狀態に置くなり。)と英譯して居る。これに王弼が「是以、聖人之於天下、歙歙焉心無所主也。爲天下渾心焉。意無所適莫也。」と註して居る解釋に從つて譯したものと思はれるが、今玆に擧げた原文から見れば、この英譯は、よほど原意を離れて居る樣に思はれる。ヂャイルスは、この文句を、〔G〕"Living in the world, he is apprehensive lest his heart be sullied by contact with the world."(世界に處するに、彼は世界との接觸によつて汚されんことを恐れて、注意深くして居る。)と英譯して居るが、これはレッグの譯文よりも、尙ほ一層原文を離れて居る樣に思はれる。私の見解によれば、慄慄は、ある異本に「慄慄爲」とある通り、「渾其心」の渾(動詞)に係る副詞であり、「爲天下」は、「其心」(聖人の心)の「渾」にせられる目的物を指したものであるから、私は、この全文句は、〔I〕"When the sage lives in the world, he diligently endeavours to bring his heart into harmony with the world."とでも譯すべきであると思ふ。渾は、李宏甫が「聖人則合天下之人、而渾爲一心。」と云つて居る通り、渾和の義であつて他のものと渾一體になることを意味するのである。◎**「百姓皆注其耳目聖人皆孩之」**と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"The people all keep their eyes and ears directed to him, and he deals with them all as his children."(民衆は彼等の目と耳とを、彼の方に向け、而して彼は、彼等すべてを、自からの子供の如く取扱ふ。)と英譯し、ヂャイルスは、〔G〕"The people all fix their eyes and ears upon him. The sage looks upon all as his children."(民衆は彼等の目と耳とを彼の上に注ぐ。聖人は自からの子供の如く、すべてを見る。)と英譯して居るが、これは何れも、原意を十分に傳へて居る樣に思はれる。沈一貫は「百姓皆注其耳目、聖人皆孩之」と云ふ文句に「彼百姓方竦耳瞪目、設靈機、礪智刃、岌々然將從事於鉤鉥析亂之途、而聖人遇之、不以口舌爭、不以聲色

加。」一如二始孩之童一而已。始孩之童、無二不善不信一也。」と註して、「百姓皆注二其耳目一」を「百姓が思慮分別を用ひて、色色な惡事をする。」の意に解し、「聖人皆孩レ之」を「(そんな惡事をしても)聖人は、これを無邪氣な子供の惡戯と同樣に見て、何等の干渉もしない。」の意に解して居る。この解釋は、意義の上からは、よく通じて居るが、原文の文字の上から見れば、恐らくは誤解であらう。○「以二百姓之心一」か「以二百姓心一」となり、「德善矣」が「得レ善矣」となり、「德信矣」が「得レ信矣」となり、「惄惄」が「歙歙焉」、「惔惔焉」、「怵怵焉」、又は「渫渫焉」となり、「惄惄爲二天下一渾二其心一」が「歙歙焉。爲二天下一渾渾焉」となつて、「歙歙焉」が、上の「在二天下一」と共に一句になり「在二天下一歙歙焉。爲二天下一渾渾焉。」と云ふ風に讀む樣になり、「皆孩レ之」が「皆咳レ之」となつて居る異本もある。

評論 この第四十九章は、道に卽せる聖人の善惡の標準は、超時間的であり、また超空間的であるから、永遠より永遠に流れつつある時間の一刹那にも足らざるこの短き現實生活に於て、また無限大の容積を有する宇宙の一粟粒程にも足らざるこの小き一國土に於て、世俗の常になしつつあるが如く、徒らに狹小、淺薄なる自己の識見を以て、民衆の言行を判定し、これは善である、あれは惡であると云ふ樣な見解は、聖人は、決して下さず、彼は、自己の有せる絕大なる善と信との裡に、

すべての民衆を抱擁し、その民衆に臨むに、父母のその子女に於けるが如き無限の慈愛を以てするのであることを叙したものである。

第五十章　（出生入死章第五十）

本文　出レ生入レ死。生之徒、十有レ三。死之徒、十有レ三。民之生、動之二死地一、亦十有レ三。夫何故。以二其生レ生之厚一。蓋聞、善攝レ生者、陸行、不レ遇二兕虎一。入レ軍、不レ避二甲兵一。兕無レ所レ投二其角一、虎無レ所レ措二其爪一、兵無レ所レ容二其刃一。夫何故。以二其無二死地一焉。

新讀本　生を出れば（これ）死に入るなり。生の徒は、十に三あり。死の徒は、十に三あり。民の生んとして、動すれば死地に之く（もの）、また十に三あり。それ何の故ぞ。その生を生とすることの厚きを以てなり。蓋し聞く、能く生を攝する者は、陸行するも、兕虎に遇はず。軍に入るも、甲兵を避けずと。兕はその角を投ずるところなく、虎はその爪を措くところなく、兵はその刃を容るるところなき（がため）なり。それ何の故ぞ。その死地なきを以てなり。

新字解　◎**出生入死**――これは、「一息切斷すれば、直に死である。」の意。（〈考證〉參照）◎**生之徒**――生命を重んずる人人のこと。徒は、徒黨の意。（〈考證〉參照）◎**十有三**――「十人の中に三人ある。」の

意。（〈考證〉參照）◎**死之徒**――生命の保持に不注意なる人人のこと。◎**人之生動之死地**――これは、生存中、現實生活に執著する結果、生命保持のために、種種なる人工を施して、却て死をはやめる樣な人人に就て云つたものである。◎**夫何故**――これは、「生命保持のために、種種なる人工を施して、長壽ならんことに努力する人が、却て不意に死する樣のことのあるのは、何故か。」の意。◎**生生之厚**――これは、「生命を過重し、現實生活に執着しすぎる。」の意。◎**蓋聞**――「嘗て（かう云ふことを）聞いた樣に記憶して居る。」の意。◎**攝生**――これは、生命保持の上に、濫りに人工を加ふることなく、自然の法に則つて生活すること。◎**甲兵**――甲冑と兵戈。◎**兕**――これは、『老子元翼』に「兕、音似。山海經、兕出二湘水南一、蒼黑色。爾雅、形如二野牛一。一角重千斤。」とある通り、野牛の一種。角は一本で形は象に似て居ると云ふことである。◎**投・措・容**――投は、角でつき倒すこと。措は、爪でかきむしること。容は、刃をさしこむこと。◎**無死地**――これは、「生と死とを一如視して居るから、別に死の境界と云ふものはない。」の意。

新譯　人間は、いくら偉いこと云ひ、いくら强がつても、一息切斷すれば、直にこれ死である。世の中には、死を怖れて生命を重んじて居る人が、十人に三人位はある。また死ぬことを何とも思はないで、暮して居る者も、十人に三人位はある。而して、また現實生活に執著し、死ぬのが厭さ

に、舶來の强壯藥を飲んだり、朝鮮の苦い人參をねぶつたり、堅い松の實をかぢつたりして、一生懸命に人工長命法を實行して居るものもあるが、そんな人は、それがために、却て不意死にをする。この種の人も十人に三人位はある。長命しようとして努力して死ぬとは、それこそ「人參を喰つて首を吊る」樣な話て、一向合點がゆかぬが、これは一體どうしたことであらうか。イヤ、それは別に不思議なことではない。生を生とし、長命法を講じさへすれば、何時までも生きて居ることの出來るものの如く妄信して、藥餌を重んじすぎるからのことである。曾て、老子はこの樣なことを聞いたことがある樣に記憶して居る。それは、道に卽して善く攝生の法を知り、その自然の法に則つて生活して居るものは、曠野を通つても兕虎の害に遇ふ樣のことはなく、また戰場を過ぎても、甲冑を着、兵戈を執つて居るものから害を蒙る樣のことはないと云ふ言葉である。これは、その樣な大人物に向つては、兕もその角で突くことが出來ず、虎もその爪で搔きむしることが出來ず、刀劍もその刃をたてることが出來ないと云ふ意味である。それは、またどうしたことかと云ふに、その樣な大人物は、謂ゆる生死解脫の大聖人であつて、生と死とを一如視して居るから、如何なる境遇に立つても、道のままであり、自然のままであつて、凡俗の眼に映ずる死地と云ふものは、彼等生死解脫の大聖人の眼中には、ないからのことである。

考證 ◎「出生入死」と云ふ四言一句を解して、蘇子由は「性無二生死一。出則爲レ生、入則爲レ死。」と云ひ、『老子元翼』には「出、謂二自レ無而見一於有一。入、謂二自レ有而歸一於無一。」と云つて居る。レッグが、この句を英譯して、〔L〕"Men come forth and live; they enter (again) and die."（人は出でて生じ、再び入つて死す。」として居るのは、多分、この句を蘇子由の見解と同樣に見たものと思はれるが、私は、この句は、沈一貫が「生死對待、出二於生一卽入二於死一、可レ不レ愼レ諸。」と解して居る通り、老子が人生の無常迅速なることを警告した言葉と見、これを「出息の入息せざる所に死あり。」の意に解するのを正しいと信ずる。この見解によつて、この句を英譯するならば、〔T〕"The moment we depart from life death begins" 又は 〔T〕"Departting from life, there we find the entrance to death." 又は〔T〕"When life ends, death begins," とでもなすべきであらう。◎「**生之徒十有三死之徒十有三**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"Of every ten three are ministers of life (to themselves); and there are ministers of death."（十中の三は、彼等自身に對して、生命の徒なり。而して三は死の徒なり。）と英譯し、"Ministers of life"（生命の徒）とは、「健康に有害なる內外の事物を避けるもの」の意であり、"Minister of death"（死の徒）とは、「病原となり、生命を縮める原因となる樣なものを欲求するもの」の意であると云ふ意味の脚註を施して居る。これは、沈一貫が「天

下之人而觀レ之、重レ生者十有三。不レ重レ生者十有三。」と云つて居るのと同じく、原意に觸れて居る正解であるが、私は、これを〔I〕"Three in every ten value what is pertaining to life; three in every ten value what is leading to death." 又は、〔I〕"There are three in every ten who value life; there are three in every ten who disregards life." と譯したなら、一層原意に親しくなるではないかと思ふ。オールドは、この文句を、〔O〕"The gates of life are thirteen in number; and the same are the gates of death." (生の門は、數に於て十三あり。死の門も、數に於て同じし。) と英譯して居る。これは『韓非子』(卷六「解老」) に「人之身、三百六十節、四肢九竅、其大具也。四肢九竅二十有三者。十有三者之動靜、盡屬二於生一焉。屬之謂レ徒也。故曰、生之徒十有三、死之徒十有三者。至二其死一也、十有三者、皆還而屬二之於死一。死之徒亦十有三。故曰、生之徒十有三、死之徒十有三。」とある說に從ひ、この文句は、生は、四肢 (兩手・兩脚) と九竅 (二目・二耳・二鼻・一口・一陰門・一陰又は一陽) の活動であり、死は、その消滅であると云ふことを意味するものと解したらしく思はれるが、これは原意に親しい見解とは思はれない。徒の字を、レッグは、"Ministers" (徒) と譯して居ても、彼の脚註によれば、これは徒黨の意であるが、オールドは、この徒の字を、生理的器官の意に解して居る樣に思はれる。◎「民之生動之死地亦十有三」と云ふ文句を、レッグは、〔I〕"There are also three in

every ten whose aim is to live, but whose movements tend the land (or place) of death." (また、生くることを目的とせるも、死地に傾向せるもの、十に三あり。) と英譯して居る。これは動の字を「動すれば」と解せずに、「動く」と云ふ動詞と見た上の譯と思はれるが、これでも大體に於ては、原意に觸れて屆る。併し、沈一貫が「雖レ重レ生而不レ知二生レ生之道一。動輒墮二於死地一、而不レ知レ避者、亦十有三。何乎言二動之死地一。蓋生レ生可也、而生レ生太厚、則愛而反爲レ害。所謂害生二於恩一也。呂不韋曰、出則以レ車、入則以レ輦、務以自佚、命レ之曰二招蹷之機一。肥肉厚酒、務以相彊、命レ之曰二爛腸之食一。靡曼皓齒、鄭衞之音、務以自樂、命レ之曰二伐性之斧一。室大則多陰。臺高則多陽。多陰則蹶、多陽則痿……以レ此長生得乎。」と云つて居る通り、「民之生、動之死地」は、奢侈、贅澤や、過度の藥餌などの、却て短命を招致するものなることを云つたものであるから、これは、〔I〕"There are some who value their life, but are likely to be in danger of death (owing to their extravagance) and whose number is also three in every ten." 又は、〔I〕"There are also three in every ten who resort to extravagant means to prolong their life, but are likely to be in danger of death by the very extravangance." とでも譯したならば、一層原意に親しくなるではないかと思ふ。◎「蓋聞善攝生者陸行不遇兕虎入軍不避甲兵兕無所投其角虎無所措其爪兵無所容其刃」と云ふ文句を、レ

ツグは、〔L〕"But I have heard that he **who** is skilful in managing the life entrusted to him for a time travels on the land without having to shun rhinoceros or tiger, and enters a host without having to avoid buff coat or sharp weapon. The rhinoceros finds no place in him into which to thrust its horn, nor the tiger a place in which to fix its claws, nor the weapon a plaee to admit its point."（併し、我は聞きしことあり。暫く託せられ居る生命を支配して行くことに於て巧妙なる人は、陸行するも犀牛又は虎を避けることなしに旅し、軍に入るも革服、精鋭なる武器を避けることを要せず。彼の身體に於て、犀牛は角を突き刺すべき所を見出さず。虎は爪を措く所を見出さず。武器はその尖端を容るる所を見出さざるなり。）と英譯して居る。これは大體に於て、原意を傳へては居るが、私の見解とは、多少の相異がある。「陸行、不レ遇二兕虎一、入レ軍、不レ避二甲兵一」と云ふ文句を、ヂャイルスは、〔G〕"…. when travelling abroad, will not flee from rhinoceros or tiger; when entering a hostile camp, he will not equip himself with sword or buckler."（….遠近を旅する時に、犀牛又は虎を避けず。敵軍に入る時にも、刀劍又は防禦物を以て身支度をせず。）と英譯して居る。多分これは、この文句が「陸行、不レ避二兕虎一、入レ軍、不レ被二甲兵一。」となつて居る刊本に從つたものと思はれるが、「不レ遇二兕虎一」は「兕虎の方から、こちらを害するために出て來ない。」の意であり、「不レ避二甲兵一」は「こちらが、甲兵を恐怖しない。」の意であるから、私の見解によつて、この全文句を英譯するならば、〔L〕"It reminds me of the ancient sayings;—'One who knows well the secret of life, when travelling abroad, will not be met by a rhinoceros or a tiger; he will pass over the battle-field with no fear of the weapons. This is because no rhinoceros can find a place in him wherein to fix its horn; no tiger can find a place in him wherein to fix its claws; and no sword can find a place wherein its point can be thrust." とでもなすべきであらう。而して、「蓋聞」によつて引用されて居る古語は「善攝レ生者、陸行、不レ遇二兕虎一、入レ軍、不レ避二甲兵一」だけであつて、「兕無レ所レ投二其角一、虎無レ所レ措二其爪一、兵無レ所レ容二其刃一」の六言三句は、その古語の意を、老子自身が說明した言葉である。◎「**夫何故以其無死地焉**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"And for what reasons? Because there is in him no place of death."（而して、そは如何なる理由によるか。彼には死地なきが故なり。）と英譯して居るのは、適譯であるが、私は、これを〔I〕"How can this be true? It is because he is invulnerable and beyond the reach of death." とでも譯したならば、意氣が一層明白になるかと思ふ。○「民之生、動之二死地一」が「人之生動之二死地一」又は「而民之生、生而動、動皆之二死地一」となり、「夫何故」が「夫何哉」となり、「以二其生一生之

厚」が「以二其生レ生之厚一也」となり、「夫何故」が「夫何故也」となり、「以二其無レ死地一焉」が「以二其無レ死也」となつて居る異本もある。

評論 この第五十章の前半に對しては、支那に於ても、日本に於ても、古來、學者間に種種なる異說が行はれて居るが、その多くは、牽强附會にして、頗る難解の說である。卽ち、「出生入死」を「出れば生、入れば死」の意に解して、これを『淮南子』(卷七「精神訓」)に「禹南省レ方濟二于江一。黃龍負レ舟、舟中之人五色無レ主。禹熙笑而稱曰、我受二命於天一、竭レ力而勞二萬民一、生寄也、死歸也。何足二以滑レ和。視レ龍猶二蝘蜒一。」とある「生寄也、死歸也」と同意義の言葉と見たり、「十有三」を「十又三」の意に解して、これを『淮南子』(卷七「精神訓」)に「人亦有二四肢、五臟、九竅、三百六十六節一」とある四肢と九竅のことであると見たり、その他色色なる見解が行はれて居るのであるが、私の眼から見れば、それらの異說は何れも徹底して居ない。

「出レ生入レ死」とは、生命の存續を尊重し、現實生法を道的に最も有意義に送らしめんがために、老子が、一般民衆に警告した言葉であつて、暗に末尾の「以二其無二死地一焉」と云ふ言葉に照應して居る。次に老子は、天下に於ける一般の民衆を、その死生觀の上から、三種に分類して居る。卽ち、その三種は、生之徒(生命の存續を尊重して居る人人)と、死之徒(衞生などに不注意にして、生命の存續を輕視して居る人人)と、生レ之厚き徒(現實生活に執着しすぎて、無暗に死を恐怖して居る人人)とであるが、生之徒を一般の智者と見るならば、死之徒は、世俗の凡人であり、生レ生之厚き徒は、大厦高樓、金殿玉樓に、耿溺生活を營んで居る謂ゆる富豪の如きものを云つたものと見なことが出來る樣に思はれるが、『淮南子』(卷七「精神訓」)に「夫人之所下以不レ能レ終二其處命一而中道夭中於刑戮上者何也。以二其生レ生之厚一」とあるのは、正しく、この生レ生之厚き徒に就て云つたものであり、この言葉の次に「夫惟能無二以レ生爲一者、則所二以脩得レ生也。」とあるのは、老子の謂ゆる「善攝レ生者」に就て云つた言葉であつて、「脩得レ生」は「陸行、不レ遇二兕虎一、入レ軍、不レ避二甲兵一」る結果より生ずる「無死地」に就て云つたものである。而して、この「善攝レ生者」とは、「無二以レ生爲一」卽ち道の自然性なり無爲性なりに卽して、生死一如の境に住する者のことであつて、大乘佛敎の理想とせる生活も、畢竟この境界に外ならない。

換言すれば、「出レ生入レ死」は、世俗の死生觀に就て云つたものであり、三種の民衆は、その死生觀の上に於て、ある者は生之徒となり、ある者は死之徒となり、また、ある者は生レ生之厚き徒となつて居るのであるが、老子の理想は、その何れにも存して居ない。彼は無二死地一くして「脩得レ生」る「善攝レ生者」を以て、道に卽して歩める者と斷定して居るのである。古來この第五十章を、『老

子』全經八十一章中に於ける最も難解の章の一と見做して居るのは、この章に對する見解の不徹底のためである。私の所見によれば、この第五十章の意義は、一讀明瞭であつて、老子の思想は、はッきりと表現されて居るのである。

第五十一章（道生之章第五十一）

本文 道生レ之、德畜レ之、物形レ之、勢成レ之。是以、萬物無レ不二尊レ道、而貴レ德。道之尊、德之貴、夫莫二之爵一、而常自然。故、道生レ之、德畜レ之、長レ之、育レ之、成レ之熟レ之、養レ之、覆レ之。生而不レ有、爲而不レ恃、長而不レ宰　是謂二玄德一。

新讀方 道はこれを生じ、德はこれを畜ひ、物はこれを形し、勢はこれを成すなり。是を以て、萬物は道を尊び、德を貴ばざるはなきなり。道の尊き、德の貴きは、それこれを爵することなくして、而も常に自から然るなり。故に、道はこれを生じ、德はこれを畜ひ、これを長じ、これを育し、これを成し、これを熟し、これを養ひ、これを覆ふなり。生ずるも有せず。爲すも恃まず。長ずるも宰せず。これを玄德と謂ふ。

辨字解 ◻**道生之**――之の字は、萬物を指したもので、この三言一句は「道が萬物の本源である。」の意。◻**德畜之**――「萬物の發育は、道の屬性なる德の作用による。」の意。◻**物形之**――これは、「萬物各自固有の個性に隨つて、その各自の形態が形成せられる。」の意である。◻**勢成之**――これは、「萬物各自が、その置かれた場合、境遇によつて、各自の形體を完成せられる。」の意で、同一種の大根

でも、蒔かれたる時候の寒暖や、土地の肥瘦によつて、その形體に相異の生ずる樣なことを云つたものである。◎**夫莫之爵而常自然**――これは、「本體なる道と、その作用なる德との尊貴は、人爲的に尊貴にされたのではなく、無限より無限に連亘して、自然的に尊貴である。」の意で、道と德との絶對的に尊重なることを云つたものである。◎**覆**――これは、覆被、覆育の義で、事物をその上から防禦して保護すること。◎**生而不有爲而不恃長而不宰是謂玄德**――これは、第十章にある同一の語句と同意義である。

新譯 天地萬物の起原は、道であつて、その天地萬物を發育させるものは、道の道德的作用なる德化であるが、事物は各自の固有せる特質によつて色色と形態化し、また、その置かれたる時間的、空間的差異によつて、その形態の上にも、種種なる異相を生ずるのである。道と德とが、萬物の父母であり、母である以上、萬物にして、その父母たる道と德とを尊貴しないものは一物もないが、その道と德との尊貴は、人爲的に制定され、賦與せられて居る尊貴とは異なり、永遠より永遠に亘つて、常に自然に、絶對的に尊貴であるのである。故に、道は萬物の起原となり、德はその成育者となり、斯く道と德とが契合して、萬物を成育し、成長させ、成熟させ、養成し覆育するのである。併し、道は、その生成された萬物を我物ともせず、作爲された萬物に依賴する樣のこともなく、その成長したものを、自己の支配下に置くと云ふ樣なこともしないのである。玄妙なる德とは、正に斯の如き德化のことを謂ふのである。

考證 ◎「**道生之德畜之物形之勢成之**」と云ふ三言四句を、レッグが、〔E〕"All things are produced by the Tao, and nourished by its outflowing operation. They receive their forms according to the nature of each, and are completed according to the circumstances of their condition." (萬物は道によつて生ぜられ、それより流出せる作用によつて養育せらるるなり。萬物は各自の天性によつてその形態を與へられ、その置かれたる境遇の事情によつて完成せらるゝなり。) と英譯して居るのは、原文に忠實なる適譯であるが、ヂャイルスが、〔G〕"Tao produces all things; its virtue nourishes them; its nature gives them form; its force perfects them." (道は萬物を生じ、道の德は萬物を養育し、道の天性は萬物に形態を與へ、道の勢力は萬物を完全にす。)と英譯して居るのには、原文に對する多少の訳解が含まれて居る樣に思はれる。道と德とは、創造者の方に就て云つたものであり、物と勢とは、被創造者の方に就て云つたものであつて、物は「道の天性」"Nature of Tao"を意味しないし、また勢も「道の勢力」"Force of Tao"を意味して居ない。物は、事物各自の個性を意味し、勢は、その事物の存在する環境に就て云つたものであるから、この文句は、レッグの見

解通りに見るのが、正しいのである。□「**是以萬物無不尊道而貴德道之尊德之貴夫莫之爵而常自然**」と云ふ文句を、レッグは、〔I〕"Therefore all things without exception honour the Tao. and exalt its outflowing operation. This honouring of the Tao and exalting of its operation is not the result of any ordination, but always a spontaneous tribute."（故に、萬物は一の例外もなく、道を尊び、その流出せる作用を貴ぶ。この道を尊ぶこと、德を貴ぶことは、命令の結果にあらずして、常に自然の讃美なり。）と英譯して居る。これは、爵の字が命の字になつて居る刊本に從つたものと思はれるが、爵が命となつて居ても、意義の上に於て大差はないから、このレッグの譯文のままで、原意は十分に傳へられて居る。□「**故道生之德畜之長之育之成之熟之蓋之覆之**」と云ふ文句を、レッグは、〔I〕"Thus it is that the Tao produces (all things), nourishes them, brings them to their full growth, nurses them, completes them, matures them, maintains them, and overspreads them."（斯の如く、萬物を生じ、それを養ひ、それを十分に成長せしめ、それを育て、それを完成し、それを熟し、それを支持し、それを覆ふものは、道なり。）と英譯して居るが、これは、この原文が「故、道生レ之、畜レ之、長レ之、育レ之、成レ之、熟レ之、亭レ之、覆レ之。」となつて居る刊行に從つたものと思はれる。今茲に擧げた原文のままで、私の見解通りに英譯するならば、〔I〕"Thus it is that Tao creates all things,

while Virtue nourishes them. It is Tao and Virtue that bring up all things, feed them, complete them, ripen them, nurse them, and protect them," とでもなすべきであらう。□「**生而不有爲而不恃長而不宰是謂玄德**」と云ふ四言四句は、第十章の〔考證〕中に考證して置いた通りであるが、今この全文を、私の見解通りに英譯するならば、〔I〕"Tao produces (all things), but does not possess them as its own; it acts without expectation of reward for whatever it does; and it brings up all things, but it does not subordinate them to its control. This is called the mysterious Virtue."とでもなすべきであらう。○「尊レ道」が「遵レ道」となり、「夫莫二之爵一」が「夫莫二之命一」となり、「故、道生レ之、德畜レ之」が「故、道生レ之畜レ之」となり、「成レ之、熟レ之、養レ之、覆レ之」が「亭レ之、毒レ之、蓋レ之、覆レ之」となつて居る異本もある。

評論　この第五十一章は、大體に於て、第二章の後半（萬物作而不レ辭。生而不レ有。爲而不レ恃。功成而不レ居。夫惟不レ居。是以不レ去。）と、第十章の末尾（生レ之畜レ之。生而不レ有。爲而不恃。長而不レ宰。是謂二玄德一。）とに現はれて居る老子の思想の反復であるが、玆に彼が、この宇宙に於ける道と德とが、事物の創成の原動力であることを力說して居るのと同時に「物形レ之、勢成レ之」と云つて、事物の個性と、その環境の勢力とを認めて居る點は、『老子』の中に於て、この章以外の何

れの章にも現はれて居ない新らしき思想であつて、これを佛教の教理に照らして見ると、老子の謂ゆる道は、萬法の絶對相なる不變眞如に當り、德は、その現象化の隨緣眞如に當り、物は、事物各自の業Karmaに當り、而して、勢力は、業Karmaをして現實の成果たらしむる緣に當る樣に思はれる。

第五十二章 （天下有始章第五十二）

本文 天下有レ始、以爲二天下母一。既得二其母一、以知二其子一、復守二其母一、沒レ身不レ殆。塞二其兌一、閉二其門一、終レ身不レ勤。開二其兌一、濟二其事一、終レ身不レ救。見レ小曰レ明、守レ柔曰レ强。用二其光一、復二歸其明一、無レ遺二身殃一。是謂二襲常一。

新讀方 天下に始ありて、以て天下の母たり。既にその母を得て、以てその子を知り、復してその母を守らば、身を沒するも殆からざるなり。その兌を塞ぎ、その門を閉づれば、身を終るとも勤れず。その兌を開き、その事を濟さば、身を終るとも救はれざるなり。小を見るを明と曰ひ、柔を守るを强と曰ふ。その光を用ふるも、その明に復歸すれば、身に殃を遺すことなし。これを襲常と謂ふなり。

新字解 ◎**天下有始**――これは、第一章に「無名二天地之始一」とある通り、天下萬物の本源は、虛無であることを云つたものである。◎**爲天下母**――これも、第一章に「有名二萬物之母一」とある通り、無（本體）が開發して、有（現象）となることを云つたものである。◎**其子**――天下萬物の意。◎**復**――

これは「また」の意ではなく、復歸の意である。□**沒身不殆**――これは、第十六章にあるこれと同一の語と同義で、道に卽せる者の個性の永存に就て云つたものである。□**塞其兌閉其門**――この語に對して、沈一貫は「故、聖人愼下其所二以出一之者上。人之有レ口、家之有レ門、皆所二以出一也。塞レ之閉レ之、以守二其母一。」と云つて、兌も門も、何れも口を意味するものと見、この三言二句を、言語を愼しむ。」の意に解して居るが、僧德清は、兌と門とを解して、「兌爲レ口、門乃眼耳」と云つて居る。何れにしても、これは『老子元翼』に「兌、口也。所二以兌出入一也。人之有レ口、猶二室之有一門。皆喩下物之所二以從出納一者上。塞而閉之。藏二有於無一、守レ母也。參同契云、耳目口三寶、閉塞勿二發通一、兌口勿二以談一。」とある通り、口を閉塞して、思想の放散を防ぎ、耳目を閉ぢて、心猿の外境に馳走することを止め、以て精氣を心內に蓄積充滿することを云つたものである。□**終身不勤**――これは、一生涯、身心の平和、安靜を保持することを云つたもの。不勤は、第六章に「用レ之不レ勤」とある不レ勤と同じく、疲弊・困憊・消耗などのなきこと。□**開其兌**――これは、單に口のみならず、口・耳・目の三器官を濫用するの意に解すべであらう。□**濟其事**――これは、身心を勞役し、耳・目・口の三門を無暗に開き、世俗の事に干與ること。□**終身不救**――これは、吳澄が「凡人有レ事、必須レ有レ言。每日開レ口而言、以成二濟其應接之事一、則氣耗而至二於匱一、終身不レ可レ救也。」と云つて居る通り、一生

涯、平和、幸福、安泰の境地に安住することが出來ないことを云つたものである。□**見小曰明守柔曰强**――小も柔も、何れも道の屬性であつて、小は、第十四章に「視レ之不レ見、名曰レ夷。」とある夷と同義。柔は、第十章に「專レ氣致レ柔、能如二嬰兒一乎。」とある柔と同義。而して、この四言二句は、李息齋が「古之至人、保二其身一而身存者、用二此道一也。人之患、在下於不レ謹二其小一、不レ養二其微一。若自レ小而謹レ之、自レ微而養レ之、雖レ小必明、雖レ微必强。故曰、見レ小曰レ明、守レ柔曰レ强。」と云つて居る通り、道の屬性なる小（夷）と柔とに卽して、現實生活をなす者が、道の眞理を知れる明智者であり、道の屬性に則れる强者であることを云つたもので、見レ小は、微細なるものも道の權化であるの理を悟り、それを輕視せざると同時に、自から大たるを欲せず、小を以て任じて居ること。守レ柔は、處世上に於て、常に强たることを欲せず、環境に對して、柔の態度を保持すること。□**用其光復歸其明**――これは、李息齋が「明者本也。光者明之所二自出一也。元明爲レ本、其末分而爲二視聽覺觸一者、皆其光也。道自レ本流レ末。學自レ末求レ本。故曰、用二其光一、復二歸其明一。」と云ひ、沈一貫が「光者明之用。明者光之體。」と云つて居る通り、冲虛なる道の小（夷）を體得したる明智の活用なる光を以て、世に處しても、常に本源の明智に復歸し、それと離れざる樣にすることを云つたものである。□**襲常**――この襲は、第二十七章に「襲明」とある襲と同義であるから、襲常は、蘇子由

が「其常性、湛然相襲而不レ絶矣。」と云つて居る通り、「絶對的に永久不變なる恒存」の意に解すべきである。

新譯 天地萬物の元始は、確にあるが、それは冲虛（無）なる道である。その冲虛（無）なる道が現象化して、有となり、その有が天地萬物の母胎となつて居るのである。既に人間は、その母胎たる有の中に生存し、その母胎より開發したる萬物の存在せることを知つて居るのであるが、自然に反抗して、自然を破壞し、それを征服するのが文明であるなんか云つて、無暗に大きな、無暗に高い建築をしたり、山嶽を崩壞して索條鐵道を敷設したりなんかして居ると、必ず何時かは人間が、自然に征服されてしまう時節が到來するのにきまつて居る。であるから、人間は常に、本源の冲虛（無）に卽せる母に復歸して、それと離れない樣にしてさえ居れば、よし、その人の肉體は、死すとも、その人の道的個性は永存するのである。而して、復歸してその母を守るとは、畢竟何を意味するのであるかと云ふに、それは下らぬことを喋りたてて、利巧振つて居るその口を塞ぎ、見聞を廣くして馬鹿智慧袋を大きくしようとするその目も耳も閉ぢてしまつて、心の眼と心の耳とを以て、宇宙人生を靜觀し、靜聽することである。斯くの如き道的生活をして居れば、一生涯、安泰、靜謐なる暮しをして行くことが出來るのである。然るに、世の中の人間は、實に奇妙なもので、何

の役にもたたないことを話し廻つたり、下らぬことを見歩いたり、馬鹿なことを聞き歩いたりして、それが思想善導とか、精神修養だとか云つて居る。人間もこの位に迷つてしまへば、たすかる見込みはない。一生涯、迷妄の夢を見て居るばかりである。小（夷）は、道の一屬性であり、柔もまた道の一屬性であるが、道的明智ある者とは、この小を見、小を行ふ所の人のことであり、道的强者とは、この柔に卽し、柔を行ふ所の人のことである。人間の口による思想の表現や、耳目による知見の活用は、要するに明智の光りであるが、人間は、この現實生活に於て、その光を活用するにしても、常にその本源なる道的明智に復歸して、見聞覺知、すべて道を離れない樣にしなければならない。斯くすれば、自分の身に禍殃の及ぶことはなく、實に安全この上もないことである。絶對的永存とは、實にこのことに外ならないのである。

考證 ◎「**天下有始以爲天下母既得其母以知其子復守其母沒身不殆**」と云ふ文句を、ジャイルスは、〔G〕"The world has a first cause, which may be regarded as the mother of the world. When one has the mother, one can know the child. He who knows the child and still keeps the mother, though his body perish, shall run no risk of harm."（世界には第一原因あり。それは世界の母と見做さるべし。人はその母を有する時に、その子を知ることを得るなり。その子を知り、尙ほその

母を守る者は、假令身は沒するとも、被害の危險を冒すことなし。)と英譯し、レッグも、これと殆ど同意義の意譯を施して居るが、何れも私の見解とは、多少相異して居る。「天下有レ始、以爲二天下母一」は、「天下には起原があり、それは沖虛(無)であつて、それから母(有)が生ずる。」の意であり、「既得二其母一、以知二其子一」は、「人間が既にその母(有なる創造)の中に存在して居て、その子(萬物)を熟知して居る。」の意であり、「復守二其母一」は、母の分裂なる子(萬物)にのみ執著せずに、本源の無に復歸し、且つその無の有に現象化した原始の創造狀態を離れないことを云つたものであるから、この見解によつて、この文句を英譯するならば、〔I〕"The universe has its origin (non-existence), from which the mother (creation) arose. The mother having been created, her children (all things) are known. When one returns to the origin and keeps the mother one will become eternal though his body perish." とでもなすべきであらう。◎「**塞其兌閉其門終身不勤**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"Let him keep his mouth closed, and shut up the portals (of his nostrils), and all his life he will be exempt from laborious exertion." (彼をして口を塞ぎ、彼の鼻孔の門を閉ぢしめよ。さすれば、彼は一生涯、勞役を免るるならん。)と英譯して居る。これは原文に忠實な譯と云ふべきであらうが、〔I〕"One who keeps his mouth, eyes and ears closed, (in order

to concentrate inwardly) can enjoy life without vexation." とでも譯したならば、原文の意義が、今少し明瞭になるではあるまいかと思ふ。◎「**開其兌濟其事終身不救**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"Let him keep his mouth open, and (spend his breath) in the promotion of his affairs, nd all his life there will be no safety for him." (彼をして口を開き、彼の事務の振興のために、その氣息を費やさしめよ。さすれば、彼の一生涯に於ては、彼のために一の安全もあらざるべし。)と英譯して居る。これも原文に忠實な譯ではあるが、〔I〕"One who keeps his mouth, eyes and ears open, and is concerned with secular affairs, can not be free from troubles through out his life." とでも譯したならば、原文の意氣が、今少し明瞭になるではあるまいかと思ふ。◎「**見小曰明守柔曰强**」と云ふ四言二句を、レッグは、〔L〕"The perception of what is small is (the secret of) clear-sightedness; the guarding of what is soft and tender is (the secret of) strength." (小なるものを知覺することは、明の秘密にして、柔軟なるものを守ることは、力の秘密なり。)と英譯して居る。これは、原文には忠實であるが、意義が不鮮明である樣に思はれる。私の見解によつて、これを英譯するならば、〔I〕"One who perceives things invisible is called a person with the brightest intelligence of Tao; one who keeps the calmest attitude of mind is called a person with the strongest

power." とでもなすべきであらう。◎「用其光復歸其明無遺身殃是謂襲常」と云ふ文句を、レッグは、(L) "Who uses well his light, reverting to its (source so) bright, will from his body ward all blight, and hides the unchanging from men's sight." (輝ける自己の光明の本源に復歸して、その光明をよく使用するものは、自己の身體より、すべての害毒を防ぐべし。而して、人人の視覺より不變のものを祕するならん。)と、詩的に英譯して居るが、私の見解とは相異して居る。今これを私の見解通りに英譯するならば、(H) "Though one uses in life one's light, ability and intelligence, one can preserve oneself from calamity, by returning and holding to the bright-sightendness of Tao. This is called the eternal being," とでもなすべきであらう。○「以爲天下母」が「可以天下母」又は「可以天下母」となり、「既得其母」が「既知其母」となり、「以知其子」が「復知其子」となり、「見小曰明」が「見小日明」となり、「是謂襲常」が「是謂習常」となつて居る異本もある。

評論 この第五十二章は、まづ「天下有始、以爲天下母」と云ふ二句を以て、天地萬物の本源が、冲虛(無)であり、天地萬物は、その冲虛(無)の現象的に開發したものであることを斷言し、次に、その開發せる現象の中に居ても、その原始的純朴性を保持することによつて、「沒身不

殆」る幸福を享有することの可能なることを云ひ、次に、その現象化なる現實生活に於ても、「終身不勤」ることを欲するものは、活力、精力の內的集中に努力し、猥りに世智辯聰の盲動をなすべきにあらざることを說き、次に、活力、精力の內的集中をはからずして、徒に世智辯聰に走るものは、「終身不救」る禍害を招致するに至ることを說き、而して、最後に、道に卽せるものの、當然踏むべき道と、その實踐躬行によつて享有し得らるる所のものとを示したものである。

第五十三章（使我介然章第五十三）

本文 使ニ我介然有レ知、行ニ於大道一、唯施是畏。大道甚夷、而民好レ徑。朝甚除、田甚蕪、倉甚虛。服ニ文綵一、帶ニ利劍一、厭ニ飲食一、財貨有レ餘。是謂ニ盜竽一。非道哉。

新讀本 我をして介然として知どることありて、大道を行はしめんとするも、ただ施すことをこれ畏る。大道は甚だ夷かなるも、而も民は徑を好むなり。朝は甚だ除し、田は甚だ蕪れ、倉は甚だ虛し。文綵を服し、利劍を帶び、飲食に厭き、財貨は餘あり。これを盜竽と謂ふなり。非道なるかな。

新字解 ◎**介然**――『老子元翼』に、この介然の二字を解して、「介然、確然也。」とあるのは、『孟子』（盡心章句下）に「山徑之蹊、間介然用レ之而成レ路。爲ニ間不レ用、則茅塞レ之矣。」とある介然と同意の介然と見たものであらうが、茲にある介然は、その意義の介然ではなく、僧德清が「介然、猶ニ些小一。乃微少之意。蓋謙辭也。」とある通り、有レ知に係る副詞で「少しく」の意であるが、茲では「暫らく」の意に解すべきであらう。◎**有知**――この知は、知事の知と同しく、主司（つかさどること）の意で、有レ知は、「天下の施政に參與する。」の意。◎**唯施是畏**――この句に註して、蘇子由は「體道者、無レ知無レ行、無レ所ニ施設一、而物自化。今介然有レ知而行ニ于大道一、則有ニ施設建立一、非ニ其自然一。

有レ足レ畏矣。」と云つて居る。この註解によれば、この四言一句は「（介然として知ることありて、大道を行ふ樣のことは、不自然であり、道の眞諦に背反し居ることであるから、）老子は、唯おそろしくて、そんなことには、手が出せない。」の意であるが、僧德清は、この四言一句を解して、「老子意謂、使下我少有レ所ニ知識一、而欲も行ニ大道於天下一、奈何天下人心奸惡可レ畏。而將レ施ニ之於誰一耶。」と云つて居る。この見解によれば、この四言一句は、老子が時世の險惡相を凝視し、老子の時代に、大道の適用を受けるに値する樣な氣の利いた人間は一人も居ないことを諷刺したものである。蘇子由の見解にも、僧德清の見解にも、一理はある樣に思はれるが、私の所見によれば、施は、「知どることありて、大道を行ふこと」を指したものであるから、この四言一句は、前句を承けて、「そんなことをさせようとするものがあつても、そんな非道なことは、老子は眞平御免だ。」の意に解するのが、穩當である樣に思ふ。◎**大道甚夷而　好徑**――こゝは、蘇子由が「大道夷易、無レ有ニ險阻一。世之不レ知者、爲ニ迂遠一、而好レ徑、以求レ捷。故凡舍ニ其自然一、而有レ所ニ施設一者、皆欲レ速也。」と云つて居る通り、大道は、謂ゆる「至道無難」で、人人の脚跟下になり、平坦此上なきものであるのに、天下の民衆は、その平坦な道を歩むことを欲せず、危險なる徑路や邪路を通りたがることを云つたものである。◎**朝甚除**――これは、天下の民衆が、徑路や邪路を通ることを好む所より生ずる結果を云つ

たもので、僧德清が「民心邪僻、不レ由ニ於大道一、皆好レ徑矣。民好レ徑、則敎化衰。敎化衰、則奸惡愈甚。奸惡愈甚、則法益嚴。故曰ニ朝甚除一。除、謂レ革ニ其弊一也。且法令滋彰、賊盜多有。是以、朝廷之法、日甚嚴。而民因レ法作レ奸。」と云つて居る通り、朝廷の法規の極端に嚴格になることを云つたものである。除ば、僧德清の見解の如く、弊害を除革するの意に解しても、又は治の意に解して、法規、訓令の完備を意味するものと見ても差支ない。◎**倉甚虛**――これは、民衆が着實、正直なる產業に從事することを好まない所から生ずる結果を云つたもので、謂ゆる恒の產（生活の資料）の缺乏すること。◎**文綵**――これは官吏の制服に就て云つたもので、あやかざりのある美服のこと。◎**厭**――これは、饜の字と同義で、飽滿すること。◎**有餘**――澤山に所有して居ること。◎**盜竽**――これは政府の官吏を極端に罵詈した言葉で、「泥坊の親分」、又は「泥坊の先生」の意。竽は『韓非子』（卷六「解老」）に「竽也者、五聲之長者也。故、竽先則鐘瑟皆隨。竽唱則諸樂皆和。」とある通り、笛に似た樂器のことであるが、玆では、「樂長」の意に解して、盜竽（泥坊の指導者）と云つたものである。◎**非道**――老子の理想とせる道に背反すること。

新譯 この亂麻よりも尙ひどひ天下の統治に閉口してしまつて、この老子に、まア、チョットでもよいから、天下の統治者となつて、老子の專門の大道を以て、この天下を治めてくれなんか云はうとして居るものがあるかも知れないが、大道と云ふものは、そんな風に行はるべきものではない。天下を主司するとか、物事を行ふとか云ふことは、大道の大禁物である。老子はそんなことをするのは、厭どころの話ではなく、實に身の毛の彌立つほどおそろしいのだ。大道と云ふものは、平坦なものであつて、何人でもその上を安心して歩めるものであるのに、天下の民衆は、無暗に横道や脇路や邪徑を通つて、得手勝手な風をして、世の中を渡らうとする。その結果は、どうであるか。現に眼前に展開されて居る如く、政府の法律や罰則は、山ほど出來て、荷物自動車でも雇はなくては運搬が出來ないほどになつて居るではないか。殺人や强盜の裁判にでさえ辯護士が附いて、罪惡の辯護をすると云ふ奇現象を呈して居る。謂ゆる游食の徒は、日日に繁殖し、田園は月月に荒廢に歸し、恒の產は缺乏し、天下民衆は、擧つて株式市場と裁判所とを往復して、日夜、利殖目がけて走つて居る。これは現に老子の眼前に展開されて居る社會の一面であるが、また、その他の一面を見ると、そこには、官吏と云ふものが澤山あつて、罪惡の存在に擁護せられつつ、美しい、嚴しい制服をつけ、よく切れ相な劍を帶び、美食美酒に飽滿し、その上に莫大な蓄財までして居るとと云ふ現實相が現はれて居るではないか。盜賊の指導者とは、彼等のことである。實に非道な話ではないか。ひどいこともあればあるものだ。

考證 ◎「**使我介然有知行於大道唯施是畏**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"If I were suddenly to become known, and (put into a position to) conduct (a government) according to the great Tao, what I should be most affaid of would be boastful display." (もし我急に知られ、大道によつて政治を行ふ地位に置かれたりとするも、我が最も畏るる所のものは、自負強き誇示ならん。)と英譯して居る。介然を "suddenly" (急に) と譯し、施を "boastful display" (自負強き誇示) と譯し居るのは、『老子通』に介然、猶レ言ニ忽然一。……施、誇張也。」とあるのに從つたものと思はれるが、私の見解とは異つて居る。この文句を、ヂャイルスは、〔G〕"If we had sufficient knowledge to walk in the great Tao, what we should most fear would be boastful display." (我等もし大道を歩むべき十分なる智識を有したりとするも、我等の最も畏るる所のものは、自負強き誇示ならん。)と英譯し、オールドは、〔O〕"Ah that I were wise enough to follow the great Tao! Administration is a great undertaking." (ああ、我大道に從事すべく、十分に賢明なりしならばよからんに。行政は大なる仕事なり。)と英譯して居るが、何れも私の見解とは相異し、殊にオールドのは、誤譯らしくも思はれる。私の見解によつて、これを英譯するならば、〔I〕"If I were asked to govern the people even for a time by practising great Tao over them, I should say that such a practice is

what I fear most." とでもなすべきであらう。◎「**大道甚夷而民好徑**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"The great Tao (or way) is very level and easy; but people love the by-ways." (大道は甚だ平坦にして容易なるに、人人は小徑を愛す。)と英譯し、ヂャイルスは、〔G〕"The great way is very smooth, but the people love the by-paths." (大道は甚だ平坦なるに、人人は横道を愛す。)と英譯して居るが、これは何れも原文に忠實である。◎「**朝甚除田甚蕪倉甚虛服文綵帶利劍厭飲食財貨有餘是謂盜竽非道哉**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"Their court (-yards and buildings) shall be well kept, but their fields shall be ill-cultivated, and thir granaries very empty. They shall wear elegant and ornamented robes, carry a sharp sword at their girdle, pamper themselves in eating and drinking, and have a superabundance of property and wealth;— such (princes) may be called robbers and boasters. This is contrary to the Tao surely!" (彼等の宮廷、家屋はよく保持せらるべし。されど彼等の田園は荒廢し、彼等の倉廩は甚だしく空虛になるべし。彼等は優美にして、文采ある服を着用し、帶に利劍を携へ、飲食に飽滿し、過分の貨財を有すべし。斯の如き王侯は盜賊、又は自慢家と名けられん。これは、確に道に反することなり。)と英譯して居る。多分これは、「朝甚除」の除を掃除の意に解し、また「盜竽」が「盜夸」となつて居る刊本に從ひ、夸を誇の意に解した上の譯と

思はれるが、大體に於て、私の見解とは相異して居る。私の見解によれば、これは、(I) "Where the government is well organized by the enforcement of regulations, rules, restrictions and ordinances, there will the fields be left uncultivated, and the granaries empty. The officials wear elegant embroidered robes, carrying sharp swords. They pamper themselves by eating and drinking, while possessing superabundance of property and wealth for themselves;—such persons are to be called the ringleaders of robbers. This state of affairs is really against Tao." とでも英譯すべきであると思ふ。○「惟施是畏」が「惟施甚畏」となり、「而民好レ徑」が「民甚好レ徑」となり、「服三文采一」が「服三文綵一」となり、「財貨有レ餘」が「資貨有レ餘」となり、「是謂三盜竽一。非道哉」が「是謂三盜夸一。盜夸非道也哉」となつて居る異本もある。

評論 この第五十三章は、老子の環境に展開されて居た時代の醜惡なる社會相に對する、老子自身の極端なる咒詛の叫びである。卽ち、冒頭にある「使三我介然有レ知、行二於大道一、唯施是畏」は、道の無爲性を暗示すると同時に、當時の社會に、道の行はるる可能性のなきことを道破した言葉であり、「朝甚除」以下は、「大道甚夷、而民好レ徑」と云ふ事實より發生せる現實の社會相を罵詈したものであるが、老子の罵詈の對象となつて居るものは、當時の天下の民衆ではなく、寧ろ當時の爲

政者であつたであらうと思はれる。

第五十四章（善建者不拔章第五十四）

本文 善建者不レ拔。善抱者不レ脫。子孫以祭祀不レ輟。修二之於身一、其德乃眞。修二之於家一、其德有レ餘。修二之於鄉一、其德乃長。修二之於國一、其德乃豐。修二之於天下一、其德乃普。故、以レ身觀レ身、以レ家觀レ家、以レ鄉觀レ鄉、以レ國觀レ國、以二天下一觀二天下一。吾何以知二天下之然一哉。以レ此。

新讀方 善く建つるものは拔けず。善く抱くものは脫せず。子孫は以て祭祀して輟まず。これを身に修むれば、その德は乃ち眞。これを家に修むれば、その德は餘あり。これを鄉に修むれば、その德は乃ち長し。これを國に修むれば、その德は乃ち豐なり。これを天下に修むれば、その德は乃ち普し。故に、身を以ては身を觀、家を以ては家を觀、鄉を以ては鄉を觀、國を以ては國を觀、天下を以ては天下を觀る。吾何を以て天下の然ることを知るや。これを以てなり。

新字解 ◎**善建者不拔善抱者不脫**——これは、吳澄が「植二一木於平地之上一、必有二拔而偃仆之時一。持二一物於兩手之中一、必有二脫而離去之日一。善建者、以二不建一爲レ建。則永不レ拔。善抱者、以二不抱一爲レ抱。則永不レ脫。」と云つて居る通り、沖虛、無爲なる道に則して德を建て、德を抱くものは、その德を喪失する樣のことはないことを云つた言葉であつて、善建は、その德の外的實踐躬行に就て云ひ、善抱は、その德の內的抱持に就て云つたものである。建・抱の目的格は、道と見ても、また德と見ても差支ない。◎**子孫以祭祀不輟**——これは、善建者なり善抱者なりの、後世に殘し子孫に傳へる餘德に就て云つた言葉であつて、その餘德の感化力の永存すること。輟は、廢止、停止の意。◎**修之於身**——これは、善建・善抱の目的となつて居る道なり、德なりを、個人的に自から實踐躬行することで、道・德を以て全個性を支配することを云つたものである。◎**其德乃眞**——これは、吳澄が「惟修二德於身一而已。修二德於身一、廼全二吾常道之眞一也。」と云つて居る通り、道・德を實踐躬行（善建・善抱）するものは、その道・德の純眞性を常に把捉し、その純眞性の拔けたり、脫したりする樣のことなきことを云つたものである。◎**修之於家**——これは、家庭に於て道・德を實踐躬行すること。◎**其德**——これは、其の實踐躬行者の德を指したものである。（〈考證〉參照）◎**有餘**——これは、「自からの德が眞になるのみにあらず、その眞德より生ずる餘德が、家族の人人の上にも及ぶ。」の意。◎**長・豐・普**——長は、長大、豐は、豐富、普は、普徧の意。◎**以身觀身**——これは、「自からの身を以て、自からの個性を觀察し、その個性の、道に卽して、純眞なることを自覺する。」の意。（〈考證〉參照）◎**以家**

觀家――これは、「自からの家庭に於て、道・德に卽したる實踐躬行をして居る時に、その家族が、道德の實踐躬行の餘德に感化されて居ることを知る。」の意。□**以鄉觀鄉**――これは、「自からの鄉里に於て、道・德の實踐躬行をして居る時に、その鄉里の人人が、その實踐躬行の長大なる德化に浴して居ることを知る。」の意。□**以國觀國**――これは、「自からの國に於て、道・德の實踐躬行をして居る時に、その國の人人が、その豐富なる德化に感化されて居ることを知る。」の意。□**以天下觀天下**――これは、「天下に於て、道・德の實踐躬行をして居る時に、その德化が、普く天下民衆の上に及んで居ることを知る。」の意。□**吾何以知天下之然哉**――これは、具には、「吾何以知二身、家、鄉、國天下之然一哉。」と云ふべきを短縮した言葉であつて、「知」と「之然哉」は、身・家・鄉・國・天下の何れにも係つて居る。然の字は、「乃眞・有レ餘・乃長・乃豐・乃普と云ふ理想的平和の狀態が、道・德に基因するものであること」を指したものである。□**以此**――これは、「道・德は本來その樣な擴充性を有して居るからのことである。」の意。（〈考證〉參照）

新譯 冲虛なる道、また、その活力なる德を、善く建て、善く抱いて居るものは、道に卽せる聖人であるから、その聖人の有せる道・德は、拔けて逃げてしまう樣のこともなく、また、脫して落ちてしまう樣のこともない。隨つて、その樣な聖人の感化力は、永存性を有して居るから、その子孫は、何時までも、家系連綿として續き、何時までも、その聖人の恩德を忘れないで、四季折折の祭祀を廢する樣のことはないのである。拔けざる、脫せざる道・德を建て、且つ、それを抱くとは、畢竟何のことであるかと云ふに、それは、その道・德を自から實踐躬行することである。その道・德を自から實踐躬行すれば、はじめには、客觀的性質を有して居た道・德が、その實踐躬行によつて、その人の主觀的、且つ純眞なる道・德となるのである。この純眞なる道・德を、自からの家庭に於て、實踐躬行すれば、その餘德は一家の人人に及び、一家擧つて道的生活を送ることが出來る樣になり、それを一鄉に於て實踐躬行すれば、一鄉の人人も、その長大なる餘德に浴して、道的生活をすることが出來る樣になるのであるが、それを、一國なり、一天下なりに於て、實踐躬行する場合に於ても、その德化の及ぶ所は、前の場合に於けると同一である。故に、**純眞**なる道・德が、一身なり、一家なり、一鄉なり、一國なり、一天下なりを、無爲的に化する時には、一身に於ても、一家に於ても、一鄉に於ても、一國に於ても、一天下に於ても、そこに、その道的平和が生成され、その德化に浴して居るものは、何れもその平和を享有することになるのである。然し乍ら、その平和の生成が、道・德によるものであることを、如何にして知るべきであらうか。それは、道・德には、本來、自然的にその樣な絕大なる感化力、無限なる擴充性が內在して居るからのことである。

考證 ◎「善建者不拔善抱者不脫子孫以祭祀不輟」と云ふ文句を、ヂャイルスは、〔G〕"He who knows how to plant, shall not have his plant uprooted; he who knows how to hold a thing, shall not have it taken away. Sons and grandsons will worship at his shrine, which shall endure from generation to generation."（如何にして植ゑるかを知れる人は、その植ゑたる植物を拔かるることなく、如何にして抱くかを知れる人は、その抱きたる物を取り去らるることなし。子孫は彼の靈廟に於て祭祀し、その靈廟は、代代持續すべし。）と英譯し、レッグは、韻文を以て、これと殆ど同意義に英譯して居る。これは、何れも原文に忠實な譯文ではあるが、何れも直譯に失して、原意が明白に現はれて居ない樣に思はれる。私はこの文句を、〔I〕"He who is skilful in planting virtue within, shall not lose his virtue; he who is skilful in maintaining virtue within, shall not be deprived of his virtue. His sons and grandsons will honour him through ages." とでも譯したなら、少しは原意が明白になるではないかと思ふ。◎「**修之於身其德乃眞修之於家其德有餘修之於鄉其德乃長修之於國其德乃豐修之於天下其德乃普**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"Tao when nursed within one's self, his vigour will make true; and where the family it rules what riches will accrue! The neighbourhood where it prevails in thriving will abound; and when 'tis seen throughout the state, good fortune

will be found. Employ it the kingdom o'er, and men thrive all around."（道が、人自からの內に養はるれば、その人の精力は眞なるべし。それが、一家族を治むれば、その富は增加すべし。それが、近隣に行はるれば、その繁榮は無量なるべし。それか、一國中に現はるれば、幸運は生ずべし。それが、天下に行はるれば、人類は普く繁榮になるべし。）と英譯して居る。今、原文と對比して、このレッグの譯文を檢討して見ると、彼は「其德乃眞」の德は、"Vigour"（精力）と譯し、「其德有レ餘」・「其德乃長」・「其德乃豐」・「其德乃普」の四言四句に於ける德は、これを何れも物質的に解し、"Riches"（富）・"Thriving"（繁榮すること）・"Good fortune"（幸運）・"Thrive"（繁榮する）と云ふ言葉を以て、その意を表現して居る。また、五箇の其の字も、それぞれ「精力の眞を得る者」・「富の增加を得る家」・「繁榮無量なる近隣」・「幸運の生成を得る國」・「普く繁榮になる人類」に係けて見て居る。これは如何なる註解によつて英譯したものか、少しも見當がつかないが、私の見解とは全く相異して居る。この文句は、蘇子由が「身既修、推二其餘一、以及レ外、雖レ至二于治二天下一可也。」と云つて居る通り、「善建者、善抱者とは、要するに、道・德を、自己の身に實踐躬行し、純眞なる德の所有者となりたるもののことに外ならないのであるが、その純眞なる德の所有者は、家であれ、鄕であれ、國であれ、天下であれ、如何なる環境に處して居ても、その

德化は、遂にはその環境を道的に淨化してしまうに至るのである。」と云ふ思想を表現したものであつて、この文句の中には、物質的に繁榮するとか、富裕になるとか云ふ樣な意義は、少しも含まれて居ないのである。故に、今これを私の見解通りに英譯するならば、(I) "He who realizes the principle of Tao in his own person, will maintain his virtue in purity; when he realizes the principle of Tao in his own family his virtue will be sufficient to influence them; when he realizes the principle of Tao in his own village his virtue will be great enough to embrace the villagers; when he realizes the principle of Tao in his own country he will be rich enough to nourish his fellow-countrymen; and when he realizes the principle of Tao in the world his virtue will universally benefit all mankind." とでもなすべきであらう。◎「**故以身觀身、以家觀家、以鄉觀鄉、以國觀國、以天下觀天下**」と云ふ文句を、レッグは、(L) "In this way the effect will be seen in the person, by the observation of different cases; in the family; in the neighbourhood; in the state; and in the kingdom." (斯の如く、効果は、家に於ける時、近隣に於ける時、國に於ける時、天下に於ける時——かく異なりたる場合の觀察によつて、自からに於て觀らるるなり。)と英譯して居るが、これは、譯文の意義も判然とはして居らず、且つ私の見解とも相異して居る。オールドは、これを、(O) "I

observe myself, and so I come to know others. I observe my family, and all others grow familiar. I study this world, and others come within my knowledge." (我は自からを觀察して、他のものを知るに至る。我は我が家を觀察して、すべて他のものと親しくなる。我はこの世界を研究して、他のものは我が智識の範圍に入る。)と英譯して居る。これは、林希逸が「卽吾一身、而可以觀他人之身。卽吾之一家、而可以觀他人之家。卽吾之一鄉、而可以觀他人之鄉。推之於國、於天下、皆然。言道之所用皆同也。」と云つて居る見解に從ひ、且つ「以國觀國」の句を「以天下觀天下」の句に含めて譯したものと思はれる。沈一貫も「以一身觀萬身、以一家觀萬家、以一鄉觀萬鄉、以一國觀萬國、以一天下觀萬天下。」と云ひ、尙ほ他にも、これと同一の見解を支持して居る學者もあるが、恐らく、これは老子の原意ではなからうし、また、その見解の文字上の表現も、意義の明瞭を缺いで居る樣に思はれる。私の見解によれば、この文句は「以身觀身其德乃眞。以家觀家其德有餘。以鄉觀鄉其德乃長。以國觀國其德乃豐。以天下觀天下其德乃普。」の意であつて、玆にある以の字は、用の義ではなく、因の義である。今私の見解によつて、この文句を英譯するならば、(I) "As to himself, he will see what he has become (by his realization of Tao in his own person); as to his family, he will see what the family has become (by

his realization of Tao in his family); as to his village, he will see what the villagers have become (by his realization of Tao in his village); as to his country, he will see what his fellow-countrymen have become (by his realization of Tao in his country); and as to the world, he will see what the people have become (by his realization of Tao in the world)" とでもなすべきであらう。◎「**吾何以知天下之然哉以此**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"How do I know that this effect is sure to hold thus all under the sky? By this (method of observation)." (私は、如何にして、この効果が、斯く確實に全天下を保持することを知るや。この觀察の方法によつてなり。) と英譯し、オールドは、〔O〕"How else should I come to know the laws which govern all things; save thus, that I observe them in myself." (我が自からに於て、萬物を觀察することを除いて、他の如何なる方法によつて、我は萬物を統治する法則を知るに至るべきか。) と英譯して居るが、何れも私の見解とは相異して居る。この文句は、第二十一章に「吾何以知二衆甫之然一哉。以レ此。」とあるのと同一句法によるものであつて、私の見解によれば、「(身・家・鄉・國) 天下之然」は「以レ身觀レ身、(其德乃眞。) 以レ家觀レ家、(其德有レ餘。) 以レ鄉觀レ鄉、(其德乃長。) 以レ國觀レ國、(其德乃豐。) 以二天下一觀二天下一、(其德乃普。)」と云ふ假定的事實を指したものであり、「以レ此」の此の字は「修二之

於身一、其德乃眞。修二之於家一、其德有レ餘。修二之於鄉一、其德乃長。修二之於國一、其德乃豐。修二之於天下一、其德乃普。」と云ふ文句に含まれて居る道・德の感化力に於ける擴充の可能性に就て云つたものであるから、この見解によつて、この文句を英譯するならば、〔I〕"How do I know that it is owing to Tao that they can be realized? It is because Tao naturally has such virtuous influence over all things." とでもなすべきであらう。○「善建者」が「善建」となり、「善抱者」が「善抱」となり、「子孫以祭祀不レ輟」が「子孫祭祀不レ輟」となり、「修二之於身一」が「修二之身一」となり、「修二之於家一、其德有レ餘」が「修二之家一、其德乃餘」となり、「修二之於鄉一」が「修二之鄉一」となり、「修二之於國一」が「修二之邦一」とあり、「修二之於天下一、其德乃普」が「修二之天下一、其德乃溥」となり、「故、以レ身觀レ身」が「以レ身觀レ身」となり、「以レ國觀レ國」が「以レ邦觀レ邦」となり、「吾何以知」が「吾奚以知」、又は「吾奚以知」となつて居る異本もある。

評論 この第五十四章に於て、老子の力說せんとして居る所は、僧德清が「此言聖人所二以功德無量、澤及二子孫一者、皆以二眞修一爲レ本也。」と云つて居る通り、一身を道的に淨化する上に於ても、一家を道的に淨化する上に於ても、一鄉を道的に淨化する上に於ても、一國を道的に淨化する上に於ても、一天下を道的に淨化する上に於ても、その淨化を可能ならしむる所以の第一歩は、自己の

道的淨化を完成することであると云ふ點である。換言すれば、道・德の普及とは、道・德に關する說話、言句が、人間の耳口を通過し、往來することではなく、人間の現實生活に於て、道・德の實踐躬行せらるることを意味するのであると云ふのが、この第五十四章に於て、老子の道破して居る敎訓である。

第五十五章 （含德之厚章第五十五）

本文 含德之厚、比二於赤子一。毒蟲不レ螫。猛獸不レ據。攫鳥不レ搏。骨弱筋柔、而握固。未レ知二牝牡之合一、而峻作、精之至也。終日號、而嗌不レ嗄、和之至也。知レ和曰レ常、知レ常曰レ明、益レ生曰レ祥、心使レ氣曰レ强。物壯則老。是謂二不道一。不道早已。

新讀方 含德の厚きは、赤子に比す。毒蟲も螫さず。猛獸も據らず。攫鳥も搏たず。骨は弱く筋は柔かにして、而も握ることは固し。いまだ牝牡の合ふことを知らざるも、而も峻の作るは、精の至りなり。終日號べども、而も嗌い嗄れざるは、和の至りなり。和を知るを常と曰ひ、常を知るを明と曰ひ、生を益すを祥と曰ひ、心の氣を使ふを强と曰ふ。物は壯なれば則ち老ゆ。これを不道と謂ふ。不道なれば早く已なり。

新字解 ◎**含德之厚**——これは、林希逸が「含德、藏蓄而不レ露也。厚者、至也。」と云つて居る通り、「德を外部に誇示せず、自己の內部に深く蓄積して居る至德者」の意であつて、第五十四章にある「善建者、善抱者」のこと。◎**赤子**——第十章にある嬰兒と同義。◎**毒蟲不螫**——これは『老子元翼』

に「毒蟲、蜂蠆之類。以二尾端一肆レ毒曰レ螫。」とある通り、蜂や蠆などが、尻尾で毒を人身に刺しこむこと。◎**據**――據は、爪で搔くこと。◎**攫鳥**――鷲・鷹・鵰・鶚などの猛鳥のこと。◎**搏**――羽翼を以て擊つこと。◎**握固**――これは、『老子元翼』に「以二四指一握二拇指一爲二握固一。」とある通り、握りこぶしの固きこと。◎**牝牡之合**――男女の性交のこと。◎**峻作**――これは、『老子元翼』に「峻、朘同。子垂反。赤子陰也。作、起也。」とあり、林希逸が「峻亦作者、精氣盛也。峻、赤子之命原也。」と云つて居る通り、赤子の男根の勃起すること。◎**精之至也**――「精力の內部に十分に充滿して居る證據である。」の意。◎**嗄**――音聲のかれること。◎**和之至也**――「和氣の內部に十分に充滿して居る證據である。」の意。◎**知和曰常**――これは、蘇子由が「和者、不二以レ外傷一レ內也。復レ命曰レ常、遇レ物而知レ反二其本一者也。知レ和曰レ常、得レ本以應二萬物一者也。」と云ひ、林希逸が「和者、純氣之守也。知二此至知之理一、則可二以常久而不レ易矣。知二此常久之理一、可レ謂レ明二於道一矣。」と云つて居る通り、「冲虛の道に卽せる絕對的和氣を悟得し、如何なる事象に觸れても、その和氣を失はざるものを、道の永久性（常）を體得せるものと稱する。」の意。◎**知常曰明**――この明は、第五十二章に「見レ小曰レ明」とある明と同義であつて、「知レ常曰レ明」とは、「道の永久性（常）を體驗することを、道に卽せる明智と稱する。」の意。◎**益生曰祥**――これは、林希逸が「生不レ可レ益。强求レ益レ之、

則爲レ殃矣。祥、妖也。」と云ひ、僧德清が「苟不レ知二眞常之性一、徒知二形之可レ養、而以二嗜欲口腹一、以益二其生一。殊不レ知下生反爲二其戕一、性反爲上二其傷一。」と云つて居る通り、第五十章に謂ゆる「生レ生之厚」ことの結果、却て、その禍害の身に及ぶこと、卽ち、現實生活に執著しすぎ、肉體に愛著しすぎて、徒に身心を過勞することは、人生の不祥事であることを云つたものである。◎**心使氣曰强物壯則老**――この文句に對して、林希逸は「以レ心使レ氣。是志動レ氣也。强者、暴也。暴則非レ道矣。故曰、心使レ氣曰レ强。以レ此爲レ强、無レ有レ不レ折。如二物之壯、無レ有レ不レ老。此皆不レ謂二之道一。」と云ひ、僧德清は「心不レ平、則妄動而使レ氣。氣散則精竭。精竭則形枯。故曰、心使レ氣曰レ强。强、木之枯槁也。過强曰レ壯。故曰、物壯則老。草木之物過壯、則將レ見二其枯槁而老一。」と云つて居る。卽ち前者は、强を强暴の意に解し、後者は、强を枯槁の意に解して居るが、この場合の强の字は、第四十二章に「强梁者、不レ得二其死一。」とある强梁、又は血氣の勇の意に解すべきであらう。而して、「心使レ氣」とは、氣の主宰者なる心が、調整力を失つて、結果を顧慮せずに、無暗に客氣に驅られて働くことであり、「物壯則老」は、第三十章にある同一文句と同義。

新譯 道に卽せる德を、個性の中に潛在させて居て、少しもそれを他に誇示することのなき聖者十章にある同一文句と同義。◎**是謂不道不道早已**――これは、第三

は、赤子にも比すべき無邪氣なるものである。赤子は至つて無邪氣であり、他を害する心もなく、反抗する氣もないから、毒蟲に螫されることもなく、猛獸の爪にかけられることもなく、猛鳥の爪でつかみ去られる樣のこともない。身體の骨は弱く、筋肉は柔軟であるが、それでも握力は至つて强固である。未だ男女の性交に就て、何事も知らないが、それでも男根の勃起力は强い。握力なり、勃起力の强大なことは、その精力の內部に充溢して居る證據ではないか。また、朝から晩まで、泣き續けて居ても、咽喉が嗄れることもないが、これは氣と心とが、よく調和して居て、內部の和氣に變調を生じて居ないからのことではないか。この氣と心とをよく調和させて、內部の和氣を平靜なる狀態に持續し、環境の事象に心を奪はれたり、氣を傷けられたりする樣のことのないのは、聖者の生活に必須の條件であるが、この理を悟つて常に和氣を損傷せず、平靜なる態度を以て、環境と契合して居るもの、これを道の永久性に卽せる聖者と稱するのである。而して、この永久性を、日常の生活に於て、常に體驗せるものを、道の上に於ける明智者と稱するのである。然るに、世の中の人間は、實に愚なもので、心の日日に減び行くのにもお構ひなしして、肉體を强壯にしようとしたり、壽命を引伸さうとしたりすることに、一生懸命になつて居る。不吉な仕事とは、この樣な努力を指すのである。心と氣とが離れ離れになつて、氣が無暗に外部であばれるのを强暴と云ふのであ

る。物は壯んになれば、則ち老いてしまう。强暴と强壯、不道とはこのことだ。不道なるものの永續した例は、曾てあつたことがない。

考證 ◎「**含德之厚比於赤子**」と云ふ四言二句を、レッグは、〔L〕"He who has in himself abundantly the attributes (of the Tao) is like an infant."（道の屬性を、自己の中に豐富に有するものは、赤子の如し。）と英譯し、ヂャイルスは、〔G〕"He who trust to his abundance of natural virtue is like an infant newly born."（自己の有せる豐富なる自然の德に任せるものは、生れたての赤子の如し。）と英譯して居るが、前者の方が、厚意に親しい樣に思はれる。併し、「含德之厚」の厚は、至（含に係る副詞）の義であつて、この四言一句は「德を內部に覆藏することの極度なる者」の意であるから、私はこの文句は、〔I〕"He who perfectly consolidates all his virtue in himself, is like unto an infant."とでも譯したなら、原意に親しくなるではないかと思ふ。◎「**毒蟲不螫猛獸不攫獲鳥不搏**」と云ふ四言三句を、レッグは、〔L〕"Poisonous insects will not sting him; fierce beasts will not seize him; birds of prey will not strike him."（毒蟲は、彼を螫さず。猛獸は、彼を擒へず。猛禽は、彼を搏たず。）と英譯して居るが、これは原意を十分に傳へて居る樣に思はれる。◎「**骨弱筋柔而握固未知牝牡之合而嚶作精之至也**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"(The infant's) bones are weak

and its sinews soft, but yet its grasp is firm. It knows not yet the union of male and female, and yet its virile member may be excited;—showing the perfection of its physical essence.”（赤子の骨は弱く、その筋は柔かなるも、尙ほその握りは固し。未だ男女の合ふことを知らざるも、尙ほその峻は作ることあり。これ、その體素の完全を示すものなり。）と英譯して居る。これは大體に於て原意に觸れて居る樣ではあるが、「精之至也」の精の字を〔L〕“Physical essence”（體素）と譯しては、老子の思想を離れるではないかと思ふ。私は「精之至也」は、〔I〕“This shows that its vitality is perfectly matured in itself.” 又は、〔T〕“This shows that vitality is perfectly matured in its body.” とでも譯すべきではないかと思ふ。◎「**終日號而嗌不嗄和之至也**」と云ふ文句を、ヂャイルスは〔G〕“All day long it will cry without its voice becoming hoarse. This is because the harmony of its bodily system is perfect.”（音聲は嗄るることなくして、終日泣く。これその肉體の組織の調和が、完全なる故なり。）と英譯し、オールドは、〔O〕“Though he should cry out all day, yet he is never hoarse. Herein is shown his harmony with nature.”（彼は終日泣くと雖も、聲は嗄れず。こゝに彼と自然との調和が現はれて居るなり。）と英譯して居る。これは何れも適譯ではあるが、「和之至也」に對する譯文は、ヂャイルスのよりもオールドの譯の方が、原意に親しい樣に思はれる。

◎「**知和曰常知常曰明**」と云ふ四言二句を、レッグは、〔L〕“To him by whom this harmony is known, (the secret of) the unchanging (Tao) is shown, and in the knowledge wisdom finds its throne.”（この調和を知れる者に、不變なる道の秘密は示され、その智識の中に智慧は、其玉座を見出すなり。）と英譯し、オールドは、〔O〕“The knowledge of this harmony is the eternal Tao. The knowledge of the eternal Tao is illumination.”（この調和の智識は、永遠なる道にして、永遠なる道の智識は光輝なり。）と英譯して居る。前者は詩的に譯してはあるが、あまり意譯に過ぎて、原意を離れ、後者の方が、却て原文に親しき適譯である。私は、この四言二句を、〔I〕“He who knows this naturall harmony is the possessor of the eternal Tao. He who knows the eternal Tao is the holder of enlightenment.” とでも譯したなら、原意に一層親しくなるではないかと思ふ。◎「**益生曰祥心使氣曰強物壯則老是謂不道不道早已**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕“All life-increasing arts to evil turn; where the mind makes the vital breath to burn, (false) is the strength, (and o'er it we should mourn). When things have become strong, they (then) become old, which may be said to be contrary to the Tao. Whatever is contrary to the Tao soon ends.”（すべて生命增進の術は、殃に歸す。心の氣を熱せしむる所に、虛妄なる强力あり。我等はそれを悲しむべきなり。物は强くなり

し時に老ゆ。そは道に反せるものなるべし。すべて道に反せるものは、すぐに終亡するなり。)と英譯し、オールドは、〔O〕"Habits of excess grow upon a man, and the mind, giving way to the passions, they increase day by day. And when the passions have reached their climax, they also fail. This is against the nature of Tao. What is contrary to Tao soon comes to an end." (過分の習癖は、人を支配し、心は情慾に負けて、過分の習癖は、日日に增進す。而して、情慾のその極度に達したる時に、また衰ふ。こは道の自然性に反するなり。道に反するものは、すぐに終に至る。)と英譯して居るが、何れの譯文にも原意に觸れて居る所と、原意を離れて居る所とがある樣に思はれる。「物壯則老。是謂二不道一。不道早已。」と云ふ四言三句は、第三十章にも現はれて居る言葉であるが、今この全文を、私の見解によつて英譯するならば、〔I〕"All efforts to increase life end in calamity, He who exercises his spirit and vigour is called strong. When things have reached their highest stage of development, they begin to get old. All these are against the way of Tao. Things contrary to the way of Tao soon come to an end," とでもなすべきであらう。「是謂二不道一」の。是の字は、「益レ生」・「心使レ氣」・「物壯」の三つを指したものである。○「含德之厚」が「含德之厚者」となり、「毒蟲不レ螫」が「蜂蠆不レ螫」となり、「攫鳥」が「攫鳥」となり、「鷙作」が「脧作」とな

り、「精之至也」が「精之至」となり、「和之至也」が「和之至」となつて居る異本もある。

評論 この第五十五章に於て、老子は、まづ第一に、道・德の善建者、善抱者を赤子に比し、その赤子の性情が、全宇宙のすべての事象を抱擁せる道の自然性に卽(ソク)して居るために、等しくその道に抱擁されて居る毒蟲・猛獸・攫鳥などは、その赤子を害することなきと同じく、聖人(道・德の善建者善抱者)も亦、天下に無敵であることを云つたものであるが、この思想は、歷史的に觀察すれば、幾千萬年の太古に於ける、すべての生物の雜居せし事實、卽ち、人類と禽獸、蟲類とが、自然の懷に抱かれて、無爲、平和なる生存を續けて居た時代の回顧とも見られるが、また、哲學的に觀察すれば、この思想は、宇宙間のあらゆる生物、あらゆる非生物の間に生動し、流動して居る一大生命の存在を認め、その一大生命の中に、自己を銷融させてしまふことを以て、解脫の完成なりと確信せる古代印度の信念に屬して居るものである。キリスト教にも、獅子と同居して、その害を受けなかつたとか(『舊約全書』但以理(ダニエル)書第六章參照)、手を蝮にとりまかれても、その毒を受けなかつたとか(『新約全書』使徒行傳第二十八章參照)云ふ說話が存在するが、キリスト教に於ては、それらの奇蹟を一切神の攝理に歸して居るのであるから、この「三界萬靈、同一生命」と云ふ印度思想とは、その根蔕を異にして居るのである。而して、この印度思想は、文殊(モンジュ)菩薩が獅子に騎つて居たり、普賢(フゲン)菩

薩が象に騎つて居たり、羅漢中のあるものが、龍を御して居たり、虎を撫でて居たりして居る事實、迦毘摩羅尊者が、蟒を敎化したと云ふ事實（『五燈會元』第一卷參照）、北魏武帝太平眞君十一年（西暦四五〇年）に、白足沙門曇始が、刀劍でも傷害されず、虎檻に投入せられても、虎に害せられなかつたと云ふ事實（『佛祖統紀』第三十八卷參照）、及び華林善覺が虎と同居して居たと云ふ事實（『五燈會元』第三卷參照）などによつても知らるる如く、佛敎の典籍中には、頻繁に記述されて居るのである。

次に、老子は、赤子の譬喩を續けて、精氣、活力の內的充實をはかり、それによつて現實生活を持續することが、道に卽せるものなることを云ひ、「益レ生曰レ祥」以下に於て、精氣、活力の外的放散、浪費の反道的なることを云つたものである。

第五十六章（知者不言章第五十六）

本、文　知者不レ言。言者不レ知。塞二其兌一、閉二其門一、挫二其銳一、解二其紛一、和二其光一、同二其塵一。是謂二玄同一。故、不レ可二得而親一。亦不レ可二得而疎一。不レ可二得而利一。亦不レ可二得而害一。不レ可二得而貴一。亦不レ可二得而賤一。故、爲二天下貴一。

新讀方　知る者は言はず。言ふ者は知らざるなり。その兌を塞ぎ、その門を閉ぢ、その銳を挫き、その紛を解き、その光を和げ、その塵に同じくす。これを玄同と謂ふ。故に、得て親むべからず。また得て疎んずべからず。得て利すべからず。また得て害すべからず。得て貴くすべからず。また得て賤くすべからず。故に、天下の貴となるなり。

新字解　◎知者不言言者不知――　これは、蘇子由が「道非二言說一、亦不レ離二言說一。然能知者、未二必言一。能言者、未二必知一。」と云つて居る通り、主として、道の本體の不可知的にして、言說を超越せることに就て云つたものであるが、道に限らず、如何なる事柄に就て云つても、同樣であるから、「眞にその事を體得して居るものは、それをあまり口外にしないのである。これに反して、無暗にそれを口外し、自から能く知つて居る樣な風をするものは、實はよく知つて居ないのである。」と云

ふ意味をも含んで居るものと解すべきである。◎**塞其兌閉其門**――これは、第五十二章にある同一語句と同意義で、思想發表の機關たる口（兌）も、智識蓄積の機關たる耳目も閉ぢて、精神を內心に集中することを云つたものである。◎**挫其鋭解其紛和其光同其塵**――これは、本質的には第四章にある同一語句と同意義であるが、玆では吳澄が「先自鈍二其鋭一、以二不鋭一、解二人之紛結一。先自暗二其光一、以二不光一、同二人之塵昏一。在レ己在レ人之鋭鈍光暗、兩無二分別一、與レ世同。」と云つて居る通り、挫・解・和・同の主格（行爲者）を道そのものと見ないで、道に卽せる聖者と見る方が、前後の文脈上、適當である樣に思はれる。◎**玄同**――「玄妙不可思議なる同和」の意。◎**不可得而親亦不可得而疎不可得而利亦不可得而害不可得而貴亦不可得而賤**――これは、蘇子由が「可二得而親一、則亦可二得而疎一。可二得而利一、則亦可二得而害一。可二得而貴一、則亦可二得而賤一。體レ道者、均覆二萬物一。而孰爲二親疎一。等二觀逆順一。而孰爲二利害一。不レ知二榮辱一。而孰爲二貴賤一。」と云つて居る通り、道に卽せる聖者の親疎、利害、貴賤などの相對的事象を超越し、無差別平等の境界に安住して居ることを云つたものである。◎**天下貴**――「絕對的尊貴」の意。

新譯 世の中の人人の言葉數の多いのには、實にあきれる。彼等は何も知らない癖に、何でも知つて居る樣なことを云つて居る。眞に道に卽せる聖者は、道に就ては勿論のこと、何事に就ても、

知つた樣なことは言はないのである。知つた樣なことを言つて居る人は、實は何も知らないのだ。聖人は、精氣、活力を無暗に外部に放散することをしない。知つた樣なことを言はないから、口（兌）は塞ぎ、下らないことを見聞して、惡智慧を探求することを欲しないから、耳目は閉ぢて居る。世の中の紛擾や鬪爭は、學者が學者振つたり、金持が金持振つたりすることから起るものであるが、道に卽せる聖者は、自分の學問や智慧を、少しも鼻にかけず、自分の鋭鋒を深く藏して、少しも外部に露はさないから、彼の環境に存在する紛糾は、直に消滅してしまう。また、自分の人格上の光輝を環境に誇示することもなく、出來るだけそれを緩和して、環境の塵俗に同和し、自分と環境との間に、少しも牆壁を設けないのであるが、玄妙なる同和とは、要するに、この聖者のなすが如き處世法のことである。斯の如き境界に安住して居る聖者には、親疎、利害、貴賤の觀念が、毛頭もないから、他のものが、彼を親しむことも出來なければ、また疎んずることも出來ず、利を以て彼を釣ることも出來なければ、また彼に損害を蒙らせることも出來ず、彼を貴ぶことも出來なければ、また彼を賤しめることも出來ないのである。絕對的尊貴とは、斯の如きものを謂ふのである。人爲的に左右せられる樣な尊貴は、絕對的のものではない。

考證 ◎「**知者不言言者不知**」と云ふ四言二句を、レッグは、〔L〕"He who knows (the Tao) does

not (care to) speak about it; he who is (ever ready to) speak about it does not know it.”（道を知れるものは、道に就て言ふことを好まず。常に道に就て言はんとせるものは、道を知らざるなり。）と英譯し、オールドは、〔O〕“He who knows the Tao does not discuss it, and those who babble about it do not know it.”（道を知れるものは、道に就て議論せず。道に就てべちやべちやぺちゃぺちゃ喋るものは、道を知らざるなり。）と英譯して居る。知の字の目的格に當るものを道のみと見るならば、これは、何れも原意を、十分に傳へて居ると云ふべきであるが、知の字の目的格に當るものを道のみならず、一般の事象と見るならば、〔G〕“Those who know do not speak; those who speak do not know,”（知るものは言はず、言ふものは知らず。）と云ふヂャイルスの譯の方を適譯と見るべきであらう。◎「**塞其兌閉其門挫其鋭解其紛和其光同其塵是謂玄同**」と云ふ三言六句を、レッグは、〔L〕“He (who knows it) will keep his mouth shut and close the portals (of his nostrils). He will blunt his sharp points and unravel the complications of things; he will attemper his brightness, and bring himself into agreement with the obscurity (of others). This is called ‘the mysterious agreement’.”（道を知れる者は、口を塞ぎ、鼻孔の入口を閉ぢ、鋭き尖端を鈍くし、事物の紛糾を解き、光を和らげ、自からを他のものの朦朧と同じくす。これを神秘なる調和と謂ふ。）と英譯し、オールドは、〔O〕“To keep the lips closed, to shut the doors of sight and sound, to smooth off the corners, to temper the glare, and to be on a level with the dust of the earth, this is the mysterious virtue.”（唇吻を塞ぎ、聲色の戸を閉ぢ、圭角を削除し、眩光を和らげ、塵土と同等になる。これを神秘なる德と謂ふ。）と英譯して居る。何れも大體に於て、原意を傳へて居るが、「塞其兌閉其門」に對する英譯は、前者の〔L〕“He will keep his mouth shut and close the portals of his nostrils.”（彼は口を塞ぎ、鼻孔の入口を閉づ）よりも、後者の〔O〕“To keep the lips closed, to shut the doors of sight and sound.”（唇吻を塞ぎ、聲色の戸を閉ぢ。）の方が、原意に親しい樣に思はれる。また、後者に於て、「解其紛」を〔O〕“To smooth off the corners”（圭角を削除する。）と譯してあるのは、如何に考へても、誤譯としか思はれない。◎「**故不可得而親亦不可得而疎不可得而利亦不可得而害不可得而貴亦不可得而賤故爲天下貴**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕“(Such an one) cannot be treated familiarly or distantly; he is beyond all consideration of profit or injury; of nobility or meanness;—he is the noblest man under heaven.”（かかる人は、親しくも疎くも取扱はるること能はず。彼は利害、貴賤の考慮を超越せるなり。彼を天下の最高貴と謂ふ。）と英譯して居るが、これは原意を十分に傳へて居る樣に思はれる。○「知者不レ言。言者不レ知。」が「知者不レ言

也。言者不レ知也。」となり、「解二其紛一」が「解二其忿一」となつて居る異本もある。

評論 この第五十六章は、その前半に於ては、道に卽せる聖者の現實生活上に於ける言行に就て云つたものであり、その後半に於ては、前半に叙述してある樣な言行を以て、世に處して居る聖者は、謂ゆる天爵の享有者であるから、人爵の與奪のためのみに、醉生夢死して居る一般民衆が、彼等自からの尺度を以て、その天爵の享有者を律することは、全く不可能であることを云つたものである。

第五十七章（以正治國章第五十七）

本文 以レ正治レ國、以レ奇用レ兵。以二無事一取二天下一。吾何以知二其然一哉。以レ此。天下多二忌諱一、而民彌貧。民多二利器一、國家滋昏。人多二技巧一、奇物滋起。法令滋彰、盜賊多レ有。故、聖人云、我無爲、而民自朴。我無欲、而民自富。我好レ靜、而民自正。我無事、而民自化。

新讀方 正を以ては國を治め、奇を以ては兵を用ふ。無事を以ては天下を取るなり。吾は何を以てかその然ることを知るや。これを以てなり。天下に忌諱を多くすれば、而も民はいよいよ貧し。民に利器を多くすれば、國家はますます昏し。人に技巧を多くすれば、奇物はますます起る。法令ますます彰かにならば、盜賊はあること多し。故に、聖人は云ふ、「我は無爲なるも、而も民は自から化す。我は靜を好むも、而も民は自から正しし。我は無事なるも、而も民は自から富む。我は無欲なるも、而も民は自から朴なり。」と。

新字解 □**以正治國以奇用兵**——これは、林希逸が「以レ正治レ國、言二治レ國則有二政事一。以レ奇用レ兵、用レ兵則必須二詐術一。」と云ひ、吳澄が「奇者、僅可レ施二於用レ兵。不レ可二以治レ國。正者、僅可レ施二於

治レ國、不レ可ニ以取ニ天下一。」と云つて居る通り、「正義（正）は、國の行政上にのみ役にたち、詐術（奇）は、戰爭の用兵上のみに役にたつ。」の意で、次句の「以ニ無事一取ニ天下一」を抽き出すための言葉である。◎**以無事取天下**――これは、吳澄が「無事者、三皇無爲之治。如ニ天不レ言而四時行、百物生一。不レ期ニ人之服從一。而天下無レ不ニ服從一。故、唯無事者、可ニ以取ニ天下一也。」と云つて居る通り「道に卽したる無爲、無事によつてのみ、天下の民衆を心服せしめることが出來る。」の意。◎**吾何以知其然哉以此**――これは、僧德清が「吾何以知下無事可ニ以取ニ天下一之然上哉。以レ此。此、指ニ下之有事一而言。」と云つて居る通り、「老子は、天下を取るには、正でもいかん、奇でもいかん、ただ無事のみによつて天下を取ることが出來ると云つたが、それは何故か。まア、よく聽け。こう云ふ譯だ。」と云ふ意で、此の字は、「天下多ニ忌諱一」から「盜賊多レ有」までの三十三字を指したものである。◎**天下多忌諱而民彌貧**――忌諱は、僧德清が「忌、謂ニ禁不ニ敢作一。諱、謂レ不ニ敢言一。」と云つて居る通り、こんなことは、してはいけない、あんなことは、言つてはいけないと云ふ樣な法令のことで、民衆の行爲と言論を束縛する規則を指したものであるが、「そんな規則が、澤山に出來て來ると、民衆は生業に安んずることが出來ず、また、その規則の厲行のために、生產的勞働に從事しない官吏などが澤山出來て、その結果、民衆は、ますます生活難に急迫されることになるのである。」と云ふ意

で、「民彌貧」と云つたものである。◎**民多利器國家滋昏**――僧德清は、この四言二句を解して、「賢者、國之利器也。今國無レ道、賢者在レ野。是利器在レ民、不レ在レ朝。所以國家滋昏。」と云ひ、「政府の當路者が、馬鹿者ばかりになつて、賢明な物識が、民間に澤山になれば、天下はますます暗闇になる。」の意に解して居る。これは、現實の世相に照らして見れば、面白味の深い見解である樣にも思はれるが、恐らく、これは老子の思想ではあるまい。私は、この四言二句は「古之人、有ニ什百人之器一而不レ用。舟轝無レ所レ乘。甲具無レ所レ陳。其治益醇。後世則惟利器之是務。鐘鼓之音、羽毛之容、斗斛以量レ之。權衡以稱レ之。符璽以信レ之。將ニ以明レ民也。而有レ知有レ欲、民心益亂。國家於レ是乎瞀眩、而不レ知ニ所ニ從適一矣。」と云ふ沈一貫の見解に從つて解するのが、原意に親しいと思ふ。卽ち、利器とは、單に兵器のみを意味するのではなく、廣き意味に於ける「文明の利器」の意で、文化的施設、科學的發明などをも包括して居るものと見るべきである。（〈考證〉）◎**人多技巧奇物滋起法令滋彰盜賊多有**――これは、僧德清が「由ニ上多欲好レ奇、故、人心雕琢、技巧日生。技巧生而奇物滋起。奇物起、則貪愈甚。貪愈甚、而盜賊生。故、法令滋彰、而盜賊多レ有也。以レ此天下擾擾而不レ安。是皆有爲妄動、有事多欲之過也。」と云つて居る通り、「技術上の巧妙、科學上の發明などが、發達すれば、發達するにつれて、奇物珍品は、次から次へと續出し、從つて人間の貪欲心、好奇心、

競爭心も、ますます強くなり、その結果として、天下に詐欺、奸策が、盛んに行はれる樣になり、從つて、それを取締る法令も、ますます嚴重になるが、ますます進歩して、停止することなき竊盜術や詐欺策は、法令を超越して、ますます巧妙になり、多くなる。」の意。彰は、顯著になることで、法令の掲示、發布、公表、及び、その法令の數の增加することを意味するのである。□聖人――これは、老子以前の歷史的一偉人を指したものであるが、その何人なるかは、全く不明である。

新譯 國家を統治するには、仁義とか正義とか云ふもので結構であるし、戰爭をして敵と戰ふには、奇計、術策を用ふべきであるが、仁義、正義、奇計、術策と云ふ樣なものは、ただ民衆を威壓するばかりのものであつて、天下の人心を得るには、何の役にもたたない。天下の人心を得る唯一の方法は、道に卽したる無事を以て天下に臨むことである。天下の人心を得るには、無事に限るのは何故であるかと云ふに、それは有事を以て天下を治めようとして居る爲政者の大失敗の跡を見れば、よくわかるのではないか。兎角、世の中の爲政者と云ふものは、法令や罰則を澤山に發布しさえすれば、それで、天下が平和に治まるものと思つて居るものと見え、やァ、こんな行爲をしてはいけない、やァ、あんな言論を吐いてはいけないと云つて、國民の言行に、一から百まで干涉し、路の歩き方まで、規則によつて取締ると云ふ樣なことをやつて居るが、その結果は、どうである

か。國民は怖氣がついて、仕事も手につかず、その上に、無數の役人を養ふために、法外の租稅をとりたてられるものだから、國民の生活は、ますます窮迫して來て居るではないか。爲政者と云ふものは、至つて物好きなもので、發明を奬勵したり、無暗に制度を改變したりするものだから、文明の利器も多くなり、文化的施設も殖えて來るが、狹い道路に、人力車、自轉車、オートバイ、自働車、三輪車など云ふものが走り廻つて、その危險なこと、誠に言語道斷。在來の度量衡制度で、何の不足もないのに、物好きにもメートル法を採用して、物事をますます複雜にする。國家いよいよ昏しとは、實際このことである。人間の技巧が多くなれば、奇物珍品も、ますます現はれるが、それがために、特許權の侵害とか、登錄商標の僞造とか、何とかかとか、社會的罪惡が續出する。一方で、爲政者が躍起となつて、新たに規則を發布して、それを防止しようとするが、惡いことをする人間は、爲政者よりも賢明であるから、どんな法律の網の目でも、彼等は甘くくぐつて逃げ、あらゆる種類の泥坊が、白晝、大手を振つて、社會の各方面を横行して居る。これ皆、有爲、有事を以て、天下を統治するからのことではないか。昔の聖人は、流石に偉い。「わしは、こせこせした杓子定規の規則を以て、天下の民衆を統治すると云ふ樣なことは、一切やらず、無爲の生活をして居るが、それでも、天下の民衆は、チヤントよく無爲に化せられて、よく平和に治まつて居る。わしは

騒騒しいことが大嫌いで、常に靜寂な生活をなし、天下民衆を怒つたり叱つたりする樣のことは、一切しないが、それでも、彼等はチャント正しい道を歩いて居る。わしは、物事に手をだしたり、金儲のための事業に奔走したりすることは、自分でもしないし、また、人にも勸めないが、それでも、天下の民衆は、足ることを知つて、生活上、何等の不自由も感じて居ない。わしは、强慾非道なことが大嫌ひであるが、天下の民衆も、わしの眞似をしてか、極めて質朴であつて、物質に對して執著心なんか、少しももつて居ない。」と云つて居るではないか。

考證 ◻「**以正治國以奇用兵以無事取天下吾何以知其然哉以此**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"A state may be ruled by (measuers of) correction; weapons of war may be used with crafty dexerity; (but) the kingdom is made one's own (only) by freedom from action and purpose. How do I know that it is so ? By these facts:—"(國は矯正の手段を以て治められ、武器は奸智ある機敏を以て用ひられても、天下は唯、無爲、無志によつてのみ自己のものとなるなり。我は如何にしてその然るを知るや。次の事實によつてなり。)と英譯して居る。これは原文に忠實なる譯であるが、私は、これを、〔I〕"The principles of rectitude may be employed in ruling a state; stratagems may be devised in leading the army; but the world can be taken only by non-action. How do I know

that it is so? By the follwing facts:—" とでも譯したら、どうかと思ふ。◻「**天下多忌諱而民彌貧民多利器國家滋昏人多技巧奇物滋起法令滋彰盜賊多有**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"In the kingdom the multiplication of prohibitive enactments increases the poverty of the people; the more implements to add to their profit that the people have, the greater disorder is there in the state and clan; the more acts of crafty dexterity that men posses, the more do strange contrivances appear; the more display there is of legislation, the more thieves and robbers there are."(天下に禁制的法令の增加することは、民の貧窮を增進し、民の有する利器の殖えれば、殖えるほど、國と家との紊亂は大きくなり、民の有する奸智ある機敏の行爲の殖えれば殖えるほど、奇妙なる考案は多く現はれ、律法の彰はるれば彰はるほど、盜賊は多くなる。)と英譯し、ジャイルスは、〔G〕"As restrictions and prohibitions are multiplied in the empire, the people grow poorer and poorer. When the people are subjected to overmuch government, the land in thrown into confusion. When the people are skilled in may cunning arts, strange are the objects of luxury that appear. The greater the number of laws and enactments, the more thieves and robbers there will be."(制限、禁止の天下に增加する時には、民はますます貧になる。民の過度の支配に服從させられたる時には、國は混亂の裡に投

ぜらる。民の巧智ある技術に長ずれば、長ずるほど、奇妙なる奢侈品は現はる。法規、律令の數が増加すれば、するほど、盜賊は多く現はる。)と英譯して居る。而して、「民多ニ利器一、國家滋昏」と云ふ四言二句が、前者に於ては、〔L〕"The more implements to add to their profit that the people have, the greater disorder is there in the state and clan." (民の有する利器の殖えれば、殖えるほど、國と家との紊亂は大きくなる。) と譯してあり、後者に於ては、〔G〕"When the people are subjected to overmuch government, the land is thrown into confusion." (民の過度の支配に服從させられたる時には、國は混亂の裡に投ぜらる。)と譯してある。前者は原意に觸れて居る樣であるが、後者は誤譯ではないかと思はれる。この利器と云ふ言葉は、第三十六章に「國之利器、不レ可ニ以示一人」と云ふ風に現はれて居るが、ヂャイルスは、この文句を、〔G〕"The method of government must not be exhibited to the people." (施政の方法は民に示すべからず。) と英譯して居る。利器と云ふ言葉に就ては、古來、二三の異說はあるが、私の見解によれば、これは、狹義に解するならば、兵器の意、廣義に解するならば、文明の利器の意に解すべきものであつて、政治とか、支配とかの意に解すべきではないと思ふ。今この「利器」を狹義に解して、この文句を英譯するならば、〔L〕"The sharper weapons the people have, the more troubles will darken the country." とでもな

し、若し廣義に解して、この文句を英譯するならば、〔L〕"The more the factors of civilization are multiplied among the people, the darker will affairs of the country become." とでもなすべきであらう。◎「**故聖人云我無爲而民自化我好靜而民自正我無事而民自富我無欲而民自朴**」と云ふ七言四句を、レッゲは、〔L〕"Therefore a sage has said, 'I will do nothing (of purpose), and the people will be transformed of themselves; I will be fond of keeping still, and the people will of themselves become correct. I will take no trouble about it, and the people will of themselves become rich; I will manifest no ambition, and the people will of themselves attain to the primitive simplicity." (故に、聖人は、「わしは、目的ある何事もしないが、民は自から化せられ、わしは、靜かにして居るが、民は自から正しくなる。わしは、何も面倒を見ないが、民は自から富み、わしは、何等の欲望も現はさないが、民は自から原始的純朴性に達する。」と云つてゐる。) と英譯し、ヂャイルスは、〔G〕, 'Therefore the sage says: 'So long as I do nothing, the people will work out their own reformation. So long as I love calm, the people will right themselves. If only I keep from meddling, the people will grow rich. If only I am free from desire, the people will come naturally back to simplicity.'" (故に、聖人は、「わしが、何事もしないで居る間は、民は自からの改善を遂け

る。わしが、靜寂を愛する間は、民は自からを正しくする。わしが、餘計な干渉をしさえしなければ、民は富む。わしが、慾望を離れて居さえすれば、民は自然に純朴に歸する。」と云つてゐる。）と英譯してゐるが、何れも原意を十分に傳へて居る樣に思はれる。○「以レ正治レ國」が「以レ政治レ國」となり、「以二無事一取二天下一」が「以二無爲一取二天下一」となり、「吾何以知二其然一哉」が「吾何以知二天下之然一哉」又は「吾奚以知二天下其然一哉」となり、「天下多二忌諱一」が「夫天下多二忌諱一」となり、「民多二利器一」が「多二利器一」となり、「人多二技巧一」が「民多二智慧一」となり、「法令滋彰」が「法令滋章」となり、「我好レ靜、而民自正」が「我好レ靖、而天下自正」となつて居る異本もある。

評論 この第五十七章に於て、老子は、孔子の教理の中心思想なる王道と、老子時代に於て、天下を風靡して居た覇道と、老子自からの理想とせる無爲の道と、この三つの主義を相對比し、無爲の道の最も優秀なるものであることを主張したものである。即ち、「以レ正治レ國」は、王道を以て國家を統治することであり、「以レ奇用レ兵」は、老子時代の覇者の常に行つて居た所であり、「以二無事一取二天下一」は、老子の理想とせる無爲の化に就て云つたものである。「以レ此」の此の字は、第二十一章に「吾何以知二衆甫之然一哉。以レ此。」とあり、第五十四章に「吾何以知二天下之然一哉。以レ此。」とある例によつて、これを上句に係けて解せられないこともないが、私は、この第五十七章に於ては、

下句に係けて、「天下多二忌諱一」から「盜賊多レ有」までの文句によつて表現されて居る有爲・有事の統治より生ずる社會的罪惡を指したものと見るのが、最も穩健な見解であると思ふ。即ち、「天下多二忌諱一」から「盜賊多レ有」までの言葉は、「以レ正治レ國」（王道）と「以レ奇用レ兵」（覇道）とより、必然的に生ずる社會的罪惡を叙述したもので、その王道・覇道の、天下を取るに足らざるものなることを、その裏面に於て、道破し、「故、聖人云、」を以て抽き出した言葉は、「以二無事一取二天下一」の最高價値を裏書したものである。

第五十八章　（其政悶悶章第五十八）

本文　其政悶悶、其民醇醇。其政察察、其民缺缺。禍兮福之所レ倚、福兮禍之所レ伏。孰知二其極一。其無レ止。正復爲レ奇、善復爲レ妖。人之迷、其日固久矣。是以、聖人方而不レ割。廉而不レ刿。直而不レ肆。光而不レ耀。

新讀方　その政悶悶なれば、その民は醇醇たらん。その政察察たれば、その民は缺缺たらん。禍は福の倚る所にして、福は禍の伏する所なり。孰かその極を知らんや。それ止ることなきなり。正は復すれば奇となり、善は復すれば妖となる。人の迷ふや、その日固に久し。是を以て、聖人は方なれど割かず。廉なれども劌らず。直なれども肆ならず。光あれども耀かざるなり。

新字解　◎**其政悶悶**――これは、僧德清が「悶悶、無知貌。所謂民可レ使レ由レ之、不レ可レ使レ知レ之之意。」と云ひ、林希逸が「悶悶者、不レ作二聰明一也。」と云つて居る通り、無爲、無事を以て、天下を德化することを云つたものである。悶悶は、第二十章に「我獨悶悶」とある悶悶と同義。◎**醇醇**――これは、分に安んじ、足ることを知つて、質朴なる生活をすること。◎**察察**――これは、林希逸が「察察者、煩碎也。」と云ひ、吳澄が「察察、精明。」と云つて居る通り、外見上、非常に賢明、精

細に見え、こせこせして居ることで、第二十章に「俗人察察」とある察察と同義。◎**缺缺**――これは、醇醇の反對で、萬事に不滿足の意。卽ち、物質をいくら澤山儲けても、足ることを知らず。常に不滿足の念に攻められて居ること。◎**孰知其極其無止**――これは「禍兮福之所レ倚、福兮禍之所レ伏。」の六言二句を承けて居る言葉であつて、沈一貫が「倚伏禍福來、方且循環、而其極無レ止。」と云つて居る通り、善・惡、正・邪の相互的に無極に轉換することを云つたもので、「其無レ止」は、無際限、無窮極の意で、「孰知二其極一」と云ふ質問に對する解答である。◎**正復爲奇善復爲妖**――これは、「其無レ止」の說明であつて、「正と云ひ、奇と云ひ、善と云ひ、惡（妖）と云ふのは、要するに、絕對の上に、狹少なる智慧を以て、人間の與へた相對的名稱にすぎない。正を還元すれば奇となり、善を還元すれば惡（妖）となる。これと同樣に、奇の還元は正、惡（妖）の還元は善である。」の意。◎**人之迷其日固久矣**――これは、蘇子由が「若夫世人、不レ知二道之全體一。以二耳目之所レ知爲レ至。彼方且、自以爲レ福。而不レ知二禍之伏一於後一。方且、自以爲レ善。而不レ知二妖之起一於中一。區區以レ察爲レ明。至二於察甚傷レ物。而不レ悟二其非一也。可レ不レ哀哉。」と云ひ、沈一貫が「方以爲レ正。而不レ知二已爲レ奇。方以爲レ善。而不レ知二已爲レ妖。其迷若レ此。爲レ日已久。哀哉。」と云つて居る通り、一般の世人が、是非・善惡・正邪などの相對的偏見に擒はれて居ることの、時間的に久しきことを云つたものである。

即ち「其日固久矣」は、その相對的見解に攜はれて居る期間の長きこと。◎**方而不割廉而不劌**——これは、「聖人は、自から方正、且つ廉直なる人格を有して居るのであるが、和光同塵を以て、處世の要諦として居るから、他の人を無理に、自己と同樣に、方正にし、廉直にしようとはしない。」の意に解しても、又は「聖人は、方正なる德を有して居ても、それが無理に割いた樣な極端な方正ではなく、また廉直なる德性を有して居ても、それが無理に劌つた樣な極端な廉直ではない。」の意に解しても差支ない。割は、四角張つて居ること、又は、四角張らせること。劌は、稜だつて居ること。又は、稜だたせること。◎**直而不肆光而不耀**——これは、「正直であつても、馬鹿正直ではなく、また、光を有して居ても、それを內に秘して、外部に誇示しない。」の意。肆は、肆力（力一杯に働くこと。）の肆で、「極める」の意。耀は、「外部にかがやかせる」の意。

新譯 天下の民衆を治めるのに、無爲の道に卽して、萬事を自然のままに任せ、悶悶たる政治を行つて行けば、民衆は、自然の大化に抱擁せられて、醇朴なる生活を送ることが出來、分に安んじ足ることを知つて、心から平和を享有することが出來るのである。これに反して、薄淺至極な政治演說や、底の見え拔いて居る政見の發表なんかで、民衆を統治しようとして居る連中に、察察たる政治を以て、天下を掻き廻はされた日には、たまつたものではない。民衆は常に缺缺として、生活

難に苦しめられて、結局は、生の難きを捨てて、死の易きに就く樣になるのである。世の中の人人のやつて居ることを見て居れば、實にあきれる。彼等は、善と惡とは、全く別物、福と禍とは、全く無關係のものと思つて居る樣であるが、これが、そもそも、大間違ひの考である。道者の眼から見れば、禍は福の倚る所で、福なるものの存在は、禍の存在によつて可能になり、福は禍の伏する所で、福の中には、チヤント、禍が存在して居るのである。福から禍が出で、その禍から福が出で、そのまた福から禍が出る。斯く、禍と福とは、永久に循環して終止する時はないのである。豫言者を殺した帝王の子孫が、殺された豫言者のために墓を飾り、逆臣として打亡ぼされた人のために、その人を逆臣と認めた人人の子孫によつて、立派な記念碑が建てられる例は、史上にすくなくないではないか。正も邪に復することがあれば、また、邪も正に復することがある。善も復して妖ともなれば、妖も復して善ともなる。絕大無限なる道に卽して、宇宙人生を達觀せよ。察察たる政治を以て、民を缺缺たらしむる必要が何處にあるか。天下民衆のこの理を知らずして、迷妄の暗黑に包まれ、毎日毎日、入らざることをして居るのも、隨分古い昔からのことである。この理を達觀せる聖人は、自から方正であり、廉直であるが、何も天下の民衆を自分同樣のものにする必要はないから、自からの方正、廉直を以て、他の人人を律しようとはしないし、また自からの正直を、極端に

正直にして、馬鹿正直の張本人になる樣のこともなく、自からの德性上に於ける光輝を他に誇示して、自から偉ばる樣のこともしないのである。

考證 ◎「**其政悶悶其民醇醇其政察察其民缺缺**」と云ふ四言四句を、レッグは、〔E〕"The government that seems the most unwise, oft goodness to the people best supplies; that which is meddling, touching everything, will work but ill, and disappointment bring."（最も不賢明に見ゆる政治は、しばしば仁慈を民衆に將來すること最上にして、萬事に干涉がました政治は、惡のみを生じ、不滿足を將來す。）と、韻文に英譯して居る。これは原意には觸れて居るが、あまり意譯に失して居る樣に思はれる。ヂャイルスは、〔G〕"If the government is sluggish and tolerant, the people will be honest and free from guile. If the government is prying and meddling, there will be constant infraction of the law."（政治が不活潑で寛大なる時には、民衆は正直にして、狡猾ならず。政治が穿鑿すぎ、干涉すぎる時には、法律上の違犯は、絶ゆることなし。）と英譯して居るが、「其民缺缺」を〔G〕"There will be constant infraction of law."（法律上の違犯は、絶ゆることなし。）と譯して居るのは、如何に考へても、誤譯としか思はれない。私の見解によつて、この四言四句を英譯するならば、〔I〕"If the government is free from action and does not interfere, the people will be quiet and contented. If the government is prying and clever, the people will be needy and discontented."とでもなすべきであらう。◎「**禍兮福之所倚福兮禍之所伏孰知其極其無止**」を、レッグは、〔L〕"Mesery!—happiness is to be found by its side! Happiness!—misery lurks beneath it! Who knows what either will come to in the end?（禍害なるかな、幸福はその傍にあり。幸福なるかな、禍害はその下に潛む。誰かその何れの、最後に復するを知るものぞ。）と英譯して居る。「禍兮福之所倚、福兮禍之所伏」の二句に對する譯は、原意に親しい樣に思はれるが、「孰知ニ其極。其無レ止」に對する譯文は、原意を離れて居るではないと思ふ。「孰知ニ其極!」は「誰もその終極することを知らない。」の意であり、「其無レ止」は、「孰知ニ其極!」（誰もその終極することを知らない。）の理由に就て云つたものであるから、私は、この「孰知ニ其極。其無レ止」は、前二句（禍兮福之所倚、福兮禍之所レ伏）と共に、〔I〕"Upon misery happiness rests; in happiness misery lurks. Nobody knows the end of this causal chain. For it has no end."とでも譯すべきであると思ふ。◎「**正復爲奇善復爲妖人之迷其日固久矣**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"Shall we then dispense with correction? The (method of) correction shall by a turn become distortion, and the good in it shall by a turn become evil. The delusion of the people (on this point) has indeed subsisted for a long time."（我

等は、矯正を省略すべきか。矯正の方法は、却て牽强附會となり、その中に於ける善は、却て惡となるべし。この點に就て、民衆の迷へることは、實に長く持續したり。)と英譯して居る。これは「孰知二其極一。其無レ止」の「其無レ止」が「其無レ正耶」となつて居る刊本に從ひ、その「其無レ正耶」を「孰知二其極一」から切離し、「正復爲レ奇、善復爲レ妖」の句の上に添加して解釋した上の譯である樣に思はれるが、これは、私の見解とは非常に相異して居る。「其無レ止」は、前述せし如く、「孰知二其極一」の理由を說明した言葉であり、「正復爲レ奇、善復爲レ妖」の四言二句は、直接には「其無レ止」の句を說明し、間接には「禍兮福之所レ倚、福兮禍之所レ伏。」の六言二句を說明した言葉であり、正・奇は、正・邪の意、善・妖は、吉・凶の意であり、正・善は、福の說明語、奇・妖は、禍の說明語であるから、私の見解によれば、この文句は、〔I〕"What is considered right will come to be considered wrong. What is considered good will become to be considered bad. The people, however, have long been under a delusion about this truth." とでもなすべきであらう。◎「**是以聖人方而不割廉而不劌直而不肆光而不耀**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"Therefore the sage is (like) a square which cuts no one (with its angles); (like a corner which injures no one (with its sharpness). He is straightforward, but allows himself no license; he is bright, but does not dazzle. (故に、聖人は方

角の如きも、その稜角を以て、何人をも切らず。隅角の如きも、その鋭利を以て、何人をも傷けず。彼は率直なるも、自分免許をなさず。光あれども、目を眩まさず。)と英譯して居る。これは、全然誤譯であるとは云はれないが、これよりも、オールドが、〔O〕"Therefore the wise man is full of rectitude, but he does not chip and carve at others. He is just, but does not admonish others. He is upright, but he does not straighten others. He is enlightened, but he does not offend with his brightness." (故に、聖人は極めて公正なるも、他のものを割かんとはせず。彼は公平なるも、他のものを訓誡することをなさず。彼は實直なれども、他のものを眞直にせんとはせず。彼は光あれども、自からの光輝を以て無禮なることをなさず。)と英譯して居る方が、原文に忠實な譯である樣に思はれる。私は、この文句を、〔I〕"Therefore the sage is square, but he does not expect others to be equally square. He is upright, but he does not expect others to be equally upright. He is straight, but he does not expect others to be equally straight. He is bright, but he does not expect others to be equally bright." 又は、單に〔I〕"Therefore the sage is just, upright, straight and bright, but he boes not expect others to be equally just, upright, straight ano bright." と英譯したなら、原意に親しくなるではなからうかと思ふ。○「其政悶悶」が「其政閔閔」となり、「其民

醇醇」が「其民淳淳」となり、「其政察察」が「其政聲聲」となり、「禍兮福之所レ倚、福兮禍之所レ伏」が「禍兮福所レ倚、福兮禍所レ伏」となり、「其無レ止」が「其無レ正耶」となり、「廉而不レ劌」が「廉而不レ害」、又は「廉而不レ穢」となつて居る異本もある。

評論 この第五十八章の冒頭の四言四句（其政悶悶、其民醇醇、其政察察、其民缺缺。）は、老子の理想とせる無爲、無事の政治と、老子の常に反對して居る有爲、有事の政治とを比較し、前者の民に平和と幸福とを齎らすに反し、後者は民に生存苦を與ふるにすぎざるものなることを斷定したものである。而して、「禍兮福之所レ倚、福兮禍之所レ伏」の六言二句と「正復爲レ奇、善復爲レ妖」の四言二句とは、民を治むるには、宜しく悶悶なるべくして、察察なるべからざる理由を述べたもの、卽ち、禍・福、正・邪、善・惡、吉・凶は、無限大にして、且つ無限長なる絕對（道）を、極めて狹小なる眼を以て管見することより生ずる相對的名稱にすぎないものであつて、その各自に何等の眞實性なく、絕對的見解より見れば、禍必ずしも禍にあらず、福必ずしも福にあらず、正必ずしも正にあらず、邪必ずしも邪にあらず、善必ずしも善にあらず、惡必ずしも惡にあらず、吉必ずしも吉にあらず、凶必ずしも凶にあらざるものなることを道破した言葉であるが、「正復爲レ奇」の中には、「妖復爲レ善」と云ふ言葉が、自然に含まれて

居るものと見るべきである。また、「人之迷、其日固久矣」は、察察たる政治を以て、治國平天下を企圖して居る爲政者を痛罵した言葉であり、「是以」以下の文句は、悶悶たる政治の實際を說明した言葉である。

第五十九章（治人事天章第五十九）

本文 治レ人事レ天、莫レ若レ嗇。夫惟嗇、是謂二早復一。早復謂二之重積德一。重積德、則無レ不レ尅。無レ不レ尅、則莫レ知二其極一。莫レ知二其極一、可二以有レ國。有レ國之母、可二以長久一。是謂二深根固蔕、長生久視之道一也。

新讀方 人を治め天に事ふるには、嗇にしくはなし。それただ嗇なる、これを早復と謂ふ。早復はこれを重積德と謂ふ。重積德なれば、則ち尅せざることなし。尅せざることなければ、則ちその極を知ることなし。その極を知ることなければ、以て國を有つべし。國を有つの母は、以て長久なるべし。これを深根固蔕、長生久視の道と謂ふなり。

新字解 ◎**治人事天**――これは、「政治的に人民を治め、宗教的に天帝に奉仕する。」の意に解せられないこともないが、沈一貫が「聰明睿智天也。動靜思慮人也。人也者乘二於天一、明以視。寄二於天一、聰以聽。托二於天一、智以思。」と云つて居る通り、個性（身心）を以て、世に處し、人生の平和を企圖することを云つたものと解する方が、老子の意である樣に思はれる。卽ち、人と天とは、吳澄が「人、所レ成之形。天、所レ受之氣。」と云つて居る通り、人民と天帝の意ではなく、個性とその核心なる天

性を指したものであり、治と事とは、吳澄が「治、事、修レ之也。養レ之也」と云つて居る通り、その人と天との社會的、倫理的修養を云つたものである。◎**嗇**――これは、吳澄が「嗇、所レ入不二輕出一。所レ用不二多耗一也。留レ形惜レ氣要術也。」と云ひ、『老子元翼』に「嗇、音澀、不二外施一而內誠實也。」とある通り、身心を勞する上に於ても、物質を使用する上に於ても、頗る消極的態度をとり、身心・物質を浪費せざることを云つたものである。◎**早復**――これは、林希逸が「早復者、言下嗇則歸二復於根極一者早上矣。早、不レ遠也。復、返レ本還レ元也。」と云ひ、僧德清が「蓋有レ智而不レ用二其智一。此以レ嗇事レ天也。復性工夫、莫レ速二於此一。故曰、是謂二之早復一。」と云つて居る通り、「道の自然性、卽ち道の本源に復歸するのに一番の近道」の意。◎**重積德**――これは、吳澄が「重、多也。積、畜二聚於內一也。德、所レ得二於天一之沖氣。」と云ひ、林希逸が「德至レ此、則愈積愈盛矣。重、愈積之意也。」と云つて居る通り、「道的感化力の無限に充實して居る德」の意。◎**無不尅**――これは、「その德が重積であるから、如何なる物でも、その無限の德化を以て征服してしまう。」の意。◎**莫知其極**――これは、林希逸が「莫レ知二其極一者、用レ之不レ窮也。」と云つて居る通り、「重積德の內容は無限であるから、それを消盡することは出來ない。」の意。極は、窮極、卽ち「はてし」のこと。◎**可以有國**――これは、沈一貫が「凡有レ國而不レ免レ亡之者、不レ可レ謂レ有レ國。有レ身而不レ免レ殃之者、不レ可レ謂レ有

レ身。必安ニ其社稷一而享ニ其天年一者、是謂ニ有レ國有レ身。此至人之事。故曰、可ニ以有レ國。」と云つて居る通り、「永存を企圖せる國家の主宰者となることが出來る。」の意。◎**有國之母**――これは、「莫レ若レ嗇」の嗇を指したもので、「國家を永久に保持する根本義。」の意。母は、元始、又は、第一義の意に解すべきである。◎**深根固蔕**――これも、嗇を以て、現實生活の基本的要素なることを形容した言葉であつて、蔕は、果實のへた（臍）の意にも使用される文字であるが、茲では、根と同じく、草木の根のこと。◎**長生久視**――これは、長く生存し、久しく視息すること。視息は、視感と呼吸とを働かせることで、生命を持續するの意。

新譯 世の中を凝視して居ると、色色と妙なことが、老子の眼に映じて來る。ありもしない金錢を、ある樣に見せかけたり、金錢のないのに、借金までして物を買つたり、知りもしないことを、知つて居る樣に吹聽したり、他人の學說を盜んで、自から偉ばつたり、世の中の人人は、斯の如く實に妙なことをして居るが、これは凡夫迷妄のはなはだしきことで、道を離れて居ること千里萬里である。この現實生活に於て、自己の存在に平和と幸福と安定とを與へんと欲するものは、嗇の德を守るのが何よりである。嗇とは、何であるか。それは、智識なり、精力なり、體力なり、物質なりを內部に充實することに努力し、その充實したる所のものを、外部に放散したり、浪費したりすることのなき樣に、出來るだけ、注意することである。道の本性に復歸するには、この嗇の德の實行が、一番はや道である。無限大の內容を有する德を保持すると云ふのは、要するに、嗇の實行によつて、道の本性に復歸するその不斷の道的現實生活を意味するのであるが、この無限大の內容を有する德は、如何なるものでも、その德の中に抱擁してしまうのであるから、その德化によつて道的に感化せられないものは、天下にない。環境が擴大すれば、その德化も擴大して、その擴充性は環境と共に無制限に廣大になるのであるから、その德化の消盡してしまうと云ふことは、絕對的にないのである。その德化は、いくら環境に廣大されても、絕對的永久に存續する法であるから、その德化を有する聖者は、それによつて國家を無事、平和に治めてゆくことが出來る。これと云ふのも、その本は嗇の德であつて、その嗇の德が、國家を無事、平和に治める根本要素であるが、この根本要素の存續性も、また、永久不變である。古語に、「深根固蔕の如く、深く、固く德を植ゑることが、長生久視の道である。」とあるのは、畢竟、この嗇の德の無限的擴充を意味するのである。

考證 ◎「**治人事天莫若嗇**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"For regulating the human in our constitution) and rendering the (proper) service to the heavenly, there is nothing like moderation."（我等の素質中の人性を調節し、天に對して、正當なる奉仕をなすには、適度の如き何物もなし。）

と英譯し、ヂャイルスは、〔G〕"In governing men and in serving heaven, there is nothing like moderation."（人を治め、天に奉仕するには、適度の如き何物もなし。）と英譯し、オールドは、〔O〕"In ruling men and in serving heaven there is nothing like moderation."（人を治め、天に奉仕するには、適度の如き何物もなし。）と英譯して居る。レッグの譯に於ける見解は、多少私の見解に類似し、ヂャイルスとオールドの譯は、人を人間と見、天を宇宙の原理なる天と見る見解に屬するものであるが、有レ國（國をたもつ）は、要するに、治レ人事レ天の事實を指したものと見ることも出來るから、ヂャイルスとオールドとの譯は、必ずしも誤譯とは云へない。併し、私は「治レ人事レ天」は、道の自然性に卽して處世し、その平和、幸福、安定を企圖する個人的修養に就て云つたものであり、「可二以有一レ國」は、その修養の完成した上の德の、國家的適用に就て云つたものであると見るのが正しい見解であると思ふ。今この私の見解によつて、この文句を英譯するならば、〔I〕"There is nothing better in controling one's own person than moderation, and in living in conformity with the principle of nature."とでもなすべきであらう。◎「**夫惟嗇是謂早復早復謂之重積德重積德則無不剋無不剋則莫知其極莫知其極可以有國**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"It is only by this moderation that there is effected an early return (to man's normal state). That early return

is what I call the repeated accumulation of the attributes (of the Tao). With that repeated accumulation of those attributes, there comes the subjugation (of every obstacle to such return). Of this subjugation we know not what shall be the limit; and when one knows not what the limit shall be, he may be the ruler of a state."（人の正規なる狀態に早復することを遂げしむるものは、この適度によつてなり。その早復は、我の道の屬性の重積と名くるものなり。その屬性の重積を以て、かかる復歸に對する障害の征服を來す。この征服の極の何なるやを我等は知らず。而して、人はその極の何なるやを知らざる時に、彼は國の支配者とならん。）と英譯して居るが、この譯文には、原文に對する多少の誤解が含まれて居る樣に思はれる。これよりも、〔G〕"For only by moderation can there be an early return to man's normal state. This early return is the same as a great storage of virtue. With a great storage of virtue there is naught which may not be achieved. If there is naught which may not be achieved, then no one will know to what extent this power reaches. And if no one knows to what extent a man's power reaches, that man is fit to be the ruler of a state."（如何となれば、適度にあつてのみ、人は正規なる狀態に早復することを得ればなり。この早復は德の偉大なる蓄積に同じ。德の偉大なる蓄積を以てしては、達成せられざ

る何物もなし。若し達成せられざる何物もなければ、何人もその力の如何なる程度まで達するやを知らず。而して、何人もその力の如何なる程度まで達するやを知らざれば、その力を有する人は、國の支配者となるに適す。)と云ふヂャイルスの譯文の方が、譯文の意義も明瞭であり、且つ原意に親しい樣に思はれるが、今これを私の見解通りに英譯するならば、〔I〕"Simply to live in moderation is the short cut to return to the natural state of Tao. Returning to the natural state of Tao is to accumulate without limit the attributes of Tao. By accumulating without limit the attributes of Tao everything can be overcome. When everything can be overcome, no one can tell the depth of the accumulation of such attributes. When no one can tell the depth of the accumulation of such attributes, we can know that the possessor of such accumulated attributes is fit to govern the state."とでもなすべきであらう。◎「**有國之母可以長久是謂深根固蔕長生久視之道也**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"He who possesses the mother of the state may continue long. His case is like that (of the plant) of which we say that its roots are deep and its flower stalks firm:—this is the way to secure that its enduring life shall long be seen."(國の母を保有するものは長く續くべし。彼の境遇は、我等が、その根は深く、その花梗は固しと云ふ植物の境遇の如し。これは永續せる生命

の長く視らるることを確實にする道なり。)と英譯し、ヂャイルスは、〔G〕"Having the secret of rule, his rule shall endure, Setting the tap-root deep, and making the spreading roots firm: this is the way to ensure long life to the tree."(統治の秘訣を把捉して、彼の統治は持續すべし、直根を深く入れ、廣がれる根を固定すること、これ樹木に長き生命を確保する道なり。)と英譯して居るが、大體に於て、前者よりも後者の方が、原意に親しい樣に思はれる。併し、何れも私の見解とは相異して居る。「深根固蔕」を、レッグが、〔L〕"Its roots are deep and its flower stalks firm."(その根は深く、その花梗は固し....」と譯して居るのは、蔕の字を果實の「へた」(臍)の意に解したものであらうが、玆では、根も蔕も何れも「植物のね」の意に解する方が、正しい樣に思はれる。この四言一句を、ヂナイルスが、〔G〕"Setting the tap-root deep, and making the spreading roots firm."(直根を深く入れ、廣がれる根を固定する....)と譯して居るのは、「深根固蔕」が「深根固柢」となつて居る刊本に從ひ、且つ、これを沈一貫が「木有二曼根一、有二直根一。直根曰レ柢。木之所二以建一レ生也。曼根曰レ根。木之所二以持一レ生也。」と云つて居る見解に從つて解したものと思はれるが、『老子元翼』には「木之根曰レ柢。花之根曰レ蔕。根、木之本。一本之花木果實、皆從二根蔕一也。」と解してあるから、玆では、根も蔕も「植物のね」の意に解すべきであらう。而して、僧德清が「古

人所レ言、深根固蔕、長生久視之道者、如レ此而已。結句、蓋古語。老子引證。以結二其意一耳。」と云つて居る通り、「深根固蔕、長生久視之道」と云ふ言葉は、古語と見るのが、穩當である樣に思はれるから、今この私の見解によつて、この文句を英譯するならば、〔I〕"To live in moderation, the fundamental principle for ruling the state is the way by which one can endure long. This is called (by the ancients) 'The way for setting the deep roots and making them firm, and one can thereby enjoy long and lasting life'." とでもなすべきであらう。○「治レ人事レ天」が「治レ民事レ天」となり「莫レ若レ嗇」が「莫レ如レ嗇」となり、「是謂二早復一」が「是謂二早服一」となり、「早復謂二之重積德一」が「早服謂二是重積德一」となり、「無レ不レ剋」が「無レ不レ克」となり、「可二以有レ國」が「則可二以有レ國」となり、「深根固蔕」が「深根固柢」となり、「長生久視之道也」が「長生久視之道」となつて居る異本もある。

評論 この第五十九章は、安分知足の實行を可能ならしむる所の、嗇の德の實踐躬行を奬勵し、且つ、その嗇の德の實踐躬行が、本質的には、道の自然性に復歸する捷徑であり、倫理的には、それが自己の德性の涵養であり、社會的には、それが民衆德化の實行であることを力說したものである。而して、「有レ國之母」は、嗇の德を指した言葉であり、「莫レ知二其極一」は、嗇の德の擴充性の無

限なることに就て云ひ、「可二以長久一」は、その永存性に就て云つたものである。

第六十章　（治大國章第六十）

本文　治二大國一、若レ烹二小鮮一。以レ道莅二天下一、其鬼不レ神。非二其鬼不レ神、其神不レ傷レ人。非二其神不レ傷レ人、聖人亦不レ傷レ人。夫兩不二相傷一。故、德交歸焉。

新讀方　大國を治むるは、小鮮を烹るがごとし。道を以て天下に莅めば、その鬼も神ならず。その鬼の神ならざるのみにはあらず、その神も人を傷らず。その神の人を傷らざるのみにはあらず、聖人もまた人を傷らざるなり。それ兩ながら相傷らず。故に、德は交歸するなり。

新字解　◎**治大國若烹小鮮**――これは、僧德清が「烹二小鮮一、則不レ可レ撓。撓則糜爛而不レ全矣。治レ民亦然。」と云ひ、蘇子由が「烹二小鮮一者、不レ可レ煩。煩則人勞。撓則魚爛。」と云つて居る通り、「小さな雜魚を煮る時に、無暗に箸や杓子でまぜかへすと、魚は滅茶苦茶になつてしまう。大國を治める時にも、その通り。割箸の樣な法令、規則で人民を攪亂すると、人民は滅茶苦茶に混亂してしまう。だから、大國を統治するには、一切無干涉主義でやれよ。」の意。小鮮は、小魚のこと。◎**莅**――莅は、涖祚の涖と同じく、天下に君臨して、民を治むること。◎**其鬼不神**――これは、吳澄が「鬼不二爲二靈怪一、興二災妖一也。曰レ鬼、曰レ神、皆天氣之氣、名二而實一也。」と

云つて居る通り、「天下の民衆が、聖人の德化に浴し、天下泰平に治まつて居る時には、鬼神もその威德を振つて、人民を加護する必要を認め得ない。」の意。この鬼神に關する支那思想は『維摩經』（觀衆生品第七）に「譬如二人畏時、非人得二其便一。如レ是弟子、畏二生死一故、色聲香味觸、得二其便一也。」と云ふ印度の非人觀に酷似して居る。（『碧巖錄の現代的解說』第四七七―四八二頁參照）◎**其神不傷人**――これは、「鬼神が、聖人の德化に浴して居る人民を傷害する樣のことはない。」の意。◎**聖人亦不傷人**――この句は、「以レ道莅二天下一」の句に照應し、「聖人以レ道莅二天下一、亦不レ傷レ人。」の意で、道を以て天下に莅まないで、人を傷つて居る似而聖人の爲政者のあることも、暗に諷刺して居る。（考證）參照）◎**兩不相傷**――これは、「鬼神も聖人も、民衆を傷害しない。」の意で、天と人との相協調せることを云つたものである。◎**德交歸焉**――これは、林希逸が「言、天地得二自然之道一、聖人亦得二自然之道一。各有二其德一、而不二相侵越一。故曰、交歸レ之。」と云つて居る通り、鬼神も、自然の道に卽して、民衆を傷害せず、聖人も、また自然の道に卽して、民衆を傷害せず、何れもその德が、道の自然性に契合して居ることを云つたものである。

新譯　大きな國は、氣候、風土の異なる色色なる地方を包容し、言語、人情、風俗の同じからざる種種の民族を包含して居るのであるから、一本の杓子定規を以て、それを一樣に治めて行くこと

は、迚も出來るものではない。また、こせこせした法律、規則を朝令暮改的に實施して、天下泰平を企圖した所で、そんなことで、天下が、泰平になるものでもない。そんなことをすれば、天下は却て、亂麻の如き狀態に陷るにきまつて居る。大國を治むるには、小さい雜魚を煮る時の態度を以て臨まなくてはならない。火が强くてもいけなければ、箸で攪亂してもいけない。小さい雜魚を煮るにも、大きな國を治めるにも、有事、有爲のこせこせ主義は、全く禁物である。これに反して、無事、無爲の道を以て、天下を治めてゆけば、民の平和に治まるのは無論のこと、鬼神もその靈力を以て、民衆を加護する必要を認めない樣になる。否、鬼神がその靈力を以て、民衆を加護する必要を認めない樣になるばかりではなく、無事、無爲の治下にある民衆を傷害する樣のこともない樣になるのである。否、人を傷害しないのは、鬼神ばかりではなく、眞に無事、無爲を體得して居る聖人ならば、自稱聖人の如く、惡政を以て、天下の民衆を傷害する樣のことはないのである。この天地の靈なる鬼神と、民衆の君なる聖人とが、何れも民衆を傷害せず、無事、無爲に天下が泰平に治まつて行けば、そこに、天地の靈なる鬼神の德と、民衆の君なる聖人の德とが、民衆の平和と幸福と安全との上に、圓滿に交叉して、大道の德の効果を、具體的に露現して居ることになるのである。

考證 ◎「治大國若烹小鮮」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"Governing a great state is like cooking small fish."（大國を統治することは、小魚を料理するが如し。）と英譯し、ヂャイルスは、〔G〕"Govern a great nation as you would cook a small fish."（小魚を料理するが如くにして、大國を統治せよ。）と英譯し、更に"Don't overdo it."（それを料理しすぎるなかれ。）と脚註を施して居る。また、オールドは、〔O〕"The state should be governed as we cook small fish, without much business."（國家は、我等があまり手出しをせずに小魚を料理するが如くにして、統治せらるべきなり。）と英譯して居る。これは、何れも原文に忠實な譯ではあるが、「烹三小鮮一」とは、名も知れぬ色色なる雜魚を、一緒にして一箇の鍋に入れて煮る場合を指したものであるのに、その意味が、この譯文の上には判然して居ない樣に思はれる。殊にヂャイルスが、小鮮を〔G〕"A small fish"（一尾の小魚）と、單數に譯して居るのは、誤解を招きやすい。私は、この文句を〔I〕"A great country with its great variety of human affairs should be governed as we cook lots of small fish in one cauldron."とでも英譯したならば、多少は原意に親しくなるではあるまいかと思ふ。◎「**以道莅天下其鬼不神**」と文句を、レッグは、〔L〕"Let the kingdom be governed according to the Tao, and the manes of the departed will not manifest their spiritual energy."（王國は道に從つて治めしめよ。

されば、死者の靈魂はその靈的精力を現はさざるなり。）と英譯して居るが、鬼の字を〔L〕"The manes of the departed"（死者の靈魂）と譯するのは、適當でない樣に思ふ。この鬼の字を、オールドは〔O〕"The shades of the dead"（冥土の死鬼）と譯し、ヂャイルスは、〔G〕"Disembodied spirits"（肉體を離脱したる靈神）と譯して、何れもレッグと同じく、死靈の意味に解して居るが、恐らく、これは老子の意ではあるまい。今この文句を、私の見解通りに英譯するならば、〔I〕"When Tao is employed in governing the world, ghosts can find no necessity to exercise their spiritual power (to benefit the people)," とでもなすべきであらう。◎「**非其鬼不神其神不傷人**」と云ふ五言二句を、レッグは、〔L〕"It is not that those manes have not that spiritual energy, but it will not be employed to hurt men."（それは、その死者の靈魂に、靈的精力のなきにはあらず。その靈的精力が、人人を害するために用ひられざるなり。）と英譯し、ヂャイルスも、これと同意義に英譯して居る。これは、何れもこの五言二句を、「その鬼が神ならざるは、神なるべき力の缺如して居るためではなく、神なるべき力はあつても、その力を以て、人を害しないのである。」の意に解した上の譯であると思はれるが、恐らく、これは老子の原意ではなからう。私の見解によれば、上句の「以レ道莅二天下一、其鬼不レ神」は、「聖人が、道を以て天下に莅めば、天下は、その聖人の德化によつて、よ

く治まつて居るから、天地の靈なる鬼神の善的助力を要しない。」の意であり、この五言二句（非二其鬼不一レ神、其神不レ傷レ人」は、「聖人が、道を以て、天下に莅んで居れば、鬼神は、自己の靈力を以て、民衆を保護する必要を認めないのみならず、その靈力を以て、民衆を傷害することもしない。」の意であつて、唯に民衆のみならず、鬼神も亦、その聖人の德化に浴して居ることを暗示して居る言葉であるから、この五言二句は、〔H〕"Not only will ghosts have no necessity to exercise their spiritual power (to benefit the people), but they will find no possibility to harm the people." とでもなすべきであらう。◎「**非其神不傷人聖人亦不傷人**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"It is not that it could not hurt men, but neither does the ruling sage hurt them."（死者の靈魂が、人人を害すること能はざるにはあらず。治めつつある聖人も亦、彼等を害せざるなり。）と英譯し、ヂャイルスも亦、これと同樣の意義に英譯して居る。これは、「非二其神不一レ傷レ人」を「非二其神不一レ能レ傷レ人」の意に解しての譯であるが、これも、私の見解とは相異して居る。私の見解によれば、これは「道が、眞に天下に行はれて居る時には、鬼神が天變地異の働きを以て、民衆を傷害する樣のことなきばかりでなく、聖人を以て自任して居る爲政者が、惡政を以て、民衆を傷害する樣のこともない。」の意であつて、「聖人亦不レ傷レ人」の一句の中には、老子の時代に對する多量の諷刺が含まれ

て居るのであるから、この見解によつて、この文句を英譯するならば、〔H〕"Not only will the ghosts find no possibility to harm the people, but the sage will also find no possibility to harm them." とでもなすべきであらう。◎「**夫兩不相傷故德交歸焉**」と云ふ文句を、レッグは、〔E〕"When these two do not injuriously affect each other, their good influences converge in the virtue (of the Tao)." (この二つが有害的に相影響を及ぼさざる時に、彼等の善なる感化は道の德に歸着するなり。)と英譯し、ヂャイルスは、〔G〕"If then neither sage nor spirits work harm, their virtue converges to one beneficent end." (聖人も神靈も害をなさぬならば、彼等の德は、一の仁惠的目的に歸著するなり。)と英譯して居るが、これは、何れも原意に觸れて居る樣に思はれる。○「治二大國一」が「治二大國一者」となり、「以レ道莅二天下一」が「以レ道莅二天下一者」となり、「其鬼不レ神」が「其鬼不レ神也」となり、「非二其鬼不レ神」が「非二其鬼不レ神也」となり、「其神不レ傷レ人」が「其神不レ傷レ人也」となり、「聖人亦不レ傷レ人」が「聖人亦不レ傷レ民」となり、「故德交歸焉」が「德交歸焉」となつて居る異本もある。

評論 この第六十章は、まづ、冒頭に於て、「治二大國一、若レ烹二小鮮一」と道破して、大國の統治者は、宜しく、こせこせした干渉主義、おせつかい主義の施政法を拋棄すべきであることを云ひ、次

に、道に卽せるものの天下に莅める時には、神佛が、人民を加護する必要もなければ、また、お賽錢を撤いたり、お布施をなげたりして、神官や僧侶を雇ひ、國民の思想善導なんかのために、神佛に加護を求めなくても、神佛は何等の罰をあてるものでもなきことを云ひ、更に「非二其神不レ傷人、聖人亦不レ傷レ人」と云つて、老子の時代に聖人顏をして、民を傷害することを恣にして居た爲政者にあてつけ、最後に「夫兩不二相傷一。故、德交歸焉」と云つて、道の德化は、神(鬼神)人(聖人)合一の平和を將來するものなることを斷定したものであるが、この結尾の十字の中には、平氣で惡政を行ひ、民衆を傷害して居ながら、迷信にすぎざる宗教の力を借りて、天下泰平を招來せんと迷想せる爲政者を嘲笑して居る樣な氣分も、多少は含まれて居る樣にも思はれる。

第六十一章（大國者下流章第六十一）

本文 大國者下流、天下之交。天下之牝。牝常以ㇾ靜勝ㇾ牡、以ㇾ靜爲ㇾ下。故、大國以下二小國一、則取二小國一、小國以下二大國一、則取二大國一。故、或下以取。或下而取。大國不ㇾ過ㇾ欲ㇾ兼二畜人一。小國不ㇾ過ㇾ欲二入事ㇾ人。夫兩者、各得二其所ㇾ欲。故、大者宜ㇾ爲ㇾ下。

新讀方 大國は下流にして、天下の交なり。天下の牝なり。牝は常に靜を以て牡に勝ち、靜を以て下ることをなすなり。故に、大國は以て小國に下れば、則ち小國を取り、小國は以て大國に下れば、則ち大國に取らる。故に、或は下りて以て取り、或は下りて而も取らる。大國は人を兼ね畜はんと欲するに過ぎず。小國は入りて人に事へんと欲するに過ぎず。それ兩者は、おのおのその欲する所を得るなり。故に、大なるものは宜しく下ることをなすべし。

新字解 ◎**大國者下流天下之交**——この文句を、「大國は下流なり。大國は天下の交なり。」と云ふ風に解して居る學者もあるが、吳澄が「交、會也。大國者、諸小國之交會。如二水之下流、爲二天下衆水之交會一也。」と云つて居る通り、「天下之交」は上句に接續して、「大國は下流にして、天下の交なり。」

と讀み、「道に卽せる政治を以て統治されて居る强大なる國は、常に天下の衆水の交會する河海の如きものであるべきである。」の意に解すべきである。◎**天下之牝**——これは「大國者、天下之牝。」卽ち「天下中の牡をひとりで引受けて居る一匹の大牝」の意。◎**牝常以靜勝牡以靜爲下**——これは、吳澄が「牝不二先動以求一ㇾ牡。牡常先動、以求ㇾ牝。動求者招ㇾ損、靜俟者受ㇾ益。故曰二以ㇾ靜勝一ㇾ牡。動求者居ㇾ上、靜俟者居ㇾ下。故曰二以ㇾ靜爲一ㇾ下。」と云つて居る通り、「陰性の牝は、常に消極的動作の靜を以て、陽性の牡を制御し、その靜を以て消極的狀態の下に安住して居る。」の意。◎**故或下以取或下而取**——これは、吳澄が「以取、謂二大國能下、以取二小國之樂附一。而取、謂二小國能下、而取二大國之容一也。」と云ひ、蘇子由が「大國下以取ㇾ人、小國下而取二于人一。」と云つて居る通り、「大國が謙德を守つて、小國に對して牝の態度をとれば、小國を自國の勢力範圍に置くことが出來、小國が同じく謙德を守つて、大國に對して、牝の態度をとれば、大國に包容され、その保護を受けることが出來る。」の意。◎**大國不過欲兼畜人小國不過欲入事人**——これは、林希逸が「大國之意、不ㇾ過ㇾ欲二兼畜一天下之人一、以爲二强盛一。小國之意、不ㇾ過ㇾ欲二鐫刺、求二入於人一。」と云つて居る通り、「大國の企圖する所は、出來るだけ廣く領土を擴張し、出來るだけ多くの民衆を、その勢力範圍內に置くことであり、小國の企圖する所は、大國に隷屬して、その保護によつて、自國の安全を得ることである。」

の意。兼畜は、包括的に生存の道を與ふること。

新譯 道に卽せる政治を以て、天下に臨んで居る大國は、天下の衆水の歸入する河海の如きものとでも云へようし、また、天下のあらゆる牡を一手に引受けて居る巨大なる牝とも云へよう。すべて女性的なる牝は、何時でも、その消極的靜の德を以て、男性的なる牡を征服し、靜の德を守つて、常に下流にも比すべき位置に安んじて居る。であるから、大國たるものが、何時までも大國で居やうと思へば、自から謙遜の態度を以て、群小國に臨まなくてはならない。大國は、その謙遜の實行によつて群小國を自からの勢力範圍に入れることが出來るのであるし、また、小國も、自からの存在を永久に安全ならしめんと欲するならば、謙遜の德を守つて、大國と交はらなくてはならない。小國は、その謙遜の實行により、大國の治下にあつて、その存在を全ふすることが出來るのである。斯の如く、大國が小國を取るのも、小國が大國に取られるのも、何れも謙遜の實行によつて可能になるのである。元來、大國の常に希望して居る所のものは、出來るだけ多くの人人を、自國の勢力範圍に屬せしむることであり、小國の常に希望して居る所のものは、大國の勢力の下で、自國の存在を出來るだけ長く、安全ならしむることに外ならない。而して、この兩者は、何れも自から下ることによつて、自己の欲する所を實現することが出來るのである。小國は、もともと下るべき

運命にあるのだから、下らざるを得ないが、大國は、不圖すると、自からの下流たるべきことを忘れて、無暗に上流振ることがある。大國の破滅は、ここに基因して居る。故に、大なるものは、常に宜しく下るべきである。

考證 ◎「**大國者下流天下之交**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"What makes a great state is its being (like) a low-lying, down-flowing (stream);—it becomes the centre to which tend (all the smaller states) under heaven." (大國を作るものは、その低處、下流の如くなるものなり。それは天下のすべての小國の赴く中心となるなり。)と英譯して居る。これは、必ずしも誤譯とは云へないかも知れないが、私は、これを〔I〕"The great state is like the downstream towards which all the smaller streams under heaven tend." とでも譯した方が、原意に親しくなる樣に思ふ。◎「**天下之牝牝常以靜勝牡以靜爲下**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"(To illustrate from) the case of all females;—the female always overcomes the male by her stillness. Stillness may be considered (a sort of) abasement." (すべての牝の場合より說明せんに、牝は常にその靜を以て牡に勝つ。靜は低下の種類と見做さるべし。) と英譯して居るが、私の見解から云へば、これは誤譯に近い。「天下之牝」は「大國者、天下之牝」の意であり、「以レ靜爲レ下」は「牝常以レ靜爲レ下」の意であるから、こ

の見解によつて、この文句を英譯するならば、〔I〕"It is also like the female for the world. The female always controls the male by her quietude, and through her quietude she is contented with her low position." とでもなすべきであると思ふ。◎「**故大國以下小國則取小國小國以下大國則取大國故或下以取或下而取**」と云ふ文句を、ヂャイルスは、〔G〕"Therefore, if a great kingdom humbles itself before a small kingdom, it shall make that small kingdom its prize. And if a small kingdom humbles itself before a great kingdom, it shall win over that great kingdom. Thus the one humbles itself in order to attain, the other attains because it is humble." (故に、若し大國が、小國の前に自から謙遜なれば、大國はその小國を自からの獲物となすべし。而して、若し小國が、大國の前に自から謙遜すれば、小國はその大國を味方となすべし。斯く、一は目的を達成するために、自から謙遜し、他のものは、自から謙遜するが故に、目的を達成するなり。)と英譯して居る。これは大體に於て原意に觸れては居るが、これよりも、私は、〔I〕"Therefore, if the great state humbles itself before the small states, it will be able to put them under its influence; if the small states humble themselves before the great state they will be able to win its favour. Thus, in the case of the great state the humbling gains adherents, and in the case of the small states the humbling

wins favour." とでも英譯した方が、一層原文に親しくなるではあるまいかと思ふ。◎「**大國不過欲兼畜人小國不過欲入事人夫兩者各得其所欲故大者宜爲下**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"The great state only wishes to unite men together and nourish them; a small state only wishes to be received by, and to serve, the other. Each gets what it desires, but the great state must learn to abase itself." (大國は人人を結合し、それを養育せんと欲するにすぎず。小國は他のものに受け入れられ、それに奉仕せんと欲するにすぎず。各各その欲する所のものを得るも、大國は自から下ることを學ばざるべからず。)と英譯して居る。これは、大體に於て原意を離れては居ない樣に思はれるが、私の見解とは、多少の相異がある。「兼三畜人」は、大國の領土的野心に就て云つたものであつて、その動機は、謙遜の德に屬するものではない。これに反して、「入事ㇾ人」は、全く謙遜の德に基く希望である。而して、「故、大者宜ㇾ爲ㇾ下」は、謙遜によるにあらざれば、「兼三畜人」の慾望を達することも出來ず、また永久に「天下之交、天下之牝」となることも不可能であることを云つたものであるから、今この見解によつて、この文句を英譯するならば、〔I〕"The great state has no further desire than to subjugate as may people as possible to its control, while the small states have no further desire than to be favoured by and to serve the great ruler. These two have the possibility

to realize what they desire. But the great one must be humble to realize what is aimed at." とでも譯すべきであらう。○「大國者下流」が「大國者天下之下流」となり、「牝常以レ靜勝レ牡、以レ靜爲レ下」が「牝常以レ靖勝レ牡、以二其靖一故爲レ下也。」となり、「則取二小國一」が「則取二於小國一」となり「則取二大國一」が「則取二於大國一」となつて居る異本もある。

評論 この第六十一章は、僧德清が「此言下君二天下一者、當二以レ靜勝爲レ主、不可二以レ力相尙一也。……此老子見二當時諸侯一、專二於征伐一、以レ力不レ以レ德、知レ動不レ知レ靜、徒見二相服之難一、而不レ知二下之一字、爲二至簡之術一。蓋傷レ時之論也。」と云つて居る通り、老子の時代に於ける諸侯が、常に動と强と傲慢と横暴とを以て、各自何れも大國たらんと焦慮して、日夜、戰鬪の事にのみ從つて居た現實的世相に對する、老子の一大警告であるが、この老子の古き一大警告は、現代の列强に對しても、剴切なる新らしき一大教訓たり得る價値を十分に、有して居る樣に思はれる。

第六十二章 （道者萬物之奧章第六十二）

本文 道者萬物之奧、善人之寶、不善人之所レ保。美言可二以市一、尊行可二以加レ人。人之不善、何棄之有。故立二天子一、置二三公一。雖レ有二拱璧以先二駟馬一、不レ如二坐進二此道一。古之所二以貴二此道一者何也。不レ曰二求以得、有レ罪以免一耶。故、爲二天下貴一。

新讀法 道は萬物の奧、善人の寶、不善人の保つ所なり。美言は以て市るべく、尊行は以て人に加ふべし。人の不善なる、何の棄つることかこれあらん。故に、天子を立て、三公を置くなり。拱璧の以て駟馬に先だつことありと雖も、坐がらにしてこの道に進むには如かず。古のこの道を貴ぶ所以のものは何ぞや。求むれば以て得、罪あるも以て免ると曰はずや。故に、天下の貴となるなり。

新字解 ◎**道者萬物之奧**——これは、僧德清が、「奧者、室之西南隅。有レ室必有レ奧。但人雖レ居二其室一、而不レ知二奧之深邃一。以譬下道在二萬物一、施二之日用尋常之間一、人日用而不上レ知。故如レ奧也。」と云ひ、吳澄が「道之尊貴、猶二寢廟堂奧之奧一。奧、室之西南隅。寢廊之制、有レ堂有レ室。室在レ內。故室爲レ貴。室中制、東南隅曰レ突。東北隅曰レ宦。西北隅曰二屋漏一。奧、尊者所レ居。故奧爲レ貴。」と云

つて居る通り、奥が室中の至尊至貴の所である如く、道は、萬物の中にあつて至尊至貴の地位を占めて居るものであることを云つたものである。◎**不善人之所保**――これは、吳澄が「不善人、以レ道保レ身者、畏レ威、寡レ罪、身獲二全安一。」と云つて居る見解に從へば、「不善人の保せらるる所なり。」と讀んで「不善人が道の保護を受けて、その生命を存續させて居る。」の意に解すべきであるが、僧德清が「道既在二萬物一、足レ知二人性皆同一。雖レ有二善惡之差一、而性未二嘗異一。以二其俗習之偏一耳。故善人得レ之、以爲レ寶。惡人雖レ失、亦賴二此道一、保レ之以有レ生。故曰レ所レ保。」と云つて居る見解に從へば、この文句は、「不善人の保つ所なり。」と讀み、「不善人の不善性も亦道の一面である。」と解し、相對的に不善と認められて居る所のものも、これを絶對的に觀察すれば、矢張道の一端であるといふ思想に就て云つたものと見るべきであらう。◎**美言可以市尊行可以加人**――これは、吳澄が「嘉言可レ愛、如二美物之可二以鬻賣一。卓行可レ宗、高出二衆人之上一。」と云ひ、呂吉甫が「夫言之美者、可二以市一、行之尊者、可二以加一人、則人無二善不善一。固知二其美所レ美、而尊所レ尊、以二其有二可レ市、可レ加也。」と云つて居る通り、不善人も、道の上から云へば、道の全體的組成の上に於て、善人と同等の資格を有して居ることを云つたもので、「善言が善言として鑑賞せられ、德行が德行として尊重せられるのは、善言を鑑賞し、德行を尊重する不善人があるからのことである。」の意。市は、賣の意であるが、茲では、不善人に買はれること。加は、不善行の上に置かれて尊重されること。◎**人之不善何棄之有**――これは、絶對的道の上から、相對的社會に行はれて居る罪惡を觀察した言葉であつて、「不善は、善の支持者であるから、社會から不善を除去すれば、善の存在はなくなるのであるし、また、不善を社會から殘らず除去し得るものでもない。」の意。◎**故立天子置三公**――これは、沈一貫が「且天下均是人也。而立二一人一、焉爲二天子一。又求二天下之賢人君子一、而置レ之爲二三公一。相與出二賦稅一、而養レ之、鞠躬而事レ之。此何爲哉。使二天下皆善人一、則無レ君無相而可。」と云つて居る通り、一國に主宰者があり、三公があつて、國家を構成し、現實社會の活動を可能ならしめて居るものは、世に不善人が存在するからのことであることを云つたものである。三公は、時代によつて名稱が相異して居るが、周の時代の三公は、『書經』(周書周官)に「立二太師太傅太保一、茲惟三公論レ道經レ邦。」とある太師・太傅・太保の三官職である。◎**雖有拱璧先以駟馬不如坐進此道**――これは、僧德清が「此古語也。老子解レ之曰、然天子三公、不レ足レ爲二尊貴一。拱璧駟馬、不レ足レ爲二榮觀一。不レ如二座進二此道一。」と云ひ、林希逸が「拱璧以先二駟馬一、聘レ賢之禮也。卑レ拱厚レ禮、求レ賢而致二之三公之位一、不若二能虛能謙、以求二此道一。故曰、不レ如二坐進二此道一。」と云つて居る通り、古語であつて、「まづ拱璧を贈つて就職の承諾を得、それから駟馬を遣はして迎ひにやつて、賢者を招く樣なことがあつても、

賢者たるものは、そんな招きに應じて、三公なんかになるものではない。それよりも、自己の現在の境遇にあつて、冲虛の道を實踐躬行して居る方が、遙にましである。」の意。拱璧は、兩手で一抱もある璧。駟馬は、文學上では、一臺の車につける四頭の馬のことであるが、實は「四頭の馬のつけてある馬車」の意。進此道は、「この道を他の人に進呈する」の意ではなく、「冲虛の道の上の修行を積むこと」を云つたものである。◎**不曰求以得有罪以免耶**——これは、蘇子由が「道本在レ我。人患レ不レ求。求則得レ之矣。道無二功罪一。人患レ不レ知。知則凡罪、不レ能レ汙也。」と云つて居る通り、求以得は、道の人人の脚跟下にあることを云ひ、有罪以免は、「國家の法律上の罪人が、無罪になる。」の意ではなく、「彼罪性不レ在レ內、不レ在レ外、不レ在二中間一。如二佛所說一、心垢故衆生垢。心淨故衆生淨。心亦不レ在レ內、不レ在レ外、不レ在二中間一。如二其心然一、罪垢亦然。諸法亦然。不レ出二於如如一。優波難、以二心相一得二解脫一時、寧有レ垢不。」（『維摩經』弟子品第三參照）と云つて居る維摩の罪惡觀と等しく、道の自覺の上には、善と不善との差別相のなきことを云つたものである。不曰耶は、「言はないことではない。」の意。◎**故爲天下貴**——これは、「故に、坐がらにしてこの道に進む者は、天下の貴となるなり。」の意。貴は、「高貴なる人格者」を指したものである。

解說 冲虛なる道は、これを一軒の家に喩をとつて云へば、家の一番大切な奧の如きもので、天

地萬物の堂奧となつて居るものである。而して、この道は、天下の善人の善的性情を組成して居るものであるから、善人の寶であることは勿論であるが、不善人であつても、矢張この道は保有して居るのである。世の中には、金言とか、格言とが、色色と美しい教訓があつて、人人は、それを鑑賞し、讃美して居るが、この事實の裏面には、その樣な美しい教訓の實行を强要せられなければならぬ善からぬ人物が、多く存在して居ることを知らなければならぬ。また、社會奉仕に精勵したとか、貧民救助に盡力したとか、社會改良に盡瘁したとか云つて、褒狀を貰つたり、勳章を戴いたりするものがあるが、この事實の裏面には、その樣な尊行を必要ならしめた善からぬ人物が、多くあつたことを認めぬ譯にはゆくまい。要するに、斯く、善をして社會的に善ならしめるものは、不善の存在である。人の不善なる何の棄つることがこれあらんやではないか。現に世の中には、天子が立ち、三公が置かれて、國家の政體が立派に出來て居るが、これを必要ならしめたものは何か。それは不善人の存在によるのではないか。古語に「拱璧をまづ以て贈り、それから駟馬を遣はして、賢者を招くと云ふことがあるが、そんなことをして招かれて行くよりも、自分の現在の境遇にあつて、冲虛なる道に卽した生活をして居る方が、遙に上策である。」と云ふ言葉があるが、實際その通りである。元來、古人が、それほどまでに、この冲虛なる道を尊重したのは、何故であらうか。そ

れは言はぬことではない、沖虛なる道は、如何なる處に於てでも、如何なる時にあつてでも、求めさえすれば、直に得られ、また、その道の上に立脚して居れば、天下の罪惡・汚穢あらゆる不善が、この道の絶對相に抱擁され、美化されて、そこに絶對的・眞・善・美の生成されて居ることを悟り得るからである。斯くして、道の體驗者は、天下の至高者となり得るのである。

考證 ◎「**道者萬物之奧善人之寶不善人之所保**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"Tao has of all things the most honoured place. No treasures give good men so rich a grace; bad men it guards, and doth their ill efface." (道は萬物の最も尊貴なる處を占む。如何なる富も左樣なる恩惠を善人に與へず。それは惡人を守護し、彼等の惡を消滅せしむるなり。)と英譯して居るが、私の所見ではこれは誤譯である。この文句に對するヂャイルスの譯文は、〔G〕"Tao is the sanctuary where all things find refuge, the good man's priceless treasure, the guardian and saviour of him who is not good." (道は萬物の避難する靈廟にして、善人の無價の寶、善からぬ人の守護者、また救主なり。)となつて居る。これは、レッグの譯文よりも原文に親しい樣に思はれるが、私の見解とは相異して居る。今これを私の見解によつて英譯するならば、〔I〕"Tao is the sanctuary of all things, which shall be honoured by all. It is the treasure possessed by good men, while it is also possessed by

those who are not good." とでもなすべきであらう。◎「**美言可以市尊行可以加人人之不善何棄之有**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"(Its) admirable words can purchase honour; (its) admirable deeds can raise their performer adove others. Even men who are not good are not abandoned by it." (その賞讃すべき言葉は、名譽を贏ち得、その賞讃すべき行爲は、他のものの上に、その行爲者をあぐることを得るなり。善からぬ人と雖も、それによつて棄てられず。)と英譯して居るが、私の見解とは相異して居る。元來この「美言可二以市一尊行可二以加一人」と云ふ言葉は、美言が、美言として賞讃せられるのは、美言ならざるもの(不善)の存在によるのであり、尊行が、尊行として賞讃せられるのは、尊行ならざるもの(不善)の存在によるものであることを云ひ、「人之不善、何棄之有」の理由を說明したもの、卽ち、約言すれば、美言・尊行の存在は、不善の存在によるものであることを云つたものであるから、この見解によつて、この文句を英譯するならば〔I〕"Beautiful words are sold (among those who have not them); noble deeds are honoured (among those who have not them.) Therefore, there is no need to throw away undesirable things existing among the people." とでもなすべきであらう。◎「**故立天子置三公雖有拱璧以先駟馬不如坐進此道**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"Therefore when the sovereign occupies his place as the son of heaven, and he has appointed

his three ducal ministers, though (a prince) were to send in a round symbol-of-rank large enough to fill both the hands, and that as the precursor of the team of horses (in the court-yard), such an offering would not be equal to (a lesson of) this Tao, which one might present on his knees."

(故に、君主が天子として、その位を占め、三公を任命する時に、假令王子が、中庭に於ける駟馬に先だつものとして、兩手に一杯になるほど大なる圓き位階の表徵物を贈り來ることあるも、左樣なる贈物は、脆坐して進むる所の道の敎訓に均等ならざるべし。)と英譯し、ヂャイルスも、オールドも、殆どこれと大同小異の意義に英譯して居るが、私の所見では、これは何れも原意を離れて居る。元來、この「故、立二天子一、置二三公一」と云ふ言葉は、上句の「人之不善、何棄之有」に係り、天子の卽位と三公の任命とは、世に不善が存在するからのことである。若し、世に不善なるものが存在しなかつたならば、政治的國家を組織する必要はない。卽ち現在の國家の政體を肯定することと、不善を否定することは、兩立しないものであると云ふことを主張したものであり、「雖レ有二拱璧一以先二駟馬一、不レ如二坐進二此道一」と云ふ言葉は、古語をその儘、借り來つて、道者は、政治的國家の組織中に入つて、人爲的施政に參與することを欲すべきにあらざることを云つたものであるから、この言葉は「故、立二天子一、置二三公一」と云ふ言葉から切り離して見るべきものである。今この

私の見解によつて、この文句を英譯するならば、(I) "For the enthronement of a king and the appointment of his three ducal ministers are necessitated by the existence of such undesirable things. (It is said by the ancients that) though an appointment may come (to become one of the ministers) with the present of a jade large enough to fill both the hands and a chariot with teams of four horses, it is better to keep advancing in the practice of Tao without moving where one is, than to assume such an offices."とでもなすべきであらう。◎「**古之所以貴此道者何也不曰求以得有罪以免耶故爲天下貴**」と云ふ文句を、レッグは、(L) "Why was it that the ancients prized this Tao so much? Was it not because it could be got by seeking for it, and the guilty could escape (from the stain of their guilt) by it? This is the reason why all undar heaven consider it the most valuable thing."(古人が、この道を、それほどまでに、貴びたるは何故ぞや。そは、道はそれを求めることによつて得られ、罪あるものは、道によつて、彼等の罪の汚點を離れ得るが故なり。これ天下のものが、道を最も高貴なるものと認むる所以なり。)と英譯して居る。これは必ずしも誤譯とは云へないかも知れないが、私の見解とは相異して居る。私の見解によれば、「古之所二以貴一此道一者何也。」は、「雖レ有二拱璧一以先二駟馬一、不レ如二坐進二此道一。」と云ふ古語に係り、「求以得」は、「坐進二此道一」

の可能なることを云ひ、「有レ罪以免」は、「人之不善、何棄之有」と云ふ見地からして、老子が、自己の煩惱卽菩提觀を提唱した言葉であるから、今この見解によつて、この文句を英譯するならば、

〔I〕 "Why is it that the ancients esteemed this Tao to such an exetent? Is it not because Tao can easily be found whenever it is seeked for, and in the realization of it nothing is found with any stain of guilt. Hence it is the most honoured thing under heaven." とでもなすべきであらう。

○「道者萬物之奧」が「道者萬物之奧也」となり、「善人之寶」が「善人之所レ寶」となり、「不善人之所レ保」が「不善人之所レ不レ保」となり、「美言可二以市一」が「美言可二以於市一」、又は「美言可二於市尊一」となり、「尊行可二以加レ人」が「善行可二以加二於人一」、又は「尊言可二以加二於人一」となり、「不レ如二坐進二此道一」が「不レ如レ進二此道一也。」となつて居る異本もある。

評論 この第六十二章は、まづ第一に、道は萬物の大宗にして、善人も不善人も、共にその道に抱擁されて居るものなることを云ひ、次に、それを證據立てるために、世に美言、尊行の尊重されて居るのは、不美言、不尊行の存在せるによるものなること、卽ち、第二十七章に「善人者、不善人之師、不善人者、善人之資」とある思想を解說し、更に「人之不善、何棄之有」と云つて、第二十七章に謂ゆる「聖人常善救レ人。故無二棄人一。常善救レ物。故無二棄物一」と云ふ思想を述べ、更に

一歩を進めて、政治的國家の組織は、善人のみの存在によつて、必要とせられるものではなく、寧ろそれは、不善人の存在に支持されて、必然的に出來たものであることを云ひ、最後に於て、謂ゆる至道無難の消息と煩惱卽菩提の消息とを洩らし、以て道の絕對性を力說したものである。

第六十三章　（爲無爲章第六十三）

本文　爲二無爲一、事二無事一、味二無味一、大レ小、多レ少、報レ怨以レ德。圖二難於其易一、爲二大於其細一。天下難事、必作二於易一、天下大事、必作二於細一。是以、聖人終不レ爲レ大。故、能成二其大一。夫輕諾必寡信、多易必多難。是以、聖人猶難レ之。故、終無レ難。

新讀方　無爲を爲し、無事を事とし、無味を味ひ、小を大とし、少を多とし、怨に報ゆるに德を以てす。難をその易に圖り、大をその細になす。天下の難事は必ず易より作り、天下の大事は、必ず細より作る。是を以て、聖人は終に大をなさず。故に、能くその大をなすなり。それ輕諾は必ず寡信にして、多易は必ず多難なり。是を以て、聖人すら猶ほこれを難しとす。故に、終に難きことなきなり。

新字解　◎**爲無爲事無事味無味**――これは、蘇子由が「聖人爲二無爲一。故無レ所レ不レ爲。事二無事一。故無レ所レ不レ事。味二無味一。故無レ所レ不レ味。」と云ひ、李息齋が「爲二無爲一、則己不レ勞。事二無事一、則人不レ煩。味二無味一、則物不レ殘。」と云つて居る通り、冲虛なる道に卽せる聖人は、虛心平氣、何等の執著なく、一切の事務を處理し、一切の事象を鑑賞することを云つたものである。◎**大小多少報怨以德**

――李息齋は、この語を解して、「世所レ謂大小多少者、以レ形言也。聖人遊二於形器之外一。故大小多少、等而爲レ一。夫大小多少、尙等而爲レ一。又況於二恩怨執施之間一乎。吾所レ爲所レ施者、惟德而已。豈知二其有レ所レ怨、豈知二其有レ所レ報哉。旣無二恩怨報施之別一。又無二大小多少之異一。」と云つて居るが、要するに、この四言二句は、鑑智僧璨が「極小同レ大、忘二絕境界一。極大同レ小、不レ見二邊表一。」（『信心銘』參照）と云つて居る言葉に含まれて大乘佛教の思想と、怨親平等を主張する大乘佛教の思想とに屬するものであつて、道の絕對相の上には、大小、多少の差別や、怨親の相異なきことを云つたものである。◎**圖難於其易爲大於其細**――これは、蘇子由が「世人莫レ不二畏レ大而侮レ小。難多而易少。至二于難一、而後圖。大而後爲。則事常不レ濟矣。聖人齊二大小一、一二多少一、無レ所レ不レ畏、無レ所レ不レ難、而安有二不レ濟者一哉。」と云つて居る通り、「道に卽せる聖人は、事物が難事に至らざる前、卽ち、それが容易になし得らるる時に、その事をなしはじめ、また、事柄が大事に至らざる前、卽ち、それが細事である時に、その事をなしはじめるのである。」の意。◎**聖人終不爲大故能成其大**――これは、世の中の人は、常に小事を等閑に附して置いて、最初から大事を完成しようとするが、大事は小事の集積であるから、小事を除外して置いて、大事の完成せらるるものではない。これに反して、聖人は常に小事を忠實に完成して行くから、終に大事をなすに至るのであることを云つたものである。

◎**輕諾必寡信**――これは、他の人から賴まれた事を、前後の考慮もなく、安請合をすると、その事の實行不可能のため、世人の信用を失ふことのあることを云つたものである。◎**多易必多難**――これは事物を輕視し、事物の完成を、何でもないことと思つて、その完成に要するだけの努力を盡さずして居ると、その完成の進行上に、難事の續發することを云つたものである。◎**難之**――これは、易事、細事を完成する上に、周到なる注意を拂ふことを云つたもので、前の「圖二難於其易一、爲二大於其細一」の五言二句を承けて居る。

新譯 冲虛なる道を體得して居る聖人の現實生活を凝視して見るに、彼のなすこと、することは、すべて無爲、無事の要諦に卽し、無味を以て、あらゆる事象を鑑賞して居る。彼の言行には、山氣は毛頭もない。ただ自然のままである。彼の眼界は、無限に大きいから、彼の眼には、形態の大小、質重の多少と云ふ差別相も映じなければ、また、彼の德性は、無限大の包容力と寬容性とを有して居るから、彼の前には、怨敵と云ふものはなく、すべて、あらゆる人人が、彼の德化に浴して居る。彼は、難事は易事の發展であり、大事は細事の集積であることを、よく承知して居るから、易事が難事にならない前に、その易事を忠實に完成し、細事が大事にならない前に、細事を忠實に完成するのである。すべて天下の難事は、何時でも易事の不完成から起り、天下の大事は、す

べて細事の輕視から起つて來るものである。であるから、道に卽して居る聖人は、易事の完成、細事の實行を等閑に附して置いて、最初から難事や大事を完成しようとする樣なことはしない。彼が能く大事を完成し得るのは、玆に基くのである。世の中には、はじめから出來ないと分りきつて居る相談を、安請合して、遂には、信を天下に失ふものが多くあり、物事を無暗に輕視したために、困難の淵に陷つて居るものも、また少なくないが、元來、易事、細事の完成と云ふものは、聖人でさえも至難として居ることであるのに、世の中の人人は、兎角、物事をたやすく視て居るのである。もの、彼等が信を失ひ、困難の淵に陷るのも無理からぬことである。併し、聖人は、易事、細事を難しとし、その完成に忠實なる努力を拂ふのであるから、聖人が、困難の淵に陷ると云ふ樣のことは、決してないのである。

考證 ◎「**爲無爲事無事味無味大小多少報怨以德**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"(It is the way of the Tao) to act without (thinking of) acting; to conduct affairs without (feeling the) trouble of them; to taste without discerning any flavour; to consider what is small as great, and a few as many; and to recompence injury with kindness." (行爲することに就て、考ふることなくして行爲し、事務の面倒を感ずることなくして事務を處理し、如何なる風味も識別することなくして味ひ、

小を大の如く、少きを多きが如く考察し、傷害に返報するに親切を以てする、これ道の仕方なり。)と英譯して居る。これは、大體に於て原意を傳へて居る樣に思はれるが、〔I〕"Acting with no motive of action; managing affairs with no idea of doing so; tasting what has no taste; finding the great in what is small, the many in the few; and requiting hatred with goodness—this is the way of Tao." とでも譯したならば、一層原意に親しくなるではあるまいかと思ふ。◎「**圖難於其易爲大於其細**」と云ふ五言二句を、レッグは、〔L〕"(The master of it) anticipates things that are difficult while they are easy, and does things that would become great while they are small." (道の達人は、難事をその容易なる時に豫知し、大事たらんことを、その小事なる時に於てなすなり。)と英譯して居る。これも誤譯とは云へないが、これよりも、〔I〕"It is also the way of Tao to effect difficult things while they are easy, and manage great things while they are small." と譯した方が、原意に親しくなるではあるまいかと思ふ。◎「**天下難事必作於易天下大事必作於細**」と云ふ四言四句を、ヂャイルスは、〔G〕"The difficult things of this world must once have been easy; the great things of this world must once have been small." (この世界の難事は、曾ては必ず易事たりしことあるに相違なく、この世界の大事は、曾ては必ず小事たりしことあるに相違なし。)と英譯し、

オールドは、〔O〕"All difficult things have their origin in that which is easy, and great things in that which is small." (すべて難事は、容易なる事の中に、その起原を有し、大事は、小なる事の中に、その起原を有するなり。)と英譯して居るが、これは、何れも原意を十分に傳へて居る樣に思はれる。◎「**是以聖人終不爲大故能成其大**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"Therefore the sage, while he never does what is great, is able on that acount to accomplish the greatest things." (故に、聖人は、大なることをなさざるが故に、最も大なることを成就し得るなり。)と英譯し、ヂャイルスは、〔G〕"The sage never affects to do anything great, and therefore he is able to acheive his great results." (聖人は、如何なる大事もなすことを好まず。故に、彼は自からの大なる成果を遂げ得るなり。)と英譯して居るが、この原文は、「聖人は、最初の第一歩から、大事を完成すると云ふ樣な自負心を有せず。常に小事を、一つ一つ忠實に、完成して行くから、遂には大事を完成するに至るのである。」と云ふことを意味するのであるから、〔I〕"Therefore the sage never tries to accomplish a great thing at once, (but begins with the accomplishment of small things). So he is able finally to complete what is great." とでも譯した方が原意に親しくなるではあるまいかと思ふ。◎「**夫輕諾必寡信多易必多難**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"He who lightly promises is sure

to keep but little faith; he who continually thinking things easy is sure to find them difficult."(輕輕しく約束する人は、必ず信すくなく、物事を絶えず容易に思つて居る人は、必ずその物事の困難なることを知るに至らん。)と英譯し、オールドは、〔O〕"He who lightly assents will seldom keep his word. He who accounts all things easy will have many difficulties."(輕輕しく賛同する人の約束を守ることはすくなし。萬事を容易なりと思へる人は、多くの困難に遭遇すべし。)と英譯して居るが、これは何れも原意を十分に傳へて居る樣に思はれる。◎「**是以聖人猶難之故終無難**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"Therefore the sage sees difficulty even in what seems easy, and so never has any difficulties."(故に、聖人は容易なるものの中に、困難の存するを見る。而して、彼は如何なる困難をも有せず。)と英譯して居る。これは必ずしも誤譯とは云へないが、これよりも、オールドが〔O〕"Therefore the sage takes great account of small things, and so never has any difficulty."(故に、聖人は細事に大なる考慮を拂ふ。而して、何等の困難をも有せず。)と英譯して居る方が、原意に親しい樣に思はれる。○「圖難於其易」が「圖難乎於其易」となり、「爲大於其細」が「爲大乎於其細」となり、「天下難事」が「天下之難事」となり、「天下大事」が「天下之大事」となり、「輕諾」が「輕諾者」となり、「多易」が「多易者」となり、「故、終無難」が「故、終無難矣」と

なつて居る異本もある。

評論 この第六十三章は、僧德清が「此言聖人入道之要妙、示人以眞切工夫也。」と云つて居る通り、道に卽せる聖人の處世上に於ける道の實踐躬行の如何なるものなるかを叙述したものであるが、「爲無爲、事無事、味無味」とは、要するに、この現實生活に於て、人爲的技巧、衒氣、自負など、すべての自己執著を洗滌してしまうことであり、「大小多少」は、事物の形態に對する道者の絶對的觀察であり、「執怨以德」は絶對的人道の實行であり、「圖難於其易」以下は、難は易の開發、大は細の集積であることを說き、難事、大事の完成は、まづ易事、細事の完成を以て始むべきであることを訓誡したものである。

第六十四章（其安易持章第六十四）

本文 其安易レ持、其未レ兆易レ謀、其脆易レ破、其微易レ散。爲二之於未レ有、治二之於未レ亂。合抱之木、生二於毫末一、九層之臺、起二於累土一、千里之行、始二於足下一。爲者敗レ之、執者失レ之。聖人無レ爲。故無レ敗。無レ執。故無レ失。民之從レ事、常於二幾成一、而敗レ之。愼レ終如レ始、則無二敗事一。是以、聖人欲レ不レ欲、不レ貴二難レ得之貨一。學レ不レ學、復二衆人之所レ過、以輔二萬物之自然一、而不二敢爲一。

新讀方 その安きは持し易く、その未だ兆さざるは謀り易く、その脆きは破り易く、その微なるは散じ易し。これを未だ有らざるになし、これを未だ亂れざるに治む。合抱の木も、毫末より生じ、九層の臺も、累土より起り、千里の行も、足下より始まるなり。爲す者はこれを敗り、執る者はこれを失ふ。聖人は爲すことなし。故に敗ることなし。執ることなし。故に、失ふことなし。民の事に從ふや、常にほとんど成らんとするに於て、これを敗る。終を愼むこと始の如くなれば、則ち敗ることなきなり。是を以て、聖人は欲せざるを欲して、得難きの貨を貴ばず。學ばざるを學び

て、衆人の過ぐる所に復し、以て萬物の自然を輔けて、敢て爲さざるなり。

新字解 ◎**其安易持**――これは、林希逸が「方二其安時一、持レ之則易。及レ至レ危、則難レ持矣。」と云つて居る通り、「すべて物事は、平安、平和の狀態にある時には、これを維持しやすい。」の意。其の字は、必ずしも國家を指したものと見るに及ばず。一般の物事に就て云つたものと見るべきである。

◎**其未兆易謀**――これは、林希逸が「事之未レ萌、謀レ之則易。及二其形見一、則難レ謀矣。」と云つて居る通り、「すべて物事は、戰亂にしても、病氣にしても、その兆（徵候）の現はれざるうちに、應急手當をすれば、それを未然に防止しやすい。」の意。◎**其脆易破其微易散**――これは、文字上では、生物の未だ十分に發育せずして、脆弱なる狀態にある時には、それを推破しやすく、礦物などの、未だ結晶せずして、微粉の狀態にある時には、それを飛散せしめやすいことを云つたものであるが、この四言二句は、人生に於けるあらゆる事象に係けて見ても差支ない。◎**爲之於未有治之於未亂**――爲二之於未レ有」は、「其未レ兆易謀」に係る文句で、「物事の發生する徵候の出現前に、その應急の策を立てる。」の意。「治二之於未レ亂」は、「其安易レ持」に係る文句で、「平和の狀態が混亂狀態にならないうちに、常に治安の法を講じて、その平和を維持する。」の意。◎**合抱之木**――これは、兩手を以て抱へるほどの大木のこと。◎**累土**

――これは、「盛りあげて畚に入れた位の少量の土」の意。◎**爲者**――これは、「物事を強ひてなさんとする者」の意。◎**執者**――これは、「我意を強くして、事物に執著する者」の意。◎**常於幾成**――これは、「事業が、八九分通り出來上つた時に、卽ち、成功の間際に何時でも」の意。◎**愼終如始**――物事をはじめた時に執つて居た周到なる用意と、細心なる注意とを、その完成を遂ぐるまで、なくしない樣にして居ること。◎**欲不欲**――これは、「一般の人人の欲せざる所のものを欲する。」の意であつて、道に卽せる聖人の、常に水の低きに居るが如き狀態を以て、世に處して居ることや、または世人の棄てて顧みない自然物を、聖人の愛重して居ることなどに就て云つた言葉である。◎**學不學**――これは、「一般の人人の學ばざる所のことを學ぶ。」の意。◎**復衆人之所過**――これは、「一般の人人が、看過して顧みない所に復歸する。」の意。復は、復歸して、そこに安住して居ること。◎**不敢爲**――これは、事物を處理する上に於て、その自然性に從ひ、敢て人爲的干涉をなさざることを云つたものである。

新譯 すべて一國のことであつても、一家のことであつても、萬事物事は、その安泰、平和の狀態にある時に、細心の注意を拂つて居れば、その安泰、平和の狀態を何時までも持續することが出來るのであるが、世の中の人は、國が亂れかけ、家が傾きかけなければ、容易に維持法を講じないのである。また、戰亂にしても、病氣にしても、未だその徵候の現はれない平和時代に於て、健康狀態にある時に於て、平和維持の策を講じ、保健の方法を考へて居れば、戰亂、病氣を未然に防ぐことが出來るのであるが、世の中の人は、中中そんなことはしないのである。虎の子でも、狼の子でも、乃至大鷲の子でも、未だ生長を遂げない脆弱な時に、それを打殺してしまへば、何の造作もなく、殺してしまふことが出來、また、惡政黨であつても、惡勞働者の群であつても、その團結力の微弱な時に、解散させてしまへば、これも無造作に解散させてしまうことが出來る。すべて物事は、まだ發生しないうちに、その發生した場合の應急法を講じ、まだ混亂の場合に立いたならないうちに、混亂に處するの策を立てて置くと云ふことが、肝腎である。上敍の理由は、お互の實際に見聞して居る事實に徵して見れば、明白になるではないか。卽ち翳蔚と茂つて居る合抱の大木も、もとはと云へば、毫末にも比すべき種子から生じたものであるし、九層の高臺も、畚で一杯づつ積みあげたものに外ならない。また、千里の旅にしても、まづ足下の第一歩からはじめなければならないのである。この眼前の事實を仔細に觀察して見ると、毫末の種子の合抱の大木になるのも、累土の積んで九層の高臺となるのも、足下の一歩の增して千里の旅となるのも、すべて自然のままの進行によるものである。物事は、一足飛で成功するものではない。强ひて物事を一足飛で成功させ

ようとすれば、必ず失敗するにきまつて居る。我意を強くして、事物に執著し、目的遂行のために不自然なる手段をとると、必ず目的物を失つてしまふのは、わかりきつた話である。聖人は、この道理をよく了解して居るから、物事を無理にしようともせず、我執を逞しふして、不自然なる行動を以て、事物を獲得しようともしないから、失敗もしなければ、また損失もしないのである。世の中の人のやつて居ることを見て居ると、彼等はすべての場合に於て、物事を八九分通り遂行した時に、必ず失敗してしまう。これは何故であらうか。それは、最初の決心と注意とを、事業の進むるにつれて徐徐に失つてしまうからのことである。終りを愼むこと始の如く、最初もつて居た周到なる用意と、綿密なる注意とを、事業の完成まで持續して居さえすれば、中途で失敗を招く樣のことはないのである。故に道に卽せる聖人は、常に一般民衆の欲しない所のことを欲し、一般民衆の尊重して居る財貨を貴ばず、一般民衆の學ばない所のことを學び、一般民衆の看過して顧みない所に復歸して、そこに安住し、斯くして、萬物の自然の進展に參與し、その自然の進展を輔佐して居るのであるが、すべて、その處世の要諦は、敢て自から爲さざる所に存するのである。

[原文] ◎「**其安易持其未兆易謀其脆易破其微易散**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"That which is at rest is easily kept hold of; before a thing has given indications of its presence, it is easy to take

measures against it; that which is bristle is easily broken; hat which is very small is easily dispersed." (安靜なるものは保ち易く、事物の出現の徵候ある前に、それに對する手段を講ずることは易く、もろきものは破れ易く、極めて微小なるものは放散し易し。)と英譯して居る。これは大體に於て、原意を傳へて居る樣に思はれるが、私は、これを、〔I〕"Things can easily be maintained when they are at peace; things can easily be prevented before they have appeared; things can easily be destroyed when they are still fragible and weak; things can easily be dispersed when they are still in fragments." とでも譯したならば、今少し原意に親しくなるではないかと思ふ。

◎「**爲之於未有治之於未亂**」と云ふ五言二句を、レッグは、〔L〕"Action should be taken before a thing has made its apperrance; order should be secured before disorder has begun." (行動は、事物の出現前に於てとるべく、秩序は、混亂に先だつて確保せらるべし。)と英譯して居る。これは原文に忠實な譯であるが、これよりも、ヂャイルスが、〔G〕"Take precautions before the evil appears; regulate things before disorder has begun." (凶事の起らざるに先だち、豫防手段を講ぜよ。混亂の生ぜざる前に於て、事物の取締りをなせよ。)と英譯して居る方が、今一層原意に親しいではないかと思ふ。◎「**合抱之木生於毫末九層之臺起於累土千里之行始於足下**」と云ふ四言六句を、レッグは、〔H〕

"The tree which fills the arms grew from the tiniest sprout; the tower of nine storeys rose from a (small) heap of earth; the journey of a thousand Li commenced with a single step." (「抱(ひとかか)へもある木は、極めて微小なる萠芽より生ぜしなり。九層の臺は、小さき累土より起りしなり。千里の旅は、一歩より始まりしなり。)と英譯して居る。これは原文に忠實な譯ではあるが、生・起・始の三箇の動詞は、"grew" (生ぜしなり) "rose" (起りしなり) "commenced" (始まりしなり) と譯して、時態(テンス)を過去にするよりも、"grows" (生ずるなり) "rises" (起るなり) "commences" (始まるなり) と譯して、時態(テンス)を現在にする方が、原文に親しくなるではないかと思ふ。◎「**爲者敗之執者失之**」と云ふ四言二句を、レッグは、〔E〕"He who acts (with an ulterior purpose) does harm; he who takes hold of a thing (in the same way) loses his hold." (何かの思はくを以て行爲するものは、害をなし、何かの思はくを以て事物を保持するものは、その保持を失ふ。) と英譯して居る。これは、必ずしも誤譯とは云へないが、私は、これを、〔I〕"He who tries to do a thing by force will finally spoil it; he who clings to a thing will finally lose it." とでも譯した方が、原意に親しくなるではなからうかと思ふ。◎「**聖人無爲故無敗無執故無失**」と云ふ文句を、レッグは、〔E〕"The sage does not act (so), and therefore does no harm; he does not lay hold (so), and

therefore does not lose his hold." (聖人は、左樣に行爲せず。故に害をなさず。左樣に保持せず。故に、保持を失はず。) と英譯して居る。これは、必ずしも誤譯とは云へないが、私は、これを〔I〕"The sage does not try to do a thing in such a way, and therefore does not spoil it; he does not cling to a thing and therefore does not lose it." と譯したならば如何かと思ふ。◎「**民之從事常於幾成而敗之愼終如始則無敗事**」と云ふ文句を、レッグは、〔E〕"(But) people in their conduct of affairs are constantly ruining them when they are on the eve of success. If they were careful at the end as (they should be) at the beginning, they would not ruin them." (併し、人人は、事務の處理に於て、その成功の眞際に當り、常にその事務を失敗に終らしむ。若し彼等が、最初に於て注意深くあるべきが如く、最終に於て注意深くありたりしならば、事務を失敗に終らしむることなかりしならん。) と英譯し、オールドは、〔O〕"But the common people, in their undertakings, fail on the eve of success. If they were as prudent at the end as they are at the beginning, there would be no such failures." (併し、一般の人人は、彼等の事業に於て、その成功の眞際に當つて失敗を招く。若し、彼等が最初に於ける如く、最終に於て愼重の態度をとりしならば、左樣なる失敗はあらざるべし。) と英譯して居るが、これは何れも原意を十分に傳へて居る樣に思はれる。◎「**是以聖人欲**

不欲不貴難得之貨學不學復衆人之所過以輔萬物之自然而不敢爲」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"Therefore the sage desires what (other men) do not desire, and does not prize things difficult to get; he learns what (other men) do not learn, and turns back to what the multitude of men have passed by. Thus he helps the natural development of all things, and does not dare to act (with an ulterior purpose of his own). (故に、聖人は他の人人の欲せざる所のものを欲し、得難きものを貴ばず、他の人人の學ばざる所のことを學び、群衆の過ぎ去りたる所のものに復歸するなり。斯くして、聖人は萬物の自然の發展を輔佐し、自からの思はくを以て、敢て行爲せざるなり。)と英譯して居るが、これは原意に親しい譯である樣に思はれる。○「其脆易レ破」が「其脆易レ判」となり、「爲二之於未レ有」が「爲二之乎其未レ有」となり、「治二之於未レ亂」が「治二之乎其未レ亂」となり、「合抱之木」が「合㚟之木」となり、「則無二敗事一」が「則無二敗事一矣」となり、「輔二萬物之自然一」が「恃二萬物之自然一」となり、「而不二敢爲一」が「而不二敢爲一也」となつて居る異本もある。

評論 この第六十四章は、大體に於て、第六十三章の思想を繼承し、それを敷衍したものと見ることが出來る。卽ち、「爲二之於未レ有、治二之於未レ亂。」と云ふ思想は、第六十三章に「圖二難於其易一、爲二大於其細一。」とある思想に類似し、「合抱之木、生二於毫末一、九層之臺、起二於累土一、千里之行、始二於足下一。」と云ふ言葉は、第六十三章の「天下難事、必作二於易一、天下大事、必作二於細一。」と云ふ言葉を敷衍したものである。要するに、この第六十四章は、些細なること、容易なることをなすに當つても、それを些事、易事として輕視せずに、最も愼重なる態度を以て、それに臨むべきこと、また事務の處理に於ては、常に無爲、無執の念を以て、それに當るべきことを力說したものである。

第六十五章　（古之善爲道章第六十五）

本文　古之善爲レ道者、非二以明一レ民。將二以愚一レ之。民之難レ治、以二其智多一。以レ智治レ國、國之賊。不二以レ智治一レ國、國之福。知二此兩者一、亦楷式。常知二楷式一、是謂二玄德一。玄德深矣遠矣。與レ物反矣。乃至二於大順一。

新讀方　古の善く道を爲むるものは、以て民を明かにするにはあらず。將に以てこれを愚にせんとするなり。民の治め難きは、その智の多きを以てなり。智を以て國を治むるは、國の賊なり。智を以て國を治めざるは、國の福なり。この兩者を知るは、また楷式なり。常に楷式を知るは、これを玄德と謂ふ。玄德は深し遠し。物とは反せり。乃ち大順に至るなり。

新字解　□**古之善爲道者**――これは、「上古に於て、沖虛、無爲の大道を以て、民衆の上に居た道的統治者」の意。「爲レ道」は、「道の實踐躬行」の意に解しても、又は「道に一如せること」の意に解しても差支ない。□**明民**――これは、佛教に謂ゆる民衆を世智辯聰にすること。卽ち、人民を驅つて教育萬能の中毒にかからせ、彼等を惡がしこくすること。□**愚之**――これは、「知的に暗愚にする」の意ではなく、人民をして自然の道に卽せしめ、何等の邪智、奸策なく、常に質朴なる生活を送らしむること。□**國之賊**――これは、「國家の禍害」の意。□**此兩者**――これは、「以レ智治レ國、國之賊」と「不二以レ智治一レ國、國之福」との二箇の斷定を指したものである。□**楷式**――これは、『老子元翼』に「楷、模也。式、法則也。」とある通り、「天下の模範、典型たるべき大人物の資格上の實質」の意。□**深矣遠矣**――これは、『老子元翼』に「下徹、曰レ深。旁周、曰レ遠。」とある通り、縱にも橫にも廣大無邊なること。□**與物反矣**――この言葉を解して、林希逸は「反者復也。與二萬物一皆反復而求二其初一、則歸二於大順之中一矣。大順、卽自然也。」と云ひ、呂吉甫も「與レ物反二歸於本一矣。能大同而大順矣。」と云つて居る。この見解に從へば、この言葉は、次の「乃至二於大順一」と共に「物と反りて、乃ち大順に至るなり。」と讀み、「（この玄德は）天地萬物と共に大順に歸著するのである。」の意に解すべきであるが、恐らく、これは老子の原意ではあるまい。私の見解によれば、これは、玄德の深遠にして、深遠ならざる世上一般の事物と、その趣を異にして居ることを云つたものであつて、反の字は反復の意ではなく、反對の意に解すべきである。□**大順**――これは、絕對的寬容性の意で、道のあらゆる事象を、その絕對相の中に抱擁し、受容して、如何なるものとでも協調することを云つたものである。換言すれば、大順は、玄德の絕對的適應性である。

新譯　今時の爲政者は、何でもかでも、民衆を賢くしさへすれば、世の中が泰平になるものと思

つて、無暗に民衆を、燐寸(マッチ)の軸木製造機械の樣な敎育法で、敎育することに努力して居るが、老子(わし)の理想として居る上古の爲政者は、そんなことはしなかつたものである。彼等は、民衆を惡(わる)がしこくする樣なことはしない。民衆を自然の大道に則(のつと)らしめて、質朴、正直、無邪氣の生活を送らしめたものである。元來、民衆の統治の困難は、何によるのであるかと云ふに、それは民衆に下(くだ)らぬ智慧が多すぎるからのことである。無暗に智慧をつけることばかり計畫し、實施して居るものだから、役人よりも、智的に優等の犯罪者が續出し、ために大きな監獄を造つて、それで世界一の監獄だなんか云つて、自惚れなければならぬ樣な馬鹿げたことになるのである。智を以て、國を統治するのは、それは國家の禍害を生成するのも同然である。國家の幸福は、智を以て國を統治しないことを第一歩として、增進されるのである。智を以て國を治むるは、國の賊、智を以て國を治めないのが國の福であると云ふこの自明の眞理を理解すること、これが、天下の模範たり、典型たり得る資格の獲得である。玄妙なる德とは、要するに、この自明の眞理の體得そのものに外ならないが、この玄德たるや、その內容は實に深遠であつて、世上一般の平平凡凡たる事物とは、その實質を異にして居る。卽ち、この深遠なる內容を有する玄德は、宇宙萬物に對して、絕對的適應性を有し、如何なるものをも、その絕對相の中に抱擁してしまうのである。

考察　◎「古之善爲道者非以明民將以愚之民之難治以其智多」と云ふ文句を、レッグは、〔F〕"The ancients who showed their skill in practising the Tao did so, rot to enlighten the people, but rather to make them simple and ignorant. The difficulty in governing the people arises from their having much knowledge." (道の實行に於て巧妙を示せし古人は、人民を明(あきら)かにせんとしてにはあらず、寧ろ質朴、無智にせんとして、その巧妙を示したるなり。人民を治むる上の困難は、彼等に多くの智識あることより生ずるなり。) と英譯し、ヂャイルスは、〔G〕"In ancient times those who knew how to practise Tao did not use it to enlighten the people, but rather to keep them ignorant. The difficulty of governing the people arises from their having too much knowledge." (古代に於て、如何にして道を實行すべきかを知りし人は、人民を明(あきら)かにするために、道を用ひず、寧ろ彼等を無智のままにて置かんために、道を用ひたるなり。人民を治むることの困難は、彼等に智識の多すぎることより生ずるなり。) と英譯して居るが、これは何れも、原意を十分に傳へて居る樣に思はれる。◎「**以智治國國之賊不以智治國國之福**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"He who (tries to) govern a state by his wisdom is a scourge to it; while he who does not (try to) do so is a blessing." (自己の智慧を以て國を治めんとするものは、その國に對しては、疾病神にして、しかな

ざるものは、祝福なり。)と英譯して居る。これは必ずしも誤譯とは云へないが、これよりも、ヂャイルスが、〔G〕"He who tries to govern a kingdom by his sagacity is of that kingdom the despoiler; but he who does not govern by sagacity is the kingdom's blessing."(自己の巧智を以て、王國を治めんとするものは、その王國の掠奪者なり。されど巧智を以て王國を治めんとせざるものは、その王國の祝福なり。)と英譯して居る方が、原意に親しい樣に思はれる。卽ち、「以レ智治レ國」の智は、善意に於ける智のみを指したものではなく、惡意に於ける智も含んで居るのであるから、レッグの譯文に於ける"Wisdom"(智慧)よりも、ヂャイルスの譯文に於ける"Sagacity"(巧智)の方が、原意に近いではないかと思ふ。而して、オールドは、「以二其智多一」の智も、「以レ智治レ國」の智も、何れも"Policy"(計略)と譯して居るが、この"Policy"(計略)の方が"Sagacity"(巧智)よりも、この場合に於て老子の意識して居た智に近いではあるまいかと思ふ。

亦楷式常知楷式是謂玄德玄德深矣遠矣與物反矣乃至於大順

「知此兩者」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"He who knows these two things finds in them also his model and rule. Ability to know this model and rule constitutes what we call the mysterious excellence (of a governor). Deep and far-reaching is such mysterious excellence, showing indeed its possessor as opossite to others, but leading them

to a great conformity to him."の兩者を知るものは、その中に於て、また模範と典型とを見出す。この模範と典型とを知る能力は、我等が統治者の神秘なる美德と稱する所のものを組成せるなり。かかる神秘なる美德は、深遠にして、實際にその所有者の他の人人に相反せることを示すも、彼等を導きて彼自身と偉大なる調和を遂げしむるなり。)と英譯して居る。この原文は、この樣に英譯し得られないこともないが、この譯文は、私の見解とは、よほど相異して居る。今これを私の見解によつて英譯するならば、〔I〕"To know these two things is also a perfect principle (as regards governing the people); to keep this principle always in mind is to possess the mysterious virtue, which is deep and far-reaching. Although it is contrary to any other virtue, it is this which adapts all things to its great perfection of nature."とでもなすべきであらう。○「以二其智多一」が、「以二其智多一也」となり、「以レ智治レ國、國之賊」が「故以レ知治レ國、國之賊也」となり、「不二以レ智治レ國、國之福」が「不二以レ知治レ國、國之福也」となり、「知二此兩者一、亦稽式也。能知二稽式一」となり、「常知二楷式一」が「常知二此兩者一、亦楷式也。常知二楷式一」となり、「玄德」が「元德」となつて居る異本もある。

評論 この第六十五章は、僧德清が「此言下聖人治レ國之要、當以二樸實一爲レ本、不レ可二以レ智誇レ民也。」と云つて居る通り、國家の安康、民衆の平和、幸福は、決して人智の增進によつて庶幾し得ら

れるものではないから、國家統治の上に、巧智を弄することは、宜しくこれを廢すべきであることを力說したものである。この老子の主張は、一見した所では、極端なる議論である樣に思はれるが、現代に於ける社會的罪惡の大部分は、徒らに敎育を奬勵して、民衆に惡智慧をつけ、彼等をして、巧妙に惡事をなすことを得せしめた結果に外ならないとも云ひ得らるる眼前の事實に照らして見れば、この老子の主張にも、現代人の宜しく鑑賞すべき眞理が、含まれて居るではあるまいか。

第六十六章（江海爲百谷王章第六十六）

本文 江海所三以能爲二百谷王一者、以三其善下一之。故、能爲二百谷王一。是以、聖人欲レ上レ民、必以レ言下レ之、欲レ先レ民、必以レ身後レ之。是以、聖人處レ上、而民不レ重、處レ前、而民不レ害。是以、天下樂レ推、而不レ厭。以三其不レ爭故、天下莫二能與レ之爭一。

新讀方 江海のよく百谷の王たる所以のものは、そのよくこれに下るを以てなり。故に、よく百谷の王となるなり。是を以て、聖人は民に上たらんと欲せば、必ず言を以てこれに下り、民に先だたんと欲せば、必ず身を以てこれに後るるなり。是を以て、聖人は上に處るも、而も民は重しとせず、前に處るも、而も民は害とせざるなり。是を以て、天下は推すことを樂みて、而も厭はず。その爭はざるを以ての故に、天下はよくこれと爭ふことなきなり。

新字解 ◎**其善下之**——これは、江海が百谷よりも低下なる處に居ることを云つたものである。之の字は、百谷を指したもの。◎**以言下之**——これは、自己の內心に謙遜して居ることを、言葉の上に於て表示することを云つたもので、帝王の自稱語なる孤・寡・不穀・朕など云ふ文字は、何れも謙遜の意義を有して居るのである。之の字は、民を指したもの。◎**以身後之**——これは、行動の上に於て、謙

遜の意を表示することを云つたもので、人前で無暗に大威張りをしないこと。之の字は、民を指したもの。◻**不重**――これは、威壓されて居る樣に感じないこと。◻**不害**――これは、邪魔物視しないこと。◻**樂推**――これは、喜んで推尊することに退屈しない。」の意に解しても、「(聖人)を忌厭しない。」の意に解しても差支ない。

新譯 天下の谿谷から流れ出る幾多の水は、淨きも穢れたるも、すべて江海に流れ込んでしまう。實に江海は、百谷の朝宗する所で、正にこれ百谷の王とも稱すべきものであるが、その江海の百谷の王たり得るのは、何によるのであるか。それは、江海が常人の嫌ふ低下の處に安んじて居るからのことである。江海が威張りかえつて、高い處に居れば、何物もそれに歸服する樣のことはないのである。であるから、この道理に悟達して居る聖人は、民衆の上に立ち、民衆を自己に歸服せしめようとするには、必ず自己の謙德を言葉の上に表明し、民衆の先に立ち、彼等を指導しようとするには、必ず自己の謙德を行動の上に表明し、民衆と前後を爭ふ樣のことはしないのである。聖人が、民衆を統治する上に於て、斯の如き謙遜なる態度を、その言行の上に表明すれば、聖人が民衆の上にあつても、民衆は聖人に威壓されて居る樣の感じはなく、聖人が民衆の先に立つて居ても、民衆は聖人を眼障りとも、邪魔物ともしないのである。而して、天下の民衆は、常に斯の如き

聖人を推尊することを、自分達の欣幸とする樣になるのである。要するに、道に卽せる聖人は、人と爭ふことをしないから、天下何人も聖人と爭ひ得るものはないのである。

考證 ◻「**江海所以能爲百谷王者以其善下之故能爲百谷王**」と云ふ文句を、レッグは、〔E〕"That whereby the rivers and seas are able to receive the homage and tribute of all the valley streams, is thelr skill in being lower than they;—it is thus that they are the kings of them all."(河海が、すべての溪流の尊敬と貢物とを受け能ふことは、溪流よりも低下なることに依て、河海の巧妙なるによる。斯くして、江海はすべての溪流の王たるなり。)と英譯して居るが、これよりも、ヂャイルスが、〔G〕"The reason why rivers and seas are able to be lords over a hundred mountain streams, is tlat they know how to keep below them. That is why they are able to reign over all the mountain streams."(河海が、百谷の王たり得るは、河海が、百谷よりも、如何にして低きに居るべきかを知れるによる。これ、そのすべての溪流を支配し得る所以なり。)と英譯して居る方が、原意に親しい樣に思はれる。私は、この文句を、〔I〕"The reason why the rivers and seas are the rulers of all the streams is due to the fact that the former are well contented with their lower position than that of the latter. Thus the rivers and seas are always the rulers of all the

streams." と英譯したならば、如何かと思ふ。◎「**是以聖人欲上民必以言下之欲先民必以身後之**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"So it is that the sage (ruler), wishing to be above men, puts himself by his words below them, and, wishing to be before them, places his person behind them." (聖人なる支配者が、民に上たらんと欲する時に、自からの言葉を以て、彼等に下り、彼等に先だたんと欲する時に、自からの身を以て、彼等に後るるは、これが故なり。)と英譯して居るが、これは原意を充分に傳へて居る樣に思はれる。◎「**是以聖人處上而民不重處前而民不害**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"In this way though he has his place above them, men do not feel his weight, nor though he has his place before them, do they feel it an injury to them. (斯の如きにより、聖人は民の上に處るも、民は彼の重みを受けず。また、民の前に處るも、民は彼を害物と思はず。)と英譯して居るが、これは原意に親しい樣に思はれる。◎「**是以天下樂推而不厭以其不爭故天下莫能與之爭**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"Therefore all in the world delight to exalt him and do not weary of him. Because he does not strive, no one finds it possible to strive with him." (故に、世界に於けるすべてのものは、聖人を崇敬することを喜び、彼をうるさがらず。彼は爭はざるが故に、何人も彼と爭ふこと能はず。) と英譯して居るが、これは原文に親しい適譯である樣に思はれる。○「以二其善下一之」が「以二其善下一之也」となり、「是以、聖人欲レ上レ民」が「是以、欲レ上レ民」となり、「必以レ言下レ之」が「必以二其言一下レ之」となり、「必以レ身後レ之」が「必以二其身一後レ之」となり、「處レ上」が「處二之上一」となり、「處レ前」が「處二之前一」となり、「民不レ害」が「民不レ害也、」又は「民不レ能レ害」となり、「以二其不レ爭」が「不以其不レ爭」となつて居る異本もある。

評論 この第六十六章を一貫して居る教訓は、老子の口癖の樣に、常に反復力說して居る謙讓の德であつて、殊に民衆の上位に立つもの、民衆の先導をなさんとするものは、善くその謙讓の德を守るにあらざれば、その地位の安全も、その目的の遂行も、到底、不可能なることを云つたものであるが、この章に於ける思想の表現には、ごつごつした所なく、その老子の思想が、實にすらすらと叙述されて居る樣に思はれる。

第六十七章 （天下皆謂章第六十七）

本文 天下皆謂三我大似三不肖一。夫惟大故、似三不肖一。若肖、久矣其細。我有三三寶一。寶而持レ之。一曰、慈。二曰、儉。三曰、不三敢爲二天下先一。慈故、能勇。儉故、能廣。不三敢爲二天下先一故、能成器長。今捨レ慈且レ勇、捨レ儉且レ廣、捨レ後且レ先。死矣。夫慈以戰則勝、以守則固。天將三救レ之、以レ慈衞レ之。

新讀方 天下はみな我を大なれども不肖に似たりと謂ふも、それだけ大なるが故に、不肖に似たるなり。もし肖ならば、久しきかなその細なること。我に三寶あり。寶としてこれを持す。一に曰く慈。二に曰く、儉。三に曰く、敢て天下の先とならざること。慈なるが故に、よく勇なり。儉なるが故に、よく廣し。敢て天下の先とならざるが故に、よく成器の長たり。今は慈を捨ててまさに勇ならんとし、儉を捨ててまさに廣からんとし、後たることを捨ててまさに先たらんとす。死なるかな。それ慈は以て戰へば則ち勝ち、以て守れば則ち固し。天はまさにこれを救ひ、慈を以てこれを衞らんとす。

標題解 ◎**大似不肖**——これは、沈一貫が「與二世人一類、謂二之肖一。不レ類、謂二之不肖一。人謂、老子之道、大則大矣。宜與二世人一不二相肖一然。」と云つて居る通り、「老子の說く所の道なるものは、大なるものの樣ではあるが、世上一般に云ふ所の大なるものほど大ではない樣である。」の意。◎**夫惟大故似不肖**——これは、『老子元翼』に「道大者、不レ可二以方似一。故人見三其似二不肖一。」とある通り、「老子の說く所の道は、絕對的に大なるものであるから、それで、世上一般の人人には、不肖の如く見えるのである。」の意。◎**若肖久矣其細**——これは、第四十一章に「不レ笑不レ足二以爲レ道」とある言葉と同一思想に屬する言葉であつて、沈一貫が「若肖不レ可レ謂二之大一矣。」と云つて居る通り、「若し老子の說く所の道なるものが、世上一般の謂ゆる大なるものであつたならば、それは、もとから瑣細のもので、敢て貴ぶべき性質のものではない。」の意。◎**慈・儉・不敢爲天下先**——これは、『老子元翼』に「慈者、仁愛之本。儉者、畜德之基。不三敢爲二天下先一、則無レ所レ不二虛下一、無レ所レ不二承育一。」とあり、蘇子由が「吾之所レ謂慈仁、儉約、廉退者、皆世之所レ謂不肖者也。」と云つて居る通り、この三つは、何れも世上一般の人人に、不肖視されるものであるが、慈は、我の中に非我を抱擁し、圓融せんとする絕對的愛であつて、佛敎に謂ゆる「佛陀の慈悲」にあたり、儉は、宇宙間のあらゆる事物を、道の構成素と見、その事物を本來の目的のために活用し、活動せしめんとする德性であつて、現代の經濟學上に於て、普通に使用されて居る儉約の意ではない。不三敢爲二天下先一は、謂ゆる靜退

のことで、如何なる場合に於ても、他の人人と先後を爭つて、他の人人の先に立つことをしないことを云つたものである。◎**慈故能勇**――これは、蘇子由が「世以二勇決一爲レ賢、而以二慈忍一爲レ不レ及レ事。不レ知下勇決之爲レ挫、而慈忍之不レ可レ勝、其終必至二于勇一上」と云つて居る通り、萬物に對して、絶對的愛を有するものは、遂には、萬物を精神的に征服し得る可能性を有して居ることを云つたものである。◎**儉故能廣**――これは、蘇子由が「世以二廣大一蓋レ物、而以二儉約一爲レ陋。不レ知二廣大之易レ窮、而儉約之易レ足、其終必至二于廣一也。」と云つて居る通り、如何に瑣細な事物でも、すべてそれを道的に活用し、また活動せしめんとするものにとつては、天下に棄つべきものは、一つもないのであるから、その人の活動範圍は、無限に廣大であることを云つたものである。◎**成器長**――これは、「萬民の元首」又は「萬物の首長」の意。成器は、廣義に解すれば「萬物」、狹義に解すれば「萬民」の意である。◎**死矣**――これは、「個性の滅絶に終るのみ。」の意。◎**天將救之以慈衞之**――古來これを「天まさにこれを救はんとす。慈を以てこれを衞ればなり。」と讀んで居る學者もある。これは必ずしも誤讀とは云へないかも知れないが、私の見解によれば、これは宜しく「天はまさにこれを救ひ、慈を以てこれを衞らんとす。」と讀み、「(慈を以て戰ひ、慈を以て守るもの)を、天はまたそれを救ひ、それを衞るに、慈を以てする。」の意に解すべきである。

新譯 天下の人人は、老子のことを評判して、「あの老子は、何時も大きな法螺見た樣なことを言つて、道を說き、人を煙に捲いて居るが、世の中の謂ゆる偉大なものとは、あんな老子の言ふ道見た樣な小さなものではない。」と云つて居る。それは、老子の道が、絶對的に偉大であるから、彼等が、老子の道と比較すべき何物をも發見し得ざるために、自分等の小なる道に似て居ないなんか云つて居るまでのことである。似て居ないので幸。若しも、彼等の小さな道に似てでも居たならば、それは、老子の道が、元來小さいものであると云ふ證據になつて、老子は飛んだ迷惑を蒙るからである。老子には、三つの寶がある。老子は常にこの寶を保持し、それによつて、この世に處して居るのであるが、この三つの寶の第一は、慈。第二は、儉。第三は、敢て天下の先とならないこと。この三つである。すべて道に卽せる聖者は、天下のあらゆる事物を、自己と共に道に同和し、そこに絶對的共存同榮を生成せんとする慈悲心を有して居るが故に、彼には、天下に敵と云ふものはなく、あらゆる事物が、その慈悲心に歸入してしまうのである。絶對的勇とは、正にこのことである。またその樣な聖者にとつては、天下に棄人もなく、棄物もなく、彼は、あらゆる事物を、その自然のままに生存し、活動せしめて、そこに道の包括せる萬有の自然性を發揮せしめんとする絶對的厚生利用(儉)の企圖を有して居るが故に、彼の厚生利用の上に於ける活動範圍は、實に無限で

あり、廣大である。世の中の人人は、あらゆる社會的方面に於て、われ先に、われ先にと、何でもかんでも他の人人よりも先にならうとして、日夜奔走して居るが、その結果は、何時も失敗に終るのである。道に卽せる聖者は、そんなことはしない。何時も靜退の德を守つて、敢て天下の人人の先に立たうとはしない。が、謂ゆる「さがるほど、人の見あぐる藤の花」で、その靜退の德を守ることによつて、彼は常に萬民の首長となるのである。然るに、現今の人人のやつて居ることは、どうか。慈を捨てて顧みないで居ながら、ただ暴力を以て天下に勇者たらんと企圖し、儉を捨てて顧みないで居ながら、無暗に厚生利用の途の廣からんことを企圖し、天下の人人に後たることを好まずしておいて、徒らに人の上に立たうとして居る。そんなことで、どうしてその目的が達成し得られよう。その結果は個性の滅絕にきまつて居る。戰爭と云ふ樣なことは、道の上に於ては、好ましからぬことではあるが、萬やむを得ずして、他國に對して戰爭に從事するにしても、謂ゆる怨敵平等の絕對的愛を以てすれば、必ず勝利を占め、また、敵から攻められた時にでも、その絕對的愛を以て自國を守つて居れば、その守りは固く、容易に敵に破られる樣のことはないのである。それは何故であるかと云ふに、自國民に對しても、他國民に對しても、絕對的愛を以て臨むものは、天もそれを救ひ、それを衞るに、絕對的愛を以てするからである。

考證 ◎「**天下皆謂我大似不肖夫惟大故似不肖若肖久矣其細**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"All the world says that, while my Tao is great, it yet appears to be inferior (to other systems of teaching). Now it is just its greatness that makes it seem to be inferior. If it were like any other (system), for long would its smallness have been known!" (天下は、我が道は大なるも、他の教理に劣れる如く見ゆと謂ふ。それを劣れる如く見えしむるものは、それの有する偉大性なり。若し、それが他の教理の如くなりしならば、久しき間、その細小なることは知られたりしならん。)と英譯して居る。これは原意に觸れて居る樣に思はれるが、私は、これを、〔I〕"All the world says that my Tao is great, but its greatness appears unlike that which is commonly recognized. It is just because my Tao is absolutely great that nothing can be fonnd to compare with it. Were the greatness of my Tao like the greatness that is commonly spoken of, it would long ago have been recognized as small." と英譯したならば、今一層原意に親しくなるではないかと思ふ。◎「**我有三寶寶而持之一曰慈二曰儉三曰不敢爲天下先**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"But I have three precious things which I prize and hold fast. The first is gentleness; the second is economy; and the third is shrinking from taking precedence of others." (併し、我は三つの貴重なる物を有し、我

はそれを貴び固く持す。一は柔和、二は儉約、三は他のものの上位に着くことを憚ることない。)と英譯して居る。これは必ずしも誤譯とは云へないが、慈を"Gentleness"(柔和)と譯し、儉を"Economy"(儉約)と譯しては、老子の原意を離れるではないかと思ふ。オールドも、レッグと同じく、慈を"Gentleness"(柔和)、儉を"Economy"(儉約)と譯し、ヂャイルスは、慈を"Gentleness"(柔和)儉を"Frugality"(節儉)と譯して居るが、儉を"Frugality"(節儉)と譯するのは、"Economy"(儉約)と譯するよりも、意義が縮少されて、原意に遠くなる樣に思はれる。申すまでもなく、譯語の上に於ける相異は、原文に對する譯者の見解の相異に基くもので、詮方なきことではあるが、今私の見解によつて、この文句を英譯するならば、〔I〕"I have three precious principles, which I prize and keep as treasures. The first is the universal love. The second is the universal utilization of all things. The third is humility, which enables one to be contented with a position below others." とでもなすべきであらう。◎「**慈故能勇儉故能廣不敢爲天下先故能成器長**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"With that gentleness I can be bold; with that economy I can be liberal; shrinking from taking precedence of others, I can become a vessel of the highest honour." (その柔和を以て、我は大膽になり能ふ。その儉約を以て、我は寛大になり能ふ。他のものの上位に

着くことを憚ることによつて、我は最高なる名譽の器となり能ふなり。)として居るが、これは私の見解とは、よほど相異して居る。殊に「能成器長」と云ふ句を〔L〕"I can become a vessel of the highest honour." (我は最高なる名譽の器となり能ふなり。)と英譯して居るのは、如何なる註解によつたものか、私には、一向見當がつかない。この「成器長」と云ふ語をヂャイルスは、〔J〕"A leader among men" (人類間の指導者)と譯し、オールドは、〔O〕"A vessel of honour" (名譽の器)と譯して居る。オールドの譯は、レッグのと同樣に譯語の憑據が不明であるが、ヂャイルスの譯語は、原意を傳へて居る樣に思はれる。この器と云ふ文字は、第二十八章に「樸散則爲レ器」とある器と同樣、道の現象化せる萬物のことであり、成器とは、萬物の意にも解し得られるが、茲では、萬民の意に解すべきである。今この文句を、私の見解によつて英譯するならば、〔I〕By the exercise of universal love, one can make all things devoted to oneself, who may be called the possessor of absolute bravery. By exercising the universal utilization of all things, one can possess an unlimited sphere of activity. By having been content with a humble position below others, one can become the head of the people. とでもなすべきであらう。◎「**今捨慈且勇捨儉且廣捨後且先死矣**」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕"Now-a-days they give up gentleness and are all for being bold;